

博士（人間科学）学位論文

リスクと生活保全の人類学的研究  
フィリピン・パナイ島汽水域住民の事例

Grappling with Everyday Risks

The case of coastal town people in western visayas , Phillippines

2004 年 1 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

小林 孝広

Kobayashi, Takahiro

研究指導教員： 蔵持 不三也 教授

# 目 次

|   |    |
|---|----|
| 序論 .....                                | 1  |
| 1 目的とその背景                               | 2  |
| 2 先行研究の批判的検討                            | 3  |
| 3 本研究における研究視角と調査方法                      | 6  |
| 4 調査対象地の概況                              | 11 |
| 5 本論の構成                                 | 13 |
| 第1章 日常的リスク - delikado と diskarte .....  | 16 |
| 1 リスク・イメージとリスク認識の仲立ちとしてのディスカルテ          | 17 |
| 2 生活保全実践としてのディスカルテ                      | 19 |
| 第1場面 市場で稼ぐ - イビサン公設市場における鮮魚商い -         |    |
| 第2章 貧しい季節を生きのびる .....                   | 22 |
| 1 市場の概況                                 | 23 |
| 2 鮮魚売買の過程：町場の鮮魚商人の置かれた状況                | 25 |
| 3 貧しい季節を生きのびるそれぞれのディスカルテ                | 29 |
| 4 まとめ                                   | 35 |
| 第3章 販台上的ディスカルテ .....                    | 37 |
| 1 売り場場面のディスカルテ                          | 38 |
| 2 販台越しの実践 - 客との掛け合いのディスカルテ -            | 38 |
| 3 販台上の実践 - 盛り付けのディスカルテ -                | 41 |
| 4 まとめ                                   | 43 |
| 第2場面 漁場で稼ぐ - ハカップ河口域の小規模漁業 -            |    |
| 第4章 汽水漁場の利用のディスカルテ - タバ漁師を中心にして - ..... | 47 |
| 1 ハカップ川漁撈活動の概要                          | 48 |
| 2 定置漁具：タバ漁の実際（2002年7月13日）               | 51 |
| 3 タバを中心とした漁場の開拓史                        | 54 |
| 4 漁場の利用秩序とディスカルテ                        | 56 |
| 5 生業複合とディスカルテ                           | 60 |
| 6 まとめ                                   | 60 |

第5章 サデ網：暮らしの最終兵器 - 養魚池の展開とサデ網漁師 - ..... 63

- 1 漁獲対象と漁具の構造 64
- 2 サデ網漁法とその労働過程、稚エビの流通 68
- 3 稚エビの流通経路：養殖池（sangha）と地元市場（mercado） 71
- 4 養魚業の展開とサデ網漁 73
- 5 まとめ（ドドン庭先のサデ網） 77

第3場面 居住地を守る

第6章 居住地を守る-小さな人々の土地をめぐるディスカルテ ..... 81

- 1 土地問題の頻発とその背景 82
- 2 住みつきのディスカルテ 85
- 3 土地を介したパトロン・クライアント 91
- 4 宅地の資源化あるいは小さな人々の抵抗 93
- 5 まとめ 98

結論 .....101

- 1 考察：リスク、資源、そしてモラル 102
- 2 結論の含意と今後の課題 106

写真集 108

用語集 111

引用・参考文献 113

# 序 論

# 1 目的とその背景

## (1) 本研究の目的

2000年初頭、国連アナン事務総長はミレニアムサミットに提出した報告書の中で「欠乏からの自由」、「恐怖からの自由」を21世紀の優先事項としてあげている。その両方にまたがるものとして「人間の安全保障」という概念が強調されているが、「人間の安全保障」とはそこに含意されているヒューマニズム概念、言説の世界システム上の位置などの問題を含むといえる。しかし何より、この議論は主として国連や先進諸国主導の「上から」の議論になっているのが実情である(土佐2003:109-138)。

本研究の目的は以上のような「上から」の論議に対して、ローカルなレベルにおいて、リスク(後述)を生活組織化の契機としてとらえ、日々の暮らしの中のリスクをめぐってどのように生活が構成されているかを明らかにすることであり、すなわち彼らの生活保全(1)メカニズムをリスク認識・対処の観点から解明することにある。

「9.11以後」の言説を待たず、われわれの生活が「リスクに囲まれている」といわれて久しい。リスクという言葉はいまだカタカナ書きである。日常の生活においてリスクとはいかなるもので、いかなる性質を帯びたものなのか、それにどう向き合うのか、向き合わないのか。人類学が「人間の鏡」を標榜するものならば、われわれと異なる社会に学ぶことは正しい。調査地で出会った人々の身振りに、危険に対する思いの違いを見いだすことは容易い。しかし、それを我々はどう理解することができるのか。その身振りに現れる生活表現に我々は何を読み込むことができるのだろうか。本研究は、ローカルなコンテクストの中で、そうしたリスクをめぐる生活構成理解の試みの一つである。

## (2) 研究の背景

まず、この研究の端緒となった2つのエピソードを記しておきたい。1995年6月、私が調査地イビサン町の市場の中で出会ったのが、本論でふれるドドン(仮名)である。彼を通して私は調査地の人間関係を広げていくことになったわけだが、ドドン(当時36才)は当時、妻を亡くして、子供3人(いずれも小学生)と暮らしていた。私はしばしば彼の家に滞在させてもらい、彼の生業であった鮮魚販売に同行した。商売の資本が僅かであった彼は、仕入れ値によっては、魚の購入をあきらめなければならぬことがしばしばであった。そんな彼が、日々米とおかずを確保し、家族を養っている姿には感動しつつも不思議でならなかった。

地元の聖人の祭り(フィエスタ)の後、居残る訪問客たちと酒盛りしているときであった。話題が「生きてゆくために必要なものは何か」になったとき、私は意見を求められたが、その日、聞きかじりの言葉であった「ディスカルテ」をあてずっぽうに挙げた。これ

でその場は一気に盛り上がり、その場にいた数々の男たちに手を打ち合わせるのを求められた。席を離れ玄関に向かう途中すれ違ったカカ(ドンの姉)に、「あんたは本当にディスカルテを知っているのか」と問いかけられたが、当時は単純に言葉の理解能力を問われたものと思っていた。今ではそれが、学生身分で家族を養ったことがない私に対する揶揄であったことが分る。日々なんとか暮らしを立ててゆくドンらのたくましい姿と「ディスカルテ」という言葉をめぐる疑問、この研究は実にここから始まった。

## 2 先行研究の批判的検討

本論考では、リスク研究という枠組みを利用し、生活保全のメカニズムを明らかにするわけだが、ここではまず、リスク研究といわれる一群の研究を概括・整理し、その理論の枠組みを明らかにしておきたい。

### (1) リスクの概念について

リスクの概念は論者によって取り扱いはさまざまである。それは、この言葉がたどった歴史ゆえである。英語の risk はありふれた単語であるが、OED (1989) によれば、古いイタリア語の *risco* からフランス語の *risque* を経て、17 世紀に英語に入ったという。Danger が 13 世紀までさかのぼれるのに対して、比較的新しい言葉である。その語義は、時代を経るにつれて以下のように追加されていった。 災害、危険、危険にさらされること (1661 年)、 商業上の損失、とりわけ保険のかかった商品等にかかわる危険 (1719 年)、 不測の損害に対する手当 (1849 年)。イタリア古語の *risco* には、「敢えて ~ する」という意味の *risicare* と関わりがあり、さらにこの単語には古くは「断崖をぬって船を操る」という意味があったという説がある。このように risk には「受動的危険」と「能動的危険」双方の意味を含んでいるといえる。社会学者ギデンズ<sup>(2)</sup> は、後者の意でリスクをとらえ、受動的「危険」と対比し、リスクを近代の表徴ととらえている。

リスク概念は、先に挙げたように、危険に対する態度(受動・能動)や、危険が生じる時間(長期・短期)など、どの点を強調するかによってさまざまに定義される。「リスク定義が急激に増えすぎて、この言葉そのものがそこに含まれる複雑な意味をうまく表せなくなってしまった」(ソロス 2001)という現状をふまえて、私は、「リスク概念の最大公約数」(ソロス 2001)といわれる「損失や損害を受ける可能性」すなわち「危険性、危険の可能性」をリスクとして定義しておきたいと思う。

## (2) 人類学的リスク研究の枠組み

カッシュダン (Cashdan1990:4) はリスク研究の現状を、大きく処方的リスク研究と記述的リスク研究に分類し、下記のように整理している (表 0-1)。

表 0-1 リスクに関する研究領域 (Cashdan.E.1990:4) より翻訳抜粋

|     | リスク評価  | リスク対応   |
|-----|--|---|
| 処方的 | リスクアセスメント<br>政策的利用に資する数量的リスク分析<br>分野：公衆衛生学、公共政策学 | 決定分析<br>リスク及び不確実性下における最適意志決定<br>分野：経済学、管理科学、オペレーションズ＝リサーチ |
| 記述的 | リスク認識<br>リスク及び不確実性の実際的评价<br>分野：心理学、人類学           | 対応行動<br>リスク及び不確実性に対する実際的対応<br>分野：行動生態学、経済学、人類学            |

処方的リスク研究が予見のための確率論を採用し、その効率的な管理を目指す研究指向を持つ一方で、記述的リスク研究は経験的知識の蓄積に着目し、その実際的 management の様態理解を目指しているといえる。人類学は後者の立場にある。

では、次に人類学におけるリスク認識と対処に関わる研究を概括しておきたい。まず、リスク認識 (Risk perception) 研究とリスク対処 (Risk response) 研究のそれぞれ代表的立場であるメアリー・ダグラスの文化理論派<sup>(3)</sup>と、カッシュダンをはじめとする経済・生態人類学におけるリスク研究のあらましを述べておこう。

メアリー・ダグラスらは文化理論 (Douglas, Wildavsky 1982、Tompson, Ellis, Wildavsky 1990、Schwarz, Tompson 1990、Dake 1992、Adams 1995) を唱え、リスク認識が文化的バイアスによる偏向を受けていることを指摘する。またそのバイアス (世界観、イデオロギー) は異なる社会関係のタイプ<sup>(4)</sup>に依存すると考える。この考え方には様々な批判が投げかけられている。たとえば、それが「現実のリスクや危険を隠喩に還元している」(Kaprow 1985) こと、「われわれ認識するすべてを文化的構築物と考える人類学的陥穽」(Hacking 1982) や、「頑固なデュルケム信奉主義」(Beidelman 1993) であること、さらに「個々のエージェンシーを無視している」(Adams 1995) こと、「(グリッド・グループ分析は) 静態的な形態間の比較に陥るあり、認識とそれに見合った行動を結びあわせるのに失敗している」(Bellaby 1990) こと、などである。

一方、対処研究は、ある特定のリスク状況下において最適な戦略<sup>(5)</sup>がどのようなものかを、経済や環境分野において追求することを旨とする(Cashdan1990:4)。その主題としては、多品種栽培(Abalu1976、winterhalder1990 ほか)、労働分業(Jonson1971、Smith & Boyd1990 ほか)、食物分配パターン(Cashdan1985、Hams1990、Kaplan, Hill & Hurtado1990)などが伝統的なものとして挙げられる(Barlett1980)。近年では、リスクの分散や生産遞減などに着目し、在地のリスク回避システムを追求する菅(2000)らのプロジェクトがそれに相当するだろう。しかし、こうしたリスク対処研究に対しては、「すべてのリスクが容易に計量化できるとは限らない。(価格、重量、カロリーといった)量的リスクのみが分析に値するという暗黙の仮定が現在の研究を限界づけていた」(Jonason and Baksh1990)との批判もある。

生活保全を理解してゆく上での理論的方法の検討という観点に照らしていえば、次の2点が指摘できるだろう。第1に、文化理論が静態的な社会還元論に陥っており、また対処研究が、計量可能なリスク軽減の制度の研究に多少とも偏向している点である。さらにいえば、そこでは日常実践<sup>(6)</sup>の視点が欠けているといえないだろうか。

第2に、人類学のリスク認識研究とリスク対処研究との間には、理論的な断絶が存在していることである。それはリスクの定義<sup>(7)</sup>にもとづく。これは第1で指摘したことに関わるが、経済・生態学的リスク研究においてリスクは計量的・実体的に定義されている。文化理論においては、リスクを構築的に定義する。すなわち、先述したように、リスクを「損失や損害を受ける可能性、すなわち危険性や危険の可能性」と考えるならば、この「危険」を構築的に定義するか、実体的に定義するか端的にいえば数量的に定義するかとの立場の違いである。

これらの問題点をどう乗り越えるかが、リスク研究をふまえた、生活保全にアプローチするための理論的課題となるだろう。

### (3) フィリピン低地社会研究とディスカルテ

本研究の対象としたフィリピン低地社会とは、より正確に言えば人口の約90%を占める多数民としてのいわゆるキリスト教徒の社会を指す(玉置1982)。それは、タガログ、ビサヤ、イロカノ、ピコール、パンパンガ、パンガシナンなど8~10の言語集団からなる。16世紀にはじまるスペインによる征服は、各社会の自律的な発展のかわりにフィリピン諸島統一の基礎をつくったといわれ、これらの社会はその差異よりも共通性が大きいと指摘されている。

これまでフィリピンにおいて民族誌的研究の対象とされてきたのは北部ルソン山岳地域の少数民族やミンダナオ・ムスリムであり、このような対象のかたよりは、奇異や希少を有意とする、純粹で真正な伝統が本質的に備わっている社会を対象としてきた人類学的まなざしの偏向であること(Cannell1999)が近年指摘されている。

このようなまなざしの中で、低地社会は「うすい文化」、極端には「文化がない」といわれ、記述対象からはずされてきた歴史的経緯がある。

低地社会の民族誌的研究がはじまるのは、タガログ地方では Iletto (1979) を嚆矢とするが、牽引的働きをした研究としては Rafael (1988) がはじまりといわれる。この他イロカノ地方では Pertierra (1988)、ビサヤ地方に関しては Dumon (1992) などがあげられる。

低地社会の特徴のひとつとして指摘されるのは、その社会の構造的把握の困難性である。それは二者関係論的把握においても同様である。双系制社会の特徴としての個人選択の自由度の高さまた集団形成の流動性などの点から、それぞれの研究においては「状況依存的」あるいは「不確定性」という結論が繰り返され、「一定のやり方はない」式の記述（川田 2000）に陥っているという指摘がなされている。本研究では彼らのやり方、方法、工夫を意味する現地概念ディスカルテに焦点をあてることによってこれまで等閑視されてきた、個人的実践であるディスカルテから社会をとらえ返す試みである。これは「一定のやり方はない」式の記述に陥らないための試行錯誤の一つであり、「文化のない」といわれる社会に「文化」を見出すひとつの試みであるといえる。

### 3 本研究における研究視角と調査方法

#### (1) 研究視角

この研究では、パナイ島汽水域住民の生活保全のあり方を解明することが目的であるが、本来、生活を保全してゆく日々の営みにおいて、リスク認識と対処とは一連のプロセスであるはずである。先に挙げた人類学的なリスク研究上の断絶は、まず彼らの生活プロセスをつぶさに追ってゆくことにより架橋されねばならない。そのためにも、彼らの日々の実践の様態に焦点をあてる必要があると考える。

本研究でいうところのリスクは、「損失や損害をうける可能性」、すなわち「危険性・危険の可能性」として、ダグラスの視点に立ち、その「危険」を実在的に定義するのではなく、リスク・イメージとリスク認識に峻別する立場をとりたい。またリスクの認識と対処の両局面における日常の実践に着目しようと思う。その際、現地の実践概念であるディスカルテ (diskarte)<sup>(7)</sup> に着目することにしたい。ディスカルテをここでは「やり方」と仮に定義しておく。すなわち現地の危険概念であるデリカード (delikado) とディスカルテを、それぞれリスクと対処実践のローカルな枠組みとしてとりあげ、具体的な場面における対象者のデリカードに対するディスカルテという実践を解明してゆくという手順をとる。

その際、ブルデューの「場」の概念は示唆に富む。彼は「場」を「部分的に自律的な、

諸力の場であり、同時にその内部でポジションをめぐる闘争が行われるような場でもある。これらの闘争が、諸力の場を転換ないし維持すると解される。様々なポジションは、行為者への種別的な資本の分配によって決定される」(ブルデュー1983:312)と定義しているが、それぞれの行為主体の社会的配置に対する目配りはないがしろにできまい。

私はかつて「戦略」<sup>(6)</sup>という言葉を用い、彼らの主体的・能動的な実践の側面を見出そうとした(小林1999、小林・矢野2000)。しかし、「戦略」という言葉はやっかいな問題をはらんでいる。そもそも彼らの特定の行為を「戦略的である」とみなしたのは、ほかならぬ「私」の判断でしかない。私が指定した「問題(リスク)」(たとえば供給の不安定性など)に彼らがいかに対応しているのか、それが私にとって「合理的」であると判断したならば、私はそれを「戦略的である」と判断したわけである。しかし、その判断の過程では、肝心の対象住民たち自身の意識はらち外に置かれていたと言わなければならないだろう。

では、彼ら自身にとって、「戦略的なもの」とはいったいいかなるものであろうか。これまで、人類学の「憑きもの」や「俗信」、「呪術」に施されてきたような、発語主体のものを見方を含めた概念の再検討(関1994:20)が、これまで便利さゆえにあまりにも無自覚に利用されてきた、「戦略」という分析概念においても必要になるのではないだろうか。

そのような思いの中、現地で出会った言葉が、ディスカルテである。「お前のディスカルテは貧しい(mahina)」、あるいは「ディスカルテを使え(gamit)」、「あいつのディスカルテは良くない(indi maayo)」という表現は日常の会話の中でも頻繁に使用されている。これはのちに、通例、「戦略(strategy)・戦術(tactics)」と翻訳されている(Ushijima & Zayasu1994:375)ことを知ったわけであるが、この彼ら自身の概念を詳細に検討することによって、彼らの、リスク状況に対する実践的対処の側面に肉薄することができるのではないかと考えたわけである。また、この現地概念を検討することで、既存の「戦略」、「戦術」という分析概念に対してひとつのフォークモデルを打ち立てることができるのではないかというもくろみもある。しかし、ディスカルテそのものを扱った研究の蓄積が少ない現状に照らしてみれば、ディスカルテを演繹的に従来の「戦略」、「戦術」概念に安易に落とし込むのではなく、まずディスカルテといわれるものを十分な厚みをもって記述し、分析してゆく作業が必要になるはずである。

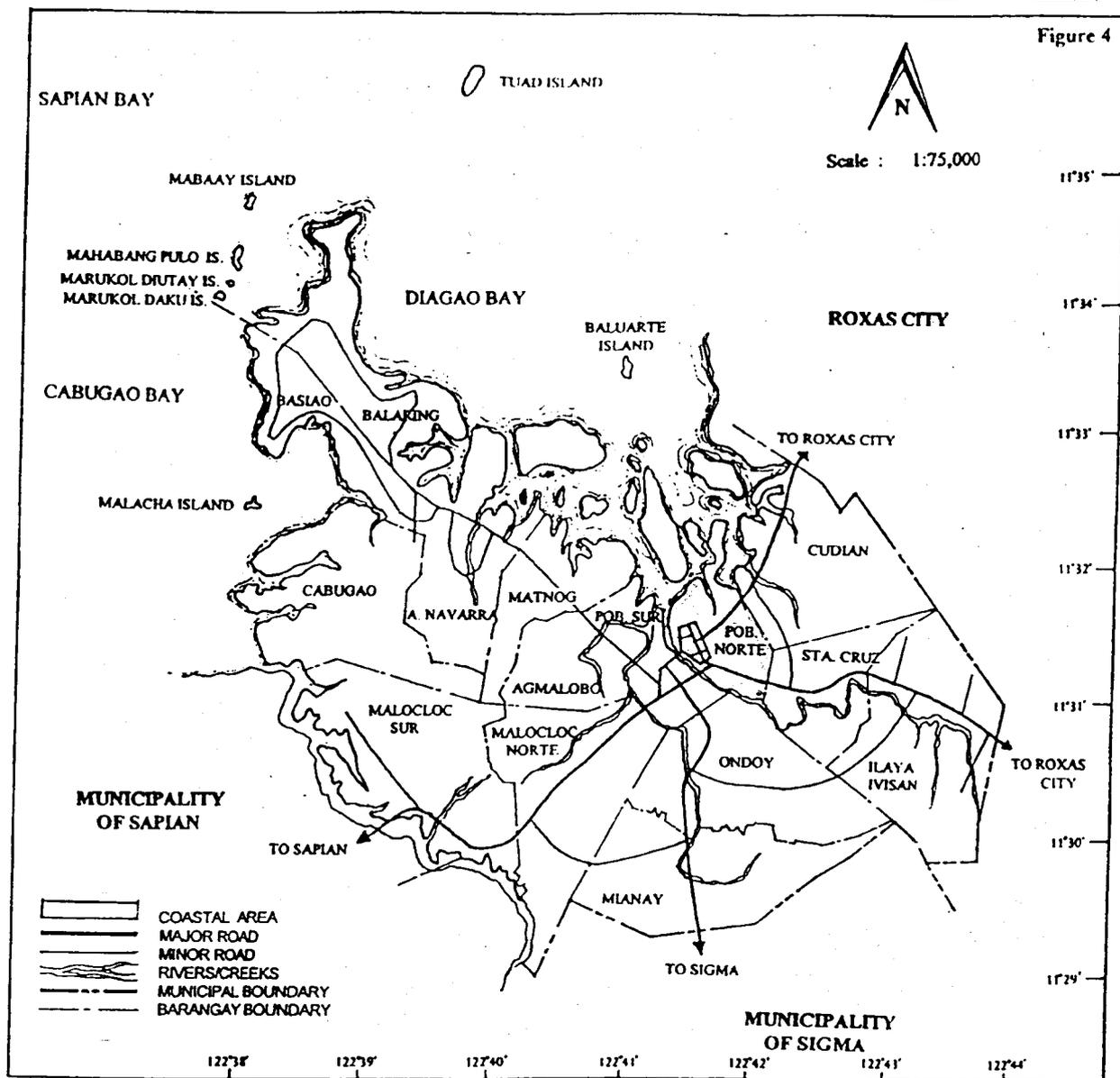
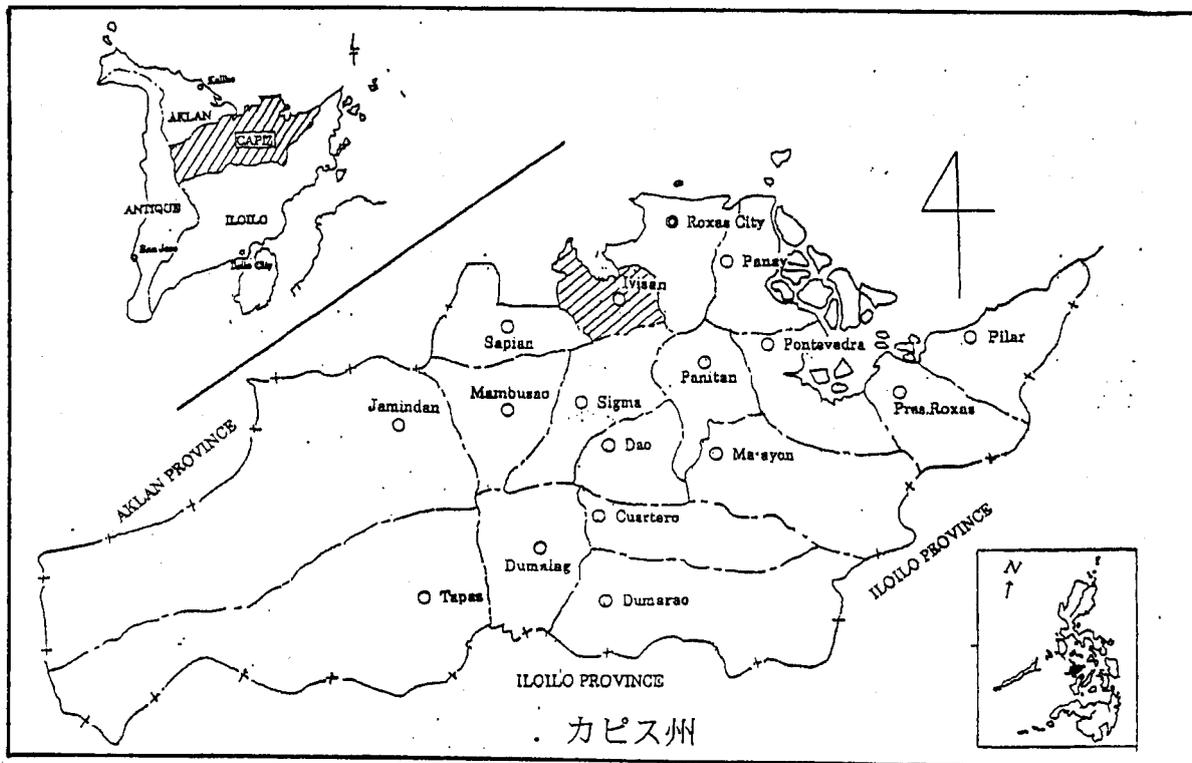


図 0-1 フィリピンのカピス州およびイビスン町

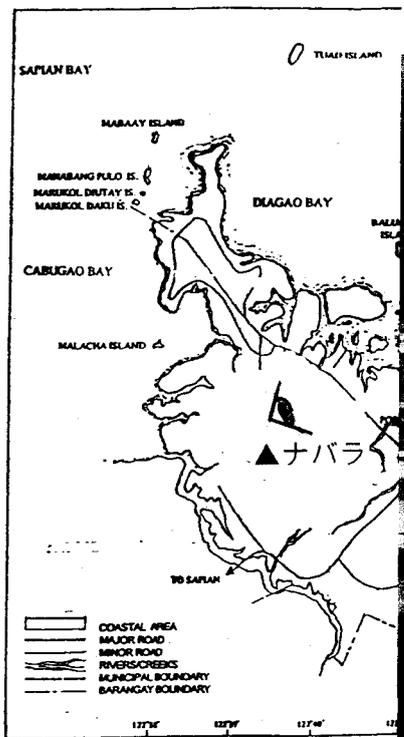


図 0-2 ナバラの山頂から

## (2) 調査方法

具体的には、市場・漁場・居住地の3つの場面における、彼ら個々の生活保全のあり方を考察の対象としている。なぜ3つの場면을対象にするに至ったのかを私自身のフィールドワークの過程を絡めて示しておきたい。まず 調査地の選定：東南アジア沿海部において干潟という遷移帯が、そこに住む住民にとってきわめて重要な生活の場であることは西村朝日太郎や鶴見良行の先行研究からすでに学んでいた。パナイ島北部を含むビサヤ海域はフィリピンでも有数の漁場をなしており、この島を調査対象地に選定した私はパナイ島北部一帯の干潟遷移帯に注目した。イビサン湾を対象地とすることにしたのはこれまで調査が行われていなかったためである（ちなみに、隣のサピアン湾については田和（1981、2002）が、バタン湾についてはUP.Vの水産学者らによる共同プロジェクトUPV-CIDA-Macgill、1991）。私は沿岸の鮮魚市場に着目して参与観察を始めた。当初の調査目的：当時、経済人類学の問題関心のひとつが農民市場をめぐるモラルエコノミー論であり、このモデルを参考しつつ、市場を中心に生きる人々と、漁獲物の生産から流通さらには消費までの一連の動きを調査したいと考えた。ドドンとの出会い：そうしたなかで偶然に鮮魚市場で声をかけられたのがドドン氏であった。彼の自宅に招かれたのをきっかけに、魚商人たちの生活の背景を目の当たりにすることができた。ドドン一家との付き合いを深めるなかで生活の場について調査をすることになった。調査地を切りとることの困難さ：ドドンたちの住む町の一角を調査地のベースにしようと考えた。その際、まずとまどったのはどのように有意な範囲を切りとることが可能であるかという問題であった。学部以来調査を進めてきた日本の村落社会とは異なり、生活の地理的領域を確定することが困難であることが次第に明らかになってきた。まず彼らの住む場所は町場の一角であり、そこには多様な生業背景を持つ住人たちが連続して居住していること、すなわち境界を明確に区切ること自体が困難であることだ。また従来の調査研究で単位としてとりあげられてきたバラングアのレベルでは人口が多すぎて調査者の手に余った。そこで着目したのがポロックあるいはシティオという単位である。ドドンらが居住しているのはポロック No.5といわれる地区であるが、その地理的境界は誰に尋ねても不明瞭であった。このバラングアは教会で5つの地区に分けられていたがポロック No.5とは重なるものではなかった。そこで私は近隣に住むドドンの兄弟らにまず着目し、彼ら個人の日常的付き合いに寄り添う形で調査対象の範囲を設定することにした。またドドンら兄弟の生活圏を核として、日々の付き合いと彼らの歩んできた歴史を辿ることを通して商いの場である市場と、生産活動の場である汽水漁場がその射程に入ってきた。そこで本論考では、彼らの住む居住地タカスと地元市場、そして生産活動の場である汽水漁場を考察の対象場面として設定した。

ところで、具体的なフィールドワークは、それぞれの場面で、参与観察とインタビュー法（資料提示型インタビューも含む）を用い、また世帯調査として調査票を用いた聞き取りを併用した。調査期間は1995年フィリピンのデ・ラサール大学留学期間中の6ヶ月間

と1998年までの毎年8月、3月、2001年フィリピン大学留学中および2002年、2003年の各6ヶ月間である。調査期間は通算2年8ヶ月間であった。調査中の言語は、調査開始当初は英語とタガログ語を用いたがその後は現地語であるイロンゴ語を用いて調査に当たった。

#### 4 調査対象地の概況

##### (1) 海と陸のはざまの町イビス

調査対象となったのは、フィリピンの西ビサヤ(Visaya)、パナイ(Panay)島カピス(Capiz)州の北東部、沿岸に位置するイビス(Ivisan)町<sup>(9)</sup>である。イビスの町名は現地で小魚を意味する「イビス(ibis)」からとられている。イビスが豊富だったことはスペイン人の到来以前からすでに有名であったという。スペイン統治期、スペイン人がカピス(現口ハス市)に侵攻の際、スペイン人がこの地の名を尋ねると、質問の意味が理解できなかった現地人が「ibis」と答えたという民間説話が伝わっている。これに場所を表す接尾語anが付いて、1815年、イビス(Ivisan)として正式に町の名前として定まった。イビス町は人口約2万3000人、4400世帯であり、カピス州では規模の小さな町である。行政的には町中心部のポブラシオン<sup>(10)</sup>と呼ばれる2つのバラングイ<sup>(11)</sup>とそれを取り囲む13のバラングイから構成される(図0-1)。

ポブラシオンには、ホセ・リサール像を中心にすえた広場を中心として町役場、教会、市場をはじめ小売りの店舗が建ち並び、行政、経済、信仰の場の中心を形成している。町民はソール(南)、ノルテ(北)両バラングイ・ポブラシオンを「プロパー」と呼び、周辺のバラングイを「バリオ」と呼び区別している。またバリオ居住の者がプロパーに出向くことを「イビスにゆく」と表現することもある。ここではそのプロパーを「町場」と呼び、その他のバリオを「村」と呼ぶことにする。町の経済は米作(作付面積約770ha)を中心とした農業であるが、豊富な水産資源に恵まれ、同州が「海産物の都」(sea food capital)と称されるその一翼を担っている(図0-2)。外洋に面した半島部のバラリン(Baraling)、バシアオ(Basiao)、カブガオ(Cabugao)、クジャン(Cabugao)といった漁獲物供給地以外でも、養魚池(約7000ha)ではバングロス(サバヒイ科)が養殖され、またイニッド(ハタ科)は活魚として香港や台湾に空輸されている。また河川域のマトノグ(Matnog)、クジャンではカキやミドリ貝が養殖生産されている(Municipal profile 1995)。

## (2) 海と陸のはざままで生きる人々 - タゴトッド・タカスの住人たち -

本研究で主に調査対象となった人々は、町場であるポブラシオン・ノルテのポロック(ポブラシオンの下位単位、シティオとも呼ばれる。ただしその地理的境界が不明瞭な点は先述した通りである)タゴトッドに居住している。ポブラシオンは5つのポロックからなる。彼らの居住しているポロック・タゴトッドは町の中心(役場、教会、市場がある)から約300メートル、徒歩で5~6分の距離位置する。地区の総世帯数は105世帯、人口約600人程度と見込まれる。

本論で論じる中心人物であるドドンとそのキョウダイの居住地はタゴトッドの中でもタカス(takas:高い場所)と呼ばれる高台にある。ドドンは11人キョウダイの7番目である。キョウダイのうち1人はミンダナオ、2人はマニラにそれぞれ移住している。ノンは1995年に他界している。残りのキョウダイのうち町場にすむトト(姉)を除いて、残りの6人がそれぞれタカスに居住している。

2003年9月現在、ドドンは後妻であるオタイと、ドドンの次男、オタイの連れ子である双子の息子と2人の間に生まれた娘との6人で暮らしている。仕事を求め長男と長女は、ドドンの兄が住むマニラに、次男と次女は亡くなった先妻の実家で暮らしている。

ドドンは現在、妻オタイとともに早朝から市場で鮮魚販売に従事している。彼のこれまでの生業歴をふりかえって見れば、マニラの出稼ぎ期間を除き、他のタカスの住人と同様に、主に町場の雑業(市場商人、自転車夫)や河口汽水域での小規模漁撈活動に従事してきた。ある時、タカス出身の海外出稼ぎ者(男性、サウジアラビア)に出稼ぎの理由を尋ねたことがある。私にとって印象的だったのは、彼が「ここでは仕事の場が非常に限られている」、水田もない自分たちにとっては、「働く場は市場か川しかない」と強調した点だった。小学校を6年で中退しているドドンと同様、学歴資本の乏しいタカスの住人たちにとって、市場における商業活動と汽水河口の漁撈活動が主な生活のたつきなのだ。

本論では主としてドドンのキョウダイを中心としたタカス住人を取りあげるが、ここではそれら特定の個人に着目することを通して彼らの生活保全の様態を考察してゆきたい。そこで本論で取りあげられる個人(中核人物)の相互の関係と生活背景についてまず若干補足し(図0-2参照)、本論の事例を理解するための背景となる知識を供しておきたい。

第一場面〔市場で稼ぐ〕の第2章ではドドン、エリー、ニンが、続く第3章ではドドンの妻オタイを取りあげる。また第二場面〔漁場で稼ぐ〕では、まず第4でオンゲルそして第5章でドドンと友人ボーを取りあげる。場面が替わって、第3場面の〔居住地を守る〕ではドドンの姉であるカカと第二イトコのエルニンを取りあげた。これら3つの場面においてこれら中核人物の個人的な関係の広がりの中で彼らの生活保全理解にアプローチしてゆくことにしたい。

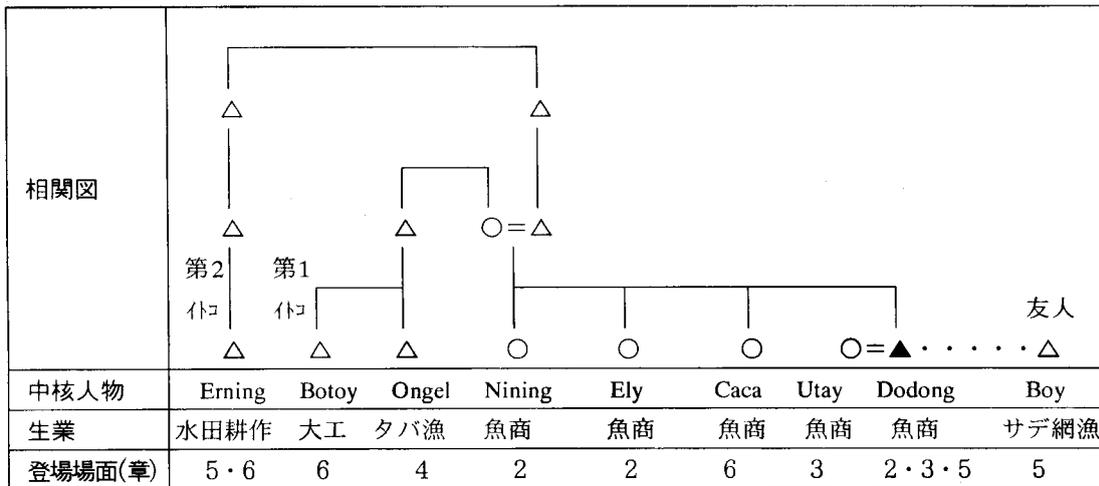


図 0-2 市場、汽水漁場、居住地における中核人物の親族関係と生業背景

## 5 本論の構成

本論の構成と概要を示す。第1章では「何がデリカードかは、本人たちのディスカルテ次第である」という住民たちの語りに着目しながら、リスク認識と実践の関係について考察し、第2章以降で論じられる、具体的な場面設定において探求される生活保全実践としてのディスカルテへの導入とする。すなわち、収入の不安定性という経済的リスク対処としてのディスカルテを第一場面（第2、第3章）では、地元市場の商業活動において、第2場面（第4、第5章）では、漁場利用の面から考察する。さらに第3場面（第6章）では、社会的リスク対処として、立ちのき問題をとりあげる。そして結論では、それぞれの場面における生活保全実践としてのディスカルテを認識と実践の関わりから、また資源化・運用の観点から、さらにモラルとの関わり合いのなかで検討する。後段部では、本研究の意味をメタレベルから問い直し、リスクと生活価値との関わり合いを検討する。

### (註)

- (1) 「保全」とは、通常「保護し安全にすること」を意味するが、ここでは、その意味をずらして、生活保全を「生活（の価値）を守り、生活（の価値）を全うすること」と仮に定義しておきたい。「生活保全」の概念を、単に「生計維持」や「生存維持」といった言葉に矮小化するのではなく、「フレキシブルな動きそのものの中に、日常生活の総体をみる」（川田 2003）ための概念装置とするためである。
- (2) 隣接分野である社会学におけるリスク研究として、ベック（1986）とギデンズ（1993）

の立場と人類学者からの反応を記しておきたい。ベックとギデンズの両者は、「リスクをモダニティとの関わり合いで論じている意味で共通の特徴を持つ」(Caplan2000)。両者ともモダニティを新しい種類のリスクによって特徴づけている。

科学知識の確実性への疑問視、リスク社会の同期・普遍性、個人主義への移行、リスク概念による未来の植民化、モラリティの追求、などである。しかし、人類学者からは「中心社会において発展したこの理論が第三世界に適用可能かどうかという疑問」(Bujira2000)や、「無批判な発展段階論的想定」(Nugent2000)などの批判がある。

- (3) およそすべての理論は、それが提出された時代状況下で固有の目的を持っている。ダグラスらの主張は、リスク論が大々的に議論される前の状況で、リスクアセスメントの政治的偏向を看破したものである。リスク論が、人間的問題を文脈外に放逐すること、すなわち、だれがリスクを定義するのかを不問に付すことで、本来政治的な問題を脱政治化してしまうようなリスク概念の使用様態を批判している(金森2003)。本論においては、あくまで生活保全理解への「方法」を検討するという観点から、それらを検討・整理するものである。
- (4) 社会関係のタイプは、集団の内外を区別する強弱(グループ)と成員に課せられる規制の強弱により、以下の4つのタイプに分類される。階統性(hierarchy)、平等主義(Egalitarianism)、宿命論(Fatalism)、個人主義(Individual)がそれらに対応するリスクとして構成されるというのだ。
- (5) 最適化戦略の虚構性については福島(2001)を参照。
- (6) 日常実践とは、日常生活のすべての場面でみられるルーティーン化された慣習的行為であり、それぞれの場面において能動的に社会に関わりながら社会的世界を構築してゆく過程(田辺2002)である。「日常実践が人類学の重要な分析視点として登場するのは、シェリー・オートナー(Ortner1984)が1980年代半ばに発表した論文においてであった」(田辺2002)。オートナーは、社会システムが維持されるのは、人々の実践・思考・世界観が世代から世代へと継承される「社会化」の過程であるという従来の人類学の主張を批判し、人類学の仕事は社会的世界の再生産に関する人びとの日常実践の総体に立ちかえることによって、時間と空間にわたる秩序を組織し、再生産し、あるいは変化してゆく契機を見いだすことが可能であると主張した。
- (7) リスク研究におけるリスク定義をめぐる論争、すなわちリスクの実体的定義と構築定義をめぐる論争については(山口2002)を参照。
- (8) 「戦略」という概念は、特に1970年代、構造主義の構造決定論に対するマルクス主義人類学の議論、すなわち、個人の主体性と社会構造の弁証法的関係について考察する論考の中で盛んに用いられるようになった経緯がある(Sahlins1981、Bourdieu1977・1988・1990、Ortner1984参照)。1990年代には、「近代」をめぐる議論の中

で「戦略」と「戦術」の区分について、重要な問題提起がなされている（セルトー 1987、小田 1996a・1996b、松田 1996・1999、大村 1998 参照）。ただし、本論では、これらはいずれもあくまでエティックな概念であり、人々の視点からの考察が抜け落ちているのではないかという問題意識に立ち、現地の概念であるディスカルテの検討を行うものである。

(9) 主要な出来事を含む町の歴史の概略は、以下のとおりである（Municipal Profile1997）。

1815 年 イビサン町の成立

1871 年 Vinta 船の襲撃を受け、漁民 6 人が拉致される。

1882 年 コレラが発生し、町民の約 40%が死亡する。

1884 年 長期にわたる干ばつのため、飢饉に見舞われる。同時期、イナゴが大発生し、作物をはじめ、家屋に至るまで甚大な被害を受ける。

1897 年 St.Nicholas de Tolentino が町の守護聖人となる。

1898 年 パリ条約によって、フィリピン諸島の統治権がスペインからアメリカへ移る。

1935 年 イビサン公設市場が開設される。

1942 年 日本軍の侵入。住民 7 人が拷問を受け、1 人が殺害される。住民たちは沼沢地に逃れ、町はゴーストタウン化する。幾人かはゲリラ戦を展開した。

1945 年 解放。イビサン市場が拡充される。

1956 年 現鮮魚売場の改修。

1965 年 Ilaya Ivisan から Sta.Cruz、Ondoy から Miyanay、Agmalobo から Matonog が分離する。

1984 年 オダン台風の直撃。同時期、コレラが発生する。

2002 年 鮮魚売り場の大規模な改修作業が完了する。

(10) もともとスペイン人が植民地行政を円滑に行うために建設した街で、公園を中心にカトリック教会や地方行政のための庁舎を建て、周囲に植民地官吏および現地人有力者を住ませた。現在は地方の市や町の行政府所在地を指している。（鈴木編 1992）

(11) この語はフィリピン諸島の伝統的村落社会としての歴史的意味と、現代の行政単位としての政治的意味の二つに使われる。（鈴木編 1992）ここでは後者の意味の地方自治における最下位のレベルをさす。

# 第 1 章

日常的风险 - delikado と diskarte -

本章の目的は、現地の危険概念である「デリカード」(イロongo語: delikado)と、実践概念である「ディスクアルテ」(イロongo語: diskarte)との関連を明らかにし、デリカード状況下における具体的場面のディスクアルテ考察のための基本的な視座を提示し、次章以降への橋渡しをすることにある。

## 1 リスク・イメージとリスク認識の仲立ちとしてのディスクアルテ

表 1-1 は、聞き取りによって得た生活上のデリカード<sup>(1)</sup>の内容である。これらを仮に経済的デリカード、身体的デリカード、社会関係的デリカードの3つに分類してみよう。

経済的デリカードは、「定職(trabaho)がない」、「仕事(obra)がない」、「現金(kuwarta)がない」、「多額の借金(utang)がある」、「借金が返済できない」、「米(bugas)・おかず(sudan)がない」、「子供に与えるミルクが買えない」、「食べるもの(pagkaon)がない」、「子供の数が多すぎる」、「子供の学費負担が大きい」、「子供を学校にやれない」などに分類される。身体的デリカードには、「病気」、「死ぬこと」、「事故」、「ケガ」、また社会関係的デリカードには、「(土地を持たないことによる)立ちのき」、「夫の飲酒」、「妻の飲酒」、「喧嘩(away)」、「親・兄弟の援助が期待できないこと」、「他人に対して過ちを犯すこと」、「犯罪を犯すこと」、「敵(kontra)を持つこと」などが含まれる。

しかしながら、こうした分類は便宜的なものであって、実際は複合的なカテゴリーとなっている。たとえば、「病気」の場合のデリカードはその出費負担の文脈で語られ、「借金が返済できないこと」は信用(salig)を失う文脈でも語られる。さらに「敵を持つこと」はケガの文脈でも語られるといったようにである。

ここで注目したいのは、デリカードの内容もさることながら、デリカードの内容に「ディスクアルテがないこと」、「生活してゆくためのディスクアルテがないこと」があげられている点である。ディスクアルテがないこと自体がデリカードであるという。

また、経済的デリカードに分類した「仕事がない」や「金がない」は、通常2つをつなげて「wala kita, wala pangita」と表現される慣用句となっている。実際「恐れている(nahadlok)」かどうかと尋ねると、「何がデリカードかは本人のディスクアルテ次第だ(dipende sa imo diskarte)」と釘を刺された。急(gulpi)でさえなければ、ここに挙げたデリカードは自分にとってのデリカードとはならない。それは、それぞれ本人のディスクアルテ次第であるというのだ。

これらのことから、ここに挙げたデリカードはむしろ彼らのローカルなリスク・イメージであり、彼ら個々のディスクアルテによって、このイメージが実際のリスクとして認識されるものといえる。この場合ディスクアルテとは、リスクとしてイメージされる状況に陥らぬように発揮される生活保全の実践として考えることができる。この点からいえば、まさにディスクアルテがリスク・イメージと本人のリスク認識を仲立ちしているといえる。

表 1-1 デリカートの日常生活上 (2003年3月現在)

| 世帯番     | 名         | 年齢 | 関係                 | 生業                    | 生活上のデリカード (dehikado)   |
|---------|-----------|----|--------------------|-----------------------|--|
| 3 4     | Torong    | 37 | 弟 (tutod)          | なし                    | 火事、家庭内のケンカ、仕事がないこと、子供の学費の負担                                      |
|         | Belin     | 42 |                    | マニラでメード               | 定職がないこと、家族の病気、事故、夫の飲酒、出かせぎで家をあけること                               |
| 3 8     | Kato      | 43 | 弟                  | 自転車による魚の行商            | 子供の数が多すぎることで、米・おかずがないこと、子供の学費の負担                                 |
|         | Juyy      | 38 |                    | 徒歩による魚の行商             | 現金がないこと、子供の病気、土地を所有していないこと、おかずがないこと                              |
| 3 9     | Dodong    | 42 | Ego                | 市場魚商                  | 定職がないこと、デナスカルテがないこと、病気、巡回商い、多額の借金、金をたくさん持つこと、金がないこと、仕事がないこと、妻の飲酒 |
|         | Oray      | 37 |                    | 市場魚商                  | 悪い態度、子供の出歩き、子供の数が多すぎることで、現金がないこと、食べるものがないこと                      |
| 4 0     | Emar      | 43 |                    | マニラで魚商                | -  |
|         | Nene      | 32 | 妹 (tutod)          | サリサリ経営、おやつ販売          | 子供に食べさせるものがないこと、子供を学校にやれないこと、借金を返済できないこと、子供の病気                   |
| 4 3     | Boy       | 51 |                    | 大工+井戸掘り+養豚            | 病気、出かせぎで家をあけること、食べるものがないこと                                       |
|         | Caca      | 48 | 姉 (tutod)          | 市場魚商 (巡回)             | 商売がないこと、病気、食べるものがないこと、土地を所有していないこと、ケンカ                           |
| 4 4     | Beany     | 65 |                    | 妻の手伝い+カキ養殖場+養豚        | 現金がないこと、病気   |
|         | Nining    | 55 | 姉                  | 市場魚商                  | -  |
| 4 5     | (Nonoy)   | -  | 兄 (tutod)          | 死亡                    | -  |
|         | Reming    | 45 |                    | なし (レバソンの娘の仕送り)       | 土地を所有していないこと   |
| 6 6     | Sarding   | 48 |                    | やし酒造り+養魚池番頭           | -  |
|         | Boda      | 47 | 近隣 (Kalapit balay) | 市場魚商                  | 仕事がないこと、子供の数が多すぎることで、食べるものがないこと、商売上の損失                           |
| 6 9     | Botoy     | 37 | イトコ(1) (paka-isa)  | 大工+カキ養殖場              | 仕事がないこと、土地を所有していないこと   |
|         | Mahndre   | 43 |                    | 洗濯婦                   | 食べるものがないこと、仕事がないこと   |
| 7 0     | Ongel     | 36 | イトコ(1)             | タリ漁+カキ養殖場             | 病気、事故で死ぬこと、仕事がないこと、ケンカ、敵を持つこと                                    |
|         |           | -  |                    | なし                    | -  |
| 7 2     | Erning    | 52 | イトコ(2) (paka-duha) | 農業+市場魚商+井戸掘り+カキ養殖場+養豚 | 裏切り者になること、他人に対して間違いを犯すこと、家族の病気、子供の数が多すぎることで、ミルクが買えないこと           |
|         | Vering    | 50 |                    | 市場魚商+サリサリ経営+おやつ販売     | 病気、死ぬこと、家庭内のケンカ、離婚   |
| 7 3     | Nato      | 55 |                    | 養豚                    | 土地を所有していないこと   |
|         | Ely       | 52 | 姉                  | 市場魚商                  | 仕事がないこと、病気、土地を所有していないこと  |
| 9 8     | Packnoy   | 31 |                    | 市場魚商                  | 子供の病気、米がないこと、仕事がないこと、ケンカ、犯罪を犯すこと                                 |
|         | Manna     | 25 | メイ (gumangkón)     | 市場魚商                  | 巡回商売に出られないこと、現金がないこと、食べるものがないこと、病気                               |
| 4 3a    | (Nonoy)   | -  |                    | 船乗り                   | -  |
|         | Nerissa   | 30 | メイ                 | 高校教師 (臨時)             | 病気、夫婦が離れて暮らすこと   |
| 4 5a    | Bigaw     | 23 | メイ                 | なし                    | 定職がないこと、(まだ自分たちの生活は始まっていない)                                      |
|         | Sena      | 18 |                    | なし                    | 仕事がないこと  |
| Sito. P | Etig      | 34 |                    | 養豚 (元小学校教員)           | 仕事がないこと、食べるものがないこと   |
|         | Didang    | 31 | 義妹 (hiras)         | 市場魚商                  |  |
| 9 3     | Ronald    | 31 |                    | 市場魚商                  | 旅行中の事故、妻の出産  |
|         | Nene Mary | 30 | 義妹                 | 市場魚商                  | 商売の資本がないこと、夫に仕事がないこと、両親・兄弟の援助が受けられないこと、生活してゆぐた                   |
| 2 7     | Tammy     | 40 |                    | 市場魚商                  | デナスカルテがないこと、日に3度の食事ができないこと                                       |
|         |           |    |                    | 巡回審判員                 | デナスカルテ自体が危険であること   |
| 4 8     | Iyan      | 53 |                    | 市場魚商                  | (神の恵し召したい) *セブンスデー・プロペンデナス                                       |
|         | Sally     | 42 | イトコ(1)             | 市場魚商                  | 収入がないこと  |

## 2 生活保全実践としてのディスカルテ

ディスカルテ<sup>(2)</sup>という言葉は、これまで調べた限りでは辞書にも記載がなく、その語源も定かではない (Veloro1994:153-5)。ある時、地元の雑貨屋 (sari sari) の店先に掲げられたビール会社の広告のキャッチコピーにディスカルテの文字を見つけたが、それは斜めに傾いだビールの前面に「DISKARTENG PANG-BARKADA (親しい仲間になるディスカルテ)」とうたっていた。これは、この言葉が広く日常的に使用されていることの証左となるだろう。実際、ディスカルテは生活のあらゆる場面で使用されている。

表 1-2 さまざまなディスカルテ

| ( ) のディスカルテ : diskarte sang ( ) |   |
|---------------------------------|---|
| I                               | manugpananagat (漁師)、tianggi (お店)、manugbaligya (商人)、wala trabaho (無職者)、sutand by (スタンバイしている者)  |
| II                              | sugal (ギャンブルすること)、pagbaligya (売ること)、pagbakal (買うこと)、pangayo (要求する)、paginum (酒を飲むこと)、pagpadaug (成功する、利益を得る)、pagasawa (妻をめとる)、bae (女性と交際する)、pagpanami sang balay (家をきれいにすること)、pagdakup sang halo (トカゲを捕まえること)、hampang (遊び)、pangabuhi (生活していくこと) |

表 1-2 は、「( 空欄 ) のディスカルテ (diskarte sang…)」という虫食い問題を用いて、回答してもらい、そこにあてはまる単語をランダムに示したものである。そこには仕事から家庭生活にわたる実にさまざまな表現があるのがみてとれる。I は行為の主体であり、II はその行為の中身であると分類できる。いずれにしても「生きるためのディスカルテ (diskarte sang pangabuhi)」は、それらを包括した端的な表現ではないだろうか。

ディスカルテがないことは、「まだ子供である (bata pa)」、「ばか (buwan)」、「怠けもの (matamad)」、「家族が養えない」などを意味し、ディスカルテを持つことが積極的に社会的に期待されるものである。ディスカルテを持つことが「一人前」を表徴すると考えられる点では、日本の文脈における「処世術」と近似したものといえるかもしれない。

ディスカルテというローカルな概念に着目した研究としては、ベロロ (Veloro1994) の論考がある。彼女は、漁民のスウェルテ (suwerte「運」の意) とディスカルテという2つの民俗概念から、漁法の2類型を特徴づけた。の中で彼女は、ディスカルテを、わざ (skill)、才能 (talent)、狡猾 (cunning)、機転 (savvy) を含意し、問題に直面した人間の実際的な戦略、枠組み、やり方と定義している (Veloro1994: 153-155)。しかし、ディスカルテの内実を理解する上で彼女の分析はあまりにも一般論に傾きすぎており、ディスカルテの実際的な運用の場面が不明瞭であることが指摘できる。私としては、このディスカルテという実践にアプローチするためには、彼らがディスカルテであるという事柄を個別・具体的な事例として取り上げ、その内容を精査し、その意味の広がりをも明らかにする

という手続きをとる必要があると考えた。

本論ではデリカード状況への対処としてのディスカルテ、すなわちリスク対処のコンテキストの中でディスカルテを詳細に検討してみたい。

以下の章では、経済的、社会的リスク状況とそれに対するディスカルテに焦点をあてる。「市場はディスカルテの宝庫だ」、「ディスカルテを知りたければ市場に行け」とは、しばしば私の質問（「ディスカルテとは何か」）に対する彼らの返答であった。そこで、本論考ではまず市場におけるディスカルテの考察（第2章および第3章）を導きの糸として、つぎに市場に搬入される魚類と捕獲される場である汽水域漁場を対象とし（第4章および第5章）最後に汽水域住民たちが住む居住地をめぐる（第6章）、すなわち市場・漁場・居住地という場において展開する具体的な場面における日常のリスクに対するディスカルテを考察していこうと思う。

（註）

（1）デリカードと同義として *peligro* がある。この言葉は、60代以上の年輩者が使い、他の世代では通常はデリカードが使用される。その理由を尋ねると、「60代以上の人々は自分たちと異なる経験（*eksperiensya*）をして来ているからだ」（20代女性）との答えが返ってきたことがある。60代以上は戦争経験世代である。ある言葉の消滅には様々な要素が背景としてあり、ここではそれについて分析する手だてがないが、大変興味深いので今後の課題としたい。また、危険を意味する同義語としては *mari-it* と *katalagman* があるが、前者は（超自然的な場の）危険を意味し、後者は（人の気質を形容する）危険を意味する。デリカードはそれらを包摂する概念である。

（2）300年間のスペイン統治を通じて、統治者はスペイン語を共通語化しなかったが、現地語の語彙には大量の借用語をもたらしたことが指摘されている。ディスカルテとの発音の類似性（フィリピン諸語において、母音は a、i、o の3つであり、スペイン語の c は k と表記される）から、この *deskarte* は明らかにスペイン語の「*descarte*」を語源とする。なお、代名動詞の *descaartarse* は、（責任などを）回避する、（～から）うまく逃げるを、名詞の *descarte* は 不用なものを捨てること、[トランプ]札を捨てること、[トランプの]捨て札、言い訳、言い逃れなどを意味する（カルロス・ルビオ，上田博人編 1992）。50代の男性の話によれば、ディスカルテという言葉は自分の高校時代までには耳にしたことがないといい、その同義語として *paagi* を挙げた。パアギとは「やり方、方法、工夫」を意味する。ディスカルテという言葉が使われるようになった背景として、マニラを中心としたタガログ語の映画の影響ではないかといわれるが、日常的にディスカルテという言葉が使われる現地の文脈に鑑み、本論ではディスカルテを対象語彙として取りあげた。

# 第 1 場面 市場で稼ぐ

- イビサン公設市場における鮮魚商い -

市場の朝は早い。午前 2 時、市場前の船着き場 (pangpang) に人々が集まってくる。熱帯とはいえ、朝の冷え込みは肌を刺す。船着場に漁船 (pumboat) の姿はない。4、5 人の男女が、船着場の岸に寒そうに襟を高くしてしゃがみこんでいる。その視線は大きく湾曲した河口に向けられている。場違いに感じられる乗用車のエンジン音がなりひびいてくる船着場の男たちは腰を上げ、軒先につどう一群の女たちは船着場に視線を向ける。自動車の低速走行音とおぼしき音響は、転用した漁船のエンジン音である。イビサン半島に点在する漁村、湾を挟んで向かい合うロハス市やバランガイ・タロン (Talon) からやってくる漁船の発する音である。やがて、船着場で待ち受ける男たちは、腰まで水に浸かりながら船端に近づき、狭い船着場への漁船の接岸に手をかし、つづいて魚の陸揚げを手伝っている。そのころには、船着場にも人垣ができる。バルデ (バケツ) に入った魚を前に、漁師と商人の間で取り引きが始まる。はやばやと望みの魚を手にした魚商たちは、いちはやく市場の中に消えて行く。市場に運ばれた魚は販台にぶちまかれ、漁種別に分類されていく。さき程まで沈黙していた市場は、店先に置かれたラジオの大音量のロックとともに一気に活気づくのだ (写真集 1 を参照のこと)。

## 第2章

### 貧しい季節を生きのびる

本章ではドドンら町場鮮魚商人たちのディスカルテを仕入れ、販売という、一連のプロセスの中で検討してゆく。また、本章は次章の売場場面のディスカルテの背景説明をなしている。

## 1 市場の概況

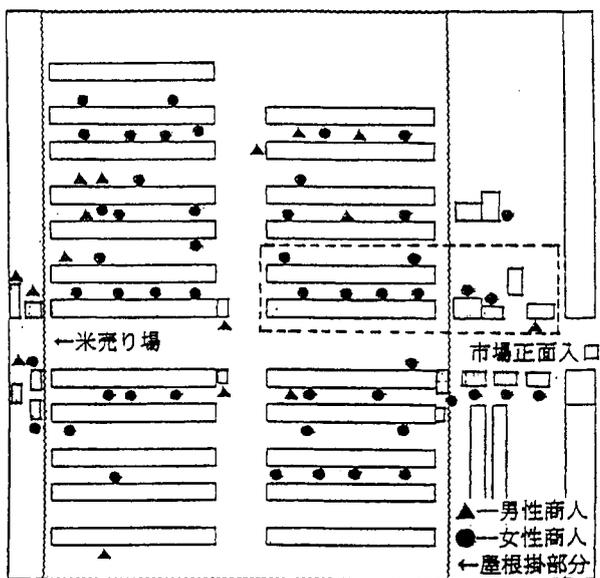
市場は中心市街地のポブラシオン・ノルテ（norte：北の意）に位置し、役場、教会、広場をセットにしたフィリピンの伝統的プラザコンプレックスを形成している。市場は火曜日と金曜日が市日（Tinda nga adlaw）となっており、市日と日曜のミサの後には、町場はもとより、近在の村々からの人出でごった返す。市場（merkado）は約50の常設店舗によってほぼ方形に取り囲まれ、屋根掛けされた中に、鮮魚（isdaan）、干物（ugahan）、米（bugasan）、肉（karnehan）、野菜（utangan）、衣料（bayohan）の6つの売り場がある。イビサンが水産物の供給基地ということもあり、なかでも鮮魚売り場（isdaan）はとりわけ活況を呈する。イビサンに集荷された水産物はロハス市やイロイロ市といった地方の中核都市に向けて定期的に搬送されるだけでなく、内陸の町々の市日によっては地元の旅売り商人たちによってももたらされる。

図2-1は通常日と市日の鮮魚売場の様子を示した模式図であり、商人の性別、配置、扱っている魚種を記したものである。

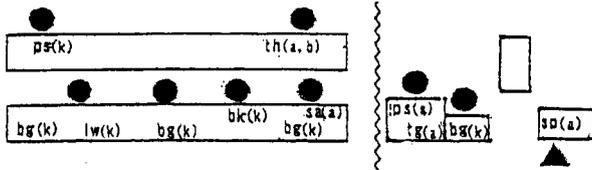
鮮魚売場は3方を常設の店舗にぐるりと囲まれ、広さは26×12メートルほど。米売り場から市場事務所のある正門に続く中央通路の左右にはセメント製の販台（tapangko）が整然と並び、その周りを取り囲むように竹製の販台（papag）<sup>(1)</sup>が配置されている。市場正門付近で竹製販台が並ぶあたりは、売り場の屋根がとぎれて野天になり、日中の日差しがきつい場所である。

米売り場から市場正門へ至る通路やそれに垂直に交わるセメント販台の間の通路、その交叉した中心から周囲に向かうほど、売場としては適さないといわれる。

セメント製販台は幅1メートルごとに権利が明確に決まっています、町役場に使用料（年125ペソ）を支払わなくてはならない。しかし、その場の権利をもつ者が一日中同じ場所を占めているわけではない。場の貸し借りが頻繁にあるため、場所と商人を結びつけて把握することは困難を極める。一方、竹製販台は個人の所有物であり、1日1基あたり平均5ペソで貸し出されている。セメント販台1メートルの使用料の他に、鮮魚売場で魚を売る者は、扱う魚種と量によって課税<sup>(2)</sup>され、正門入口で、あるいは徴税人に直接税金を支払わなければならない。売り場の商人と買い物客の数は午前8時頃にピークに達し、その日一番の賑わいをみせる。そして、ほぼ9時半を境に徐々に客足が遠き、熱帯特有のけだるい空気が売り場を包むことになる。

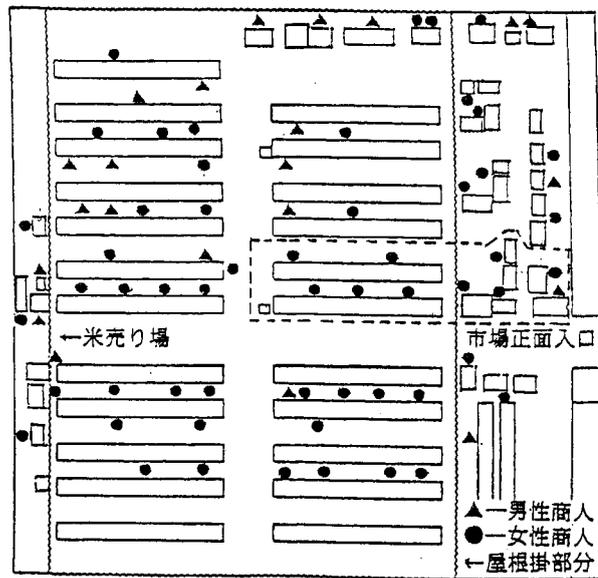


-点線部拡大-

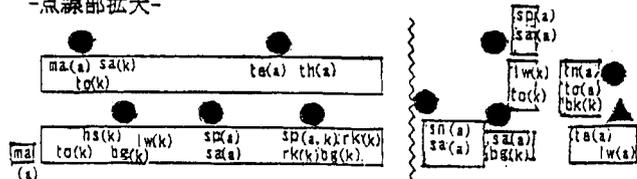


-魚種略号-

- |                       |                 |
|-----------------------|-----------------|
| bg-Bangros サバヒイ科      | th-Tahong 貝類 緑貝 |
| bk-Bokaw サバ科          | (その他, 当日 15 種)  |
| lw-Liwit タチウオ科        | -販売単位略号-        |
| ps-Pasayan エビ類        | (a)-Atado 山     |
| sa-Sarisari 混獲されて未仕分け | (k)-Kinilo キロ   |
| sp-Sapsap ヒイラギ科       | (b)-Baso コップ一杯  |
| tg-Tanga ハゼ科          |                 |



-点線部拡大-



-魚種略号-

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| bg-Bangros サバヒイ科      | th-Tahong 貝類 緑貝      |
| bk-Bokaw サバ科          | ti-Taiaba 貝類 牡蠣      |
| hs-Hasahasa サバ科       | tn-Tonongtonong カマス科 |
| lw-Liwit タチウオ科        | to-Tolox イワシ科        |
| ma-Manamsi ニシン科       | rk-Rokos イカ類         |
| sa-Sarisari 混獲されて未仕分け | (その他, 当日 16 種)       |
| sn-Sonog エソ科          | -販売単位略号-             |
| sp-Sapsap ヒイラギ科       | (a)-Atado 山          |
| te-Telapia カワズメ科      | (k)-Kinilo キロ        |
|                       | (b)-Baso コップ一杯       |

左：通常日 (1996.3.7AM8:00~9:00)

右：1996.3.8AM8:25~9:30)

図 2-1 鮮魚売場

## 2 鮮魚売買の過程：町場の鮮魚商人の置かれた状況

Kon wala isda nga baligya kami nga manugbaligya isda, wala kuarta sa adlaw-adlaw.

(魚売り、魚なければ、金もない)

Kon aga palokpalok kon udto paloypaloy kon happon paloooy-looy.

(朝、元気、昼、ちょっと疲れて、午後、慈悲を乞う)

これらは生産手段を持たない町場の鮮魚商人、また鮮魚という長期の保存にたえない商品を扱う商人の置かれた状況を端的に表現することわざである。最初のことわざは、町場鮮魚商人にあっては、とにかく売るための商品を何とかして入手しなければ何も始まらないことを直接に言っている。先述した市場の朝の光景は、彼ら町場商人の様子を記したものである。彼らは漁師たちが水揚げする魚を今か今かと首を長くして待っている。中には不運にも魚の入手をあきらめる者たちもいる。

二番目のことわざは、鮮魚という商品の特性を示す。おそらく魚の状態とそれを扱う商人の状況の両方を掛けたものだ。仕入れた直後の魚は見るからに新鮮だが、午後の日差しを浴びて腐敗に向かう。一方、朝一番に運良く魚を仕入れることができた得意げな商人が、午後になり、売れ残りをかかえて同情を誘っている姿をいったものである。町場商人の商売上の成功は、いかにして魚を入手するか、またそれをいかに利益を上げつつ捌き切るかにかかっているのだ。

### (1) 仕入れ (ginabakal)

町場商人の魚の入手ルートとしては、主につぎの3つがあげられる。まず船着場の漁師からの入手、つぎに商人自らの買い出し、さらに外部仲買人からの入手である。は商人自らが隣町のカピス州の州都であるロハス市の市場に、トライシクル(三輪バイク)を仕立てて買い付ける方法である。主に不漁期にこの方法がとられる。外部仲買人からの入手には、現在イビサン市場に関係を持つ仲買の親方(amo)が2人いる(2人は兄弟)。どちらもロハス市在住である。彼らはジブニを仕立てて、前日の午後、イロイロ市の漁港から魚を仕入れ、それを夜を徹してイロイロ - ロハスハイウェイ沿いの周辺市場の魚商人に配る。兄はイロイロ市 - ロハス市間をピストン輸送し、主にブカオ(キントキダイ科)を、弟はトロイ(イワシ科)を主に扱う。つまり、仲買人の売り子(buligboy)になって魚を入手する方法である。親方は売り子に販売価格を指示し、もうけを折半する。ただ、売り子は親方の購入価格を知らず、販売価格の指示に不満を持つことが多いという。また、親方自ら子飼いの売り子を数人引き連れて来ることもあり、他の商人が魚の供給を受けることはむずかしい。

入手ルートの大多数を占めるのが である。漁師と商人の間にせり人を立て購入するケ

ース（コミッションは売り値の5%）も一部には見られるが、通常は直接対面の取引である。イビサンでは現在7人の鮮魚商人（町場商人全体の約10%に相当）が、スキ（suki）と呼ばれるなじみの漁師を持っている。後述するが、これは商人が漁師に無利子で資本（燃料代、エンジン・網の修理、突然の出費など）を提供し、見返りとして漁師がその商人に優先的に魚を供給するものである。その際、商人は一括購入を望まれ、現金で支払いを行う。漁師は負債が完済するまでは他の商人との取引はできない。それ以外の商人たちは、不特定多数の漁師と現金取引を行う。支払いは現金である。ただし、時にアルサダ（alsada）すなわち商人が漁師から魚を貸してもらい、売り終えた直後か翌日返済する方式をとることもあるが、確実な返済の実績と信用がなければ、この方式は採用されない。

このようにさまざまな入手ルートが存在するが、商人の資本の多寡によりそれは自ら限定されてくる。ある魚商はスキやアルサダでの取引を嫌い、現金による不特定多数の漁師との取引を好む。アルサダの場合、負債の返済が終わらない間は他の供給者から魚を購入することが難しく、またスキでは常時一括購入が望まれている。そのためにそれらの取引では市場内の需給（量、魚種）に対処することが難しくなるという。

このように不特定相手との取引は、魚の量と種を需要に合わせて調整したいという商人の意向もあって選好される場合もある。ある商人は自らの生活状況を「utang, bayad, utang, bayad（借金、返済また借金）」の繰り返しだといったが、大多数の町場商人は不特定多数の漁師との現金で取引をせざるを得ない。ここでの売買の単位はカイン（50キロ）、バナラ（30キロ）、チス（24キロ）、バルデ（12キロ）であり、最小単位はガンタ（3.2キロ）である。

## （2）扱われる魚（1997年6月）<sup>(3)</sup>

表2-1に挙げた魚種は、6月の一週間で確認できたものを示した。仕入れ価格および販売価格は、調査時一週間の値を聞き書きによって記した。

魚種は漁法と対応されて理解されており、魚種によっておおよその産地が推察されるという。主たる漁法は、トロール、定置漁具（taba）、刺し網（patoloy）、敷き網（arong）、筏四つ手網（surambaw）である。

当地では魚は大きくイスダ（isda）とイビス（ibis）に類別されるが、イビスとはタバコの箱大以下の小魚を意味し、イスダの稚魚もそれに分類される。調理法の幅からもイスダが好まれ、一般に値もはり、量り売りされる。一方、イビスは山売りが中心である。収益率はイスダが優れており、イスダの方が一般に保存できる期間が長い。たとえば、見た目は落ちるが、氷詰めのパングロス（サバヒイ科）は3日持つといわれる。それに対して、イビスは翌日までが限界といわれる。

表 2-1 鮮魚売場の魚種および価格

|                       | 現地魚名          | 科         | 小売の単位 | 仕入れ価格     | 販売価格      |
|-----------------------|---------------|-----------|-------|-----------|-----------|
| 1 Talon (ロハス市) のトロール漁 | Palad         | ヒラメ科      | キロ    | 20-25     | 70-80     |
|                       | Pating        | トラザメ科     | キロ    | 30        | 40-50     |
|                       | Ubod          | ハモ科       | キロ    | 25        | 40        |
|                       | Latab         | クロサギ科     | キロ    | 30        | 60        |
|                       | Oposopos      | イトヨリダイ科   | キロ    | 20        | 30-40     |
|                       | Sonog         | エソ科       | キロ    | 30-35     | 60        |
|                       | Moong         | テンジクダイ科   | キロ    | 20        | 40        |
|                       | Manamsi       | ニシン科      | 山     | 20        | 30-40     |
|                       | Kasag         | カニ科       | 山     | 30        | 40-60     |
|                       | Shell         | 貝類        | 山     | 20        | 30        |
| 2 Basiao 沖の taba 漁    | Tangigi       | サバ科       | キロ    | 50-60     | 70-80     |
|                       | Layaw         | アジ科       | キロ/山  | 15-20/ga  | 30-40/ga  |
|                       | Salmorete     | ヒメジ科      | キロ/山  | 30        | 40        |
|                       | Kugao         | ソトイワシ科    | キロ    | 40        | 80        |
|                       | Sapsap        | ヒイラギ科     | 山     | 400-600/c | 40-50     |
|                       | Akinakin      | ツバメノコノシロ科 | 山     | 300c      | 40        |
|                       | Ito           | ナマズ科      | キロ    | 600 c     | 40        |
| 3 Basiao 沖の panti 漁   | Tambilawan    | ダツ科       | キロ    | 22-25     | 30-40     |
|                       | Alatan        | イサキ科      | キロ    | 40-50     | 60        |
| 4 Basiao 沖の arong 漁   | Bolinao       | ニシン科      | 山/キロ  | 600-900c  | 40        |
| 5 surambao 漁          | Hipon         | エビ類       | 山     | 40/ga     | 70/ga     |
|                       | Gisaw         | ボラ科       | キロ/山  | 40        | 60-80     |
| 6 川の taba 漁           | Pasayan       | エビ類       | キロ/山  | 70-80/cr  | 100-20/cr |
|                       | Tanga         | ハゼ科       | 山     | 20-25/cr  | 30-40/cr  |
| 7 養貝場                 | Abahong       | 貝類        | コップ/山 | Nd        | Nd        |
|                       | Tahong        | 貝類        | コップ/山 | Nd        | Nd        |
| 8 川での採集               | Tuway         | 貝類        | 山     | 5/ga      | Nd        |
| 9 養魚池                 | Bangrus       | サバヒイ科     | キロ    | 500/tc    | 25-70     |
|                       | Telapia       | カワスズメ科    | キロ/山  | 300/tc    | 25-40     |
| 10 砂浜での採集             | Litob litob   | 貝類        | 山     | Nd        | Nd        |
| 11 ロハス市より搬入           | Bolaw         | サバ科       | キロ    | 800/ba    | 40-60     |
|                       | Galongong     | アジ科       | 山/キロ  | 500/ba    | 30-40     |
|                       | Dalaganbokid  | テンジクダイ科   | 山     | 600/ba    | 30-40     |
|                       | Bulirawan     | アジ科       | 山     | 500/c     | Nd        |
|                       | Bokaw         | キントキダイ科   | 山/キロ  | 600/ba    | 30-40     |
|                       | Tonong tonong | カマス科      | 山/キロ  | 600/c     | 30-40     |
|                       | Balon toyong  | ニシン科      | 山/キロ  | 600/ba    | 30        |
|                       | Balila        | サバ科       | 山/キロ  | 400/ba    | 30-40     |
| 12 イロイロ市から搬入          | Toloy         | ニシン科      | 山/キロ  | 50-500/ba | 25-30     |

備考: tc: テックレース (50kg)、ba: バニラ (40kg)、c: チェス (24kg)、ga: ガンタ (3.2kg)、cr: カルテックス (0.8kg)

外部仲買人によってもたらされる魚以外で、近在漁村経由の魚種の多くは底棲魚類が中心であるため、季節によるバラエティの変化は少ないが、ポリナオ（ニシン科）のシーズンである乾期（3～5月）はイビサン市場だけでなく、イロイロ市やロハス市に向けて大量に供給される。干潟地帯であるイビサン湾沿岸河口は、豊富にパサヤン（エビ類）を産し、これには様々な種類がある（5章を参照のこと）。

パサヤンは主たるオカズとはならず、副菜として頻繁に食卓に上る。とくに生きたパサヤンは生で食され、美味で格好の酒のつまみとなる。

### （3）販売（ginabaligya）

買い手は大きく2つに分けられる。(A)買い物客(konsomedor)、(B)仲買人(komprador)、(C)自転車行商人(ginalibot)である。(A)は中心市街地の主婦や小規模食堂の主人などである。その日消費する分だけ、魚を一山、二山、量り売りでは1/4キロを最小単位として購入してゆく。(B)は、内陸の他市場から買い付けに訪れ、地元の市場で販売する商人であり、(C)とは買い付けた魚を自転車の荷台の盥にのせ、市場で自ら直接食料を購入することができない客を相手に、中心市街地周辺部の村々で売り歩く行商人のことである。このように魚はイビサン市場を中心にしつつも、周辺の市場とそのすきまの領域に行き渡ることになる。

(B)と(C)には(A)とは別の卸売価格が設定されており、一般の客に比べてその購入量も多い。しかし、船着場で販売される大口の単位では購入できない、規模の小さな商人たちである。

いずれの場合も馴染みの客はスキ<sup>(4)</sup>と呼ばれるが、先述した漁師の場合のスキとは異なり、必ずしも明確な負債をテコにした関係ではない。彼らによれば、スキとは「自分からよく買ってくれ、支払いを確実にしてくれる客」である。特に(B)と(C)の場合、卸売り価格の設定もあり、「スキだけでは商売にならない」ともいう。商人は客に祝い事などがある場合に頼まれた魚を用立て、便宜を図ることがある。また、スキであるお客に対して信用貸し(utang)を行うこともある。一般のお客の中で上客といえるのは月給とりやその妻であり、もっぱら貸し倒れの危険が少ないからというのがその理由である。それゆえか、彼らのことを特に「サー(sir)」、「マダム(madam)」と呼びかける。

場合によっては同じ売り場の他の商人が客になることもあるが、これは手持ちの魚の種類を増やし、買い足しをするためである。もちろん彼らにも卸売価格が適用されるが、船着場で購入する方が安上がりである。したがって、同業者の購入はあくまで臨時的なものに止まる。こうした購入では、商品を借り、販売後に返済するというアルサダ方式を取ることが多い。市場商人同士のアルサダは、とくにパンティン・パティン(patting)と呼ばれ、一種の互助関係を形成している。

### 3 貧しい季節を生きのびるそれぞれのディスカルテ

ここではエリー、ニン、ドドンという鮮魚商人それぞれの売買の実践を通して、ディスカルテに検討を加えてみたい。ちなみに、ここにあげた3人は市場のある同じポブラシオンに住む兄弟たちである。まず、3人を取り巻く諸条件について、特に市場参入までの経緯や世帯構成などを、現在の商いの内容と併せて記述してみる。

エリーは漁師のスキを持つ町場商人である。現在イビサン市場では7人の鮮魚商人が漁師とスキ関係を持っている（鮮魚商人全体の約10%に相当）。後述するが、これは商人が漁師に無利子で資本（燃料代、エンジン・網の修理費など）を提供し、その見返りに漁師がその商人に優先的に魚を供給するものである。一方、ドドンは自嘲気味に自らを「スタンバイ（stand-by）商人」だというのが、これは定期的に魚を確保し、販売することができる限界商人のことである。

表 2-2 9日間の収支一覧（1999年7月17日～25日）<sup>(5)</sup>

|        | エリー                 |       |      | ニン                 |      |     | ドドン               |      |     | 特記事項  |
|--------|---------------------|-------|------|--------------------|------|-----|-------------------|------|-----|---|
|        | 投資                  | 売上    | 利益   | 投資                 | 売上   | 利益  | 投資                | 売上   | 利益  |   |
| 17 (土) | 1630                | 1800  | 170  | 380                | 435  | 55  | 185               | 165  | -20 |   |
| 18 (日) | 1150                | 1440  | 290  | 243                | 350  | 107 | 240               | 320  | 80  |   |
| 19 (月) | —                   | —     | —    | 130                | 170  | 40  | 300               | 265  | -35 | エリー、スキが休漁のため市場に現れず。ドドン、カソシオ (kasosio) を行う   |
| 20 (火) | 1775                | 2490  | 715  | 210                | 280  | 70  | 0                 | 0    | 0   | 市日。   |
| 21 (水) | —                   | —     | —    | 125                | 185  | 60  | 420               | 550  | 130 | 前夜荒天、エリーのスキ出漁できず。ドドン、アルサダで魚を入手。   |
| 22 (木) | 515                 | 675   | 160  | 175                | 250  | 75  | —                 | —    | —   | 前夜荒天、エリーのスキ出漁できず、他魚商から入手。ドドン市場に現れず。   |
| 23 (金) | 1065                | 1270  | 205  | 300                | 547  | 247 | 0                 | 0    | 0   | 市日。前日荒天、エリーのスキ、1隻出漁する。  |
| 24 (土) | 2785                | 3200  | 415  | 395                | 597  | 202 | 0                 | 0    | 0   |   |
| 25 (日) | 1715                | 2090  | 375  | 110                | 150  | 40  | 0                 | 0    | 0   |   |
| 合計額    | 10635               | 12965 | 2330 | 2068               | 2964 | 896 | 1145              | 1300 | 155 | 注記：単位はいずれもペソ (peso)<br>一ペソ=3.2円 (調査時)<br><br>参考：<br>①米価 (二等米) キロ17ペソ<br>②法定最低賃金 (1日) (非農業部門)<br>西ビサヤ：146.9ペソ<br>(全国平均192.3ペソ)<br>(1999年当時)<br>[IBON:1999] |
| 平均額    | 1181                | 1441  | 259  | 230                | 329  | 100 | 127               | 144  | 17  |   |
| 登場日数   | 7日                  |       |      | 全日9日               |      |     | 8日                |      |     |   |
| 売買日数   | 7日                  |       |      | 全日9日               |      |     | 4日                |      |     |   |
| 売買時平均  | 投資額：1519<br>利益額：333 |       |      | 投資額：230<br>利益額：100 |      |     | 投資額：286<br>利益額：39 |      |     |   |
| 平均収入   | 約281ペソ<br>(9日間平均)   |       |      | 約100ペソ<br>(9日間平均)  |      |     | 約17ペソ<br>(9日間平均)  |      |     |   |

表 2-2 は 1999 年 7 月 17 日 (土) から 25 日 (日) までの 9 日間における 3 人の収支である。表 2-3、2-4、2-5 はこの期間の一日の売買内容を示したものだ。調査を実施した 7 月は、商人たちにとっていわば「しのぎ」の季節であるという。「Hulyo huyo-huyo. Agost pagusto (7 月はずらいが、8 月が来るさ)」ということわざは、通常、農民のことを言ったものであるが、魚商たちも好んでこの表現を使う。8 月は農民にとって収穫のシーズンである。商人とっては客である農民の懐具合がよくなれば、それにしたがって収入が増えるわけである。また、7 月は単に収穫前の実入りの少ない一時期を意味するだけではない。この時期は、北西季節風 (habagat) の影響で、イビサン一帯の漁獲は不漁期に入る。漁獲の不安定な時期となり、水揚量は減少し、魚価が上昇する。この時期は「スキの漁師を持たなければ魚が手に入らない」ともいわれ、商人の貧富の差が如実に現れる時期である。

(1) エリー (仮名: 女性、49 歳) 販売場所: 市場中央のセメント製販台

表 2-3 エリーの販売内容 (1999.7.17)

| 品目       | 仕入れ    |        |      |         |    | 販売      |          |        |        |
|----------|--------|--------|------|---------|----|---------|----------|--------|--------|
|          | 量      | 購入価格   | 仕入先  | 関係      | 支払 | 販売価格    | 販売先      | 関係     | 支払     |
| sarisari | 1 T    |        | Edit | suki    | 現金 | 1000 ペソ | Ely Balo | kumare | Alsada |
| locos    | 2 BL   | 800 ペソ |      | kumpare |    | 500 ペソ  |          | suki   |        |
| pasayan  | 5 G    | 450 ペソ |      |         |    | 175 ペソ  | Angi     | suki   | 現金     |
| enid     | 1/4 Kg | 150 ペソ |      |         |    | 45 ペソ   |          |        |        |
| latab    | 4 Kg   | 70 ペソ  |      |         |    | 45 ペソ   |          |        |        |
|          |        | 160 ペソ |      |         |    |         |          |        |        |

量の単位: C-Caltex (0.8Kg) G-Ganta (3.2Kg) BL-balde (12Kg) T-Tsis (24Kg)

エリーは 1950 年生まれ。11 人兄弟の 2 番目として生まれた。父は魚の卸商、母は魚の小売りを行った。1969 年縫製工としてマニラに出稼ぎ中、そこで現在の夫ナトンと知り合った。1970 年に結婚し、夫の出身地であるイビサン隣町の沿岸の町サピアン (Sapian) に住んだ。当時、夫はアロン (arong: 敷き網) とトロール船を一隻所有していた。エリーは夫の漁獲した魚をサピアン周辺部で行商 (manuglibod) して歩いた。だが、船のエンジントラブルが続いたため、船を処分して妻の出身地であるイビサンに移り住んだ。夫は現在、大工 (karpentero) として身を立てるが、定期的に仕事があるわけではない。タラバハン (カキ養殖場) とパトロイ (刺網) を所有している。1990 年から 94 年まで、近隣のクマレ (儀礼的兄弟) であるダリンという鮮魚商人と共同仕入れを行い、一日に 15 チス (1 チス 24 キロ) という大量の魚を商った。現在はその関係は解消し、一人で商売を行っている。長女 (28 歳) と三女 (22 歳) はそれぞれ教師、銀行員としてマニラで働いている。次女は地元の高校教師である。現在、未婚の子供 4 人と夫と生活している。収入は月 6000 から 7000 ペソであるという。

エリーの場合、表 2-3 を見ても分かるとおおり、ロハス市タロンの漁師エディットと排他的な関係を結んでいる。漁獲は全てを現金で買い取る。エディットとのスキ関係の構築は 4 年前にさかのぼる。当時エディットは漁船のエンジンが故障して資金難に陥っていた。エディットのスキであった商人は、彼に融資するだけの資本を持ち合わせていなかった。その時、エリーが 10000 ペソを提供して現在の関係に至ったのである。エディットは次男と甥の漁船も束ねており、エリーは合計三隻のトロール船を従えていることになる。エリーはスキであるエディットに日頃さまざまな便宜を図っている。事実、漁船のエンジンの修理費や燃料代、時には緊急に入用な金を融資している。当地ではファイブ・シックス (five-six) という金銭の貸し借りの慣行がある。期日は 8 日間で 2 割の利子を付けるといものだが、エリーは約 1000 ペソほどの金を期間約 1 ヶ月、無利子で提供するという。

また 1997 年 9 月 5 日、エディットの出身地タロンでのフィエスタの前日、エリーはフィエスタの準備にあててくれるようにと、100 ペソ紙幣をエディットの妻に握らせていた。翌日、エディットの息子がタロンに迎えに来、フィエスタに招待された。

逆に、イピサンでフィエスタがある際には、エディット夫妻を招待するという。1995 年調査当時、彼らの間柄は現地の人間の範疇で言えば、単なる知り合い (kilala) であったが、1997 年に再度調査した際には、エディットの息子の結婚を機に、クンパレ関係 (儀礼的兄弟関係)<sup>(6)</sup> を結んでいることが分かった。どちらが申し出たにしろ、W.G.デイヴィス (W.G.Davis1973 : 237) が言っているように、ここにはクンパレによるスキ関係の強化が見てとれる。エリーによれば「スキをつくるときにはディスカルテを使ったが、今はほとんどディスカルテを必要としない」という。魚は日々確保でき、特定の買い手 (スキ) が多数いるからだという。

ニニン (仮名 : 女性、51 歳) 販売場所 : 市場中央のセメント製販台

表 2-4 ニニンの販売内容 (1999.7.17)

| 品目       | 仕入れ  |        |     |      |    | 販売     |     |     |     |
|----------|------|--------|-----|------|----|--------|-----|-----|-----|
|          | 量    | 購入価格   | 仕入先 | 関係   | 支払 | 販売価格   | 販売先 | 関係  | 支払  |
| Telapia  | 1 BL | 150 ペソ | 女性  | 知り合い | 現金 | 120 ペソ | n.d | n.d | n.d |
| Manamisi | 1 G  | 35 ペソ  | 女性  | 知り合い | 現金 | 45 ペソ  | n.d | n.d | n.d |

量の単位 : C-Caltex (0.8Kg) G-Ganta (3.2Kg) BL-balde (12Kg) T-Tsis (24Kg)

ニニンは 1947 年、11 人兄弟の長子として生まれている。1965 年から 68 年まで縫製工としてマニラに出稼ぎに出た。結婚後、夫の出身地であるタロンに住んだ。夫は当時アロ

ンとトロール船を2隻所有していたが、ギャンブルでそれらを失い、1980年、妻の実家であるイピサンに移り住み、魚商を始めた。子どもは娘のみ4人である。長女(27)は結婚しロハス市で主婦をしている。次女はマニラに出稼ぎにでており、現在、2人の子供と夫との4人暮らしである。豚を4頭飼っており、夫はもっぱらその世話をしている。月収は約4500ペソ。

彼女が好んで販売する魚種はすべて川で漁獲されたものである。風の影響が少ない分、海洋で漁獲されたものに比べて供給が安定しているのがその特徴である。彼女は仕入れた魚をそのまま販売するだけでなく、加工を行う。小エビ(hipon)を原料としたダヨック(魚醤の一種)作りである。これは保存が利き、安定した商品供給を行うことができる。しばしば販台に少量の果物を置くことがあったが、魚が少ないときの補完であり、すべて自宅の庭でとれたものである。「自分が好んでエビを売ることはディスカルテではない、それは私のスタイルである」という。

(3) ドドン(仮名: 男性、38歳) 販売場所: 市場内周辺の竹製販台

表 2-5 ドドンの販売内容(1999.7.17)

| 品目      | 仕入れ   |                 |       |      |    | 販売     |     |    |                                 |
|---------|-------|-----------------|-------|------|----|--------|-----|----|---------------------------------|
|         | 量     | 購入価格            | 仕入先   | 関係   | 支払 | 販売価格   | 販売先 | 関係 | 支払                              |
| pasayan |       |                 |       |      |    | 255 ペソ | n.d |    | 内 20 ペソは<br>utang (つけ)<br>レストラン |
| kuwakit | 2.5 G |                 | Belin | 親戚   | 現金 |        |     |    |                                 |
| suwahi  | 7.5 C | 75 ペソ           | 女性    | 見知らぬ | 現金 |        |     |    |                                 |
| dayok   | 1 G   | 225 ペソ<br>80 ペソ | n.d   | 人    | 現金 | 180 ペソ | n.d |    |                                 |

量の単位: C-Caltex (0.8Kg) G-Ganta (3.2Kg) BL-balde (12Kg) T-Tsis (24Kg)

ドドンは1959年、11人兄弟の7番目として生まれた。子供の時から、鮮魚商人であった母について市場に通う毎日であった。18歳になるとマニラとイピサンを往復する生活が続いた。当時は主にマニラの建設現場で働いていた。前述したように、イピサンで交際していた先妻(故人)が妊娠すると、二人は結婚し、養魚池の番人(bantay)として働いたが、人恋しさも募り、長くは続かなかった。その頃、世帯を養うために、サデ網漁師(manughudhod)として川で小エビを捕ることを始めた。早朝2、3時に川に出かけて漁を行い、その足で市場に行き、自らそれを販売した。1985年、ビンゴゲームに似た非公式のギャンブルの仲介を始めた。ギャンブルの元締め(boss)が、なにかと彼の面倒をみてくれたという。1995年、公認の宝くじが出るに及んで当局の取り締まりが厳しくなり、ギャンブルから身を引いた。それまで魚商とギャンブルの仲介という二足の草鞋を履いていた。

その頃には友人の提供してくれた資本をもとに、彼はトライシクル（三輪バイク）をチャーターし、魚を仕入れる卸商（komprador）としてロハスとイビスンを行き来した。しかし、その友人のマニラ移住を期に、資本を失ったドドンは一小売商（manugatado）となった。1995年、先妻を心臓病で亡くしたが、1999年同じ鮮魚商人の女性と再婚した。先妻の子供とつれ子合わせて10人の子持ちである。そのうち、長男（20歳）は仕事をさがすためにマニラのオジの所へ、次男（17才）は高校に行かせてもらうため姉の所に預けている。長女と三男は先妻の実家へ、妻の長女は母の実家でそれぞれ生活している。現在は夫婦と子供併せて5人で生活している。

ドドンは主にごく親しい漁師に魚を貸してもらい、販売後に返すアルサダや、他の同様な商人との間でカソシオ（kasosyo）を行い、魚を入手する。カソシオとは資本の出資額を問わず、ともに販売を行い、その利益を両者間で折半するものである。

#### 1) カソシオ（kasosyo）の事例

1996年2月5日（月）午前9時30分 イビスン市場正面入り口にて。前日（2/5）の悪天候（強風）のために魚の入荷量は少ない。川岸のパンパンでの水揚げは貝類のみ。魚は昨日午後、ロハス市 Libas 入荷分が大半を占める。魚の種類は14種（昨日23種）。いつもより魚商の数は少ない。1山の盛り方がいつもよりも少な目である。町場の商人が船着き場でサデ網漁（後述第5章）の小エビの到着を待っている。

(A) 門前でロニー（カブガオ在）からアルノルド（巡回的商人、ピナノボル在）が Laplap（ニシン科、イビス）を2ガンタ（1ガンタ＝3リットル）、50ペソで購入した。

(B) 市場内に持ち込むために税金2ペソを入り口の徴税人に支払った。共に販売したのはドドンである。彼らは購入した Laplap1 ガンタン分をタバコの上に広げ、7つの山（atado）を作った。「Laplap, Laplap」と声を張り上げて客を呼び込む。

(C) 客は合計6人、内2人は見知らぬ人、トト（ドドンの3番目の姉、バンワ在）、シナイダー（アルノルドの妻、巡回商人、ピナノボル在）、オタイ（アルノルドの妹、巡回商人、タゴットッド在）である。売値は以下の通りだが、値切りの交渉は見られなかった。ただし、標準価格は1山が10ペソ、2山15ペソ、3山20ペソである。販売内容は表2-6の通りであった。

表 2-6 販売内容

|       |            |      |
|-------|------------|------|
| 客1    | 2山 (atado) | 15ペソ |
| 客2    | 2山         | 15ペソ |
| トト    | 2山         | 10ペソ |
| オタイ   | 1山         | 贈与   |
| シナイダー | 1ガンタン      | 50ペソ |
| 合 計   |            | 90ペソ |

ビンタ（売り上げ）は 90 ペソ。ギナンシャ（儲け）は 40 ペソ。これをドドンとアルノルドはトゥंगा（半分）に分けた。一人あたり 20 ペソのギナンシャ。およそ 20 分間のできごとであった。このようにカソシオは、出資者の別なく、利益を折半するところが特徴である。

また、彼は市場へと続く道と交差する四つ辻に立って売買を行うこともある。そこは通称「スタンバヤン（stand by-an）」と呼ばれ、ドドンと同様、5、6人の男性魚商人たちが集まっている。彼らは自らをスタンバイメンバーと呼ぶ。女性がこのスタンバヤンに立つことは見栄えが悪いとも言われる。この場所は市場から 150 メートルほど離れており、クツジャン、タロン方面からトライシクル（三輪バイク）などに乗り付け、バケツ単位の小口の魚を市場に持ち込もうとする、漁師の妻を対象に売買が行われる場所である。その際は、即金決済が基本である。「彼女らはまだ鮮魚売場の魚の値を知らない」というが、その日の相場を知る前に、すなわち彼女らが市場にたどり着く以前に取り引きしてしまおうというのが、ドドンらのねらいである。主に市日には、船着場の取引が行われる時間をはずした魚が断続的にもたらされる。ドドンたちは遠くにバケツを手にした女性を目ざとくみつけては駆け寄る。実際、駆け寄ってみると、バルデの中は野菜だったという場合もあるが、それにめげず同じことを繰り返す。そこで運良く魚を仕入れることが出来れば、主に二人一組で市場に持ち込み販売することになる。カソシオである。彼らの合い言葉は「いっしょにディスカルテをしよう！（Magdiskartehay kita!）」であるという。ドドンたちは市場入口ではなく、常設店舗の一角から売場にもぐり込み、結局カスケット（税金）を払うことはなかった。

## 2) パウナウナを逆用する

ドドンはスタンバヤン付近で、豚を買い付けに来た客に駆け寄り、豚を売ることがあった。もちろん彼が豚を所有しているわけではない。代金を受け取り、「豚をつれてくる」と言って、彼は豚を「探しに」行った。知り合いから受け取った代金より安く豚を「買い付け」、その豚を客に引き渡した。受け取った代金と、豚の購入代金の差額が彼の利益として残った。「（自分の口なかの唾を指さして）自分の資本はディスカルテである」彼はそう言う。

市場には、パウナウナ（paunauna）という不文律が存在している。パウナウナとは、「早い者優先」の規範である。それは、売り手確保のため生じる商人間の値下げ競争を防ぎ、共倒れを防ぐ機能をもった。また、仕入れ時においては、他の商人を排除し、商人間の過当な競争を抑制し、価格上昇を防ぐ。ある時、ドドンはいち早くめばしい魚を見つけると持ち主と交渉をはじめた。商談がまとまると、早速それを転売して、持ち主に代金を支払った。これは、「早い者優先」パウナウナの優先権を逆用した事例といえる。それは商売の元手を欠く、商人たちのディスカルテなのである。

#### 4 まとめ

ここでは資本規模の点で対照的な次女エリーと三男ドドンを取り上げる。商人たちのディスカルテを浮き彫りにするために、極端な例を対比的に考察したい。

まず、エリーの特徴は供給者、すなわち漁師との間にスキと呼ばれる排他的な関係を結んでいるところにある。一方、大口の客エリーバロー（巡回的女性鮮魚商人）との間にスキ関係を持ち、安定した商品の捌き先を持っている。イロンゴ社会においては、ウタン・ガ・カバラサン（utang nga kabalalan）とウタン・ガ・カブプトン（utang nga kabubut-on）が基本的互酬の枠組みになるという。後者は相手方から自発的な贈り物や奉仕の援助を通じて生じるもので、心の中で感じる恩義である。前者はこちらからの要請に基づく援助や奉仕を通じて生じるもので、返礼しなければならない借りである。しかし、地位が上の者に何か依頼したときには、同じ内容で返礼できないので恩義の念が永続し、ウタン・ガ・カブプトンに転換していくという（Jocano1983：227-228）。先に指摘したとおり、エリーのスキ関係は、エディットの要請に基づく彼への1万ペソの貸与から始まった。また、エディットの不測の出費に対して、エリーは無利子で対応する。祭日の際は、さりげなく金銭的援助をする。これはエリーが豊富な資本を元手に、この互酬の枠組みをうまく利用しているといえる。さらに、現在はエディットとの間で儀礼的親族関係を結んでいるのだ。このことから、彼女は商売の安定化のために、不安定な関係の制度化をはかっていると言えるだろう。

一方、ドドンの場合はエリーのような特定の供給者を持つことができない。また、仕入れが定期的に行えないため、商売を安定させてくれる大口の客＝スキを持つことも困難である。漁師のスキを持つ場合、エンジントラブルなど、不測の事態に対処できるように、漁船1隻当たり約8000ペソの資金が入り用だという。エリーの場合は、3隻あたり最低でも2万4000ペソの資金を常備しなければならないことになる。当然ドドンにはその余裕はない。ドドンは主にごく親しい漁師に商品を貸してもらい、販売後に返すアルサダや、他の同様な商人との間でカソシオを行い、魚を入手している。また、彼が扱える範囲の魚種は、現地でイビスと分類されるテラピア（telapia）やマナムシ（manamsi）、サップサップ（sapsap）といった安価な小魚が主である。これらの魚は収益率が低い上に傷みが早いという欠点を持つ。このような中であって、彼の商いはまさに日々のデリカード状況に対処するディスカルテの連続といえる。ドドンのようなきわめて低資本の者にとって、ディスカルテがいかなる意味を持つかは、まさにそこに見て取れるだろう。ドドンは先立つもの（資本）の欠如を常に訴えていたが、奇しくも彼が自分の口を指さして「自分の資本は、この涎（lawa-ay）」といったように、ディスカルテはいわば「弱者の武器」としての役割を果たしているのではないか。

( 註 )

- ( 1 ) 1997 年 12 月、町長の方針により、売り場を不法に占拠しているという理由で竹製の販台は撤去されたが、販台の足の部分を取り去り、天板部分を魚の容器に渡した即席の販台がすぐに出現することになった。
- ( 2 ) 鮮魚商人たちは生産手段の有無から大きく 2 つに分けられる。生産手段を持たない「町場の鮮魚商人」と、生産手段を持つ「村の鮮魚商人」である。町場の商人は商品としての魚を漁師や他の商人から入手しなければならない。村の商人は主に漁師の妻たちである。以下、断りが無い限り、鮮魚商人とは売り場の大多数を占める町場の鮮魚商人を指すことにする。
- ( 3 ) 水産物は 3 つのクラスに分けられ、課税額もそれぞれ異なる。1 等級 ( first class ) はバングロス ( Bangros ) などキロ当たり 0.5 ペソ、2 等級 ( second class ) はトロイ ( Toroy ) など 0.35 ペソ、3 等級 ( third class ) は主にイビス ( ibis ) 類であり 0.25 ペソ。
- ( 4 ) 日本語の「得意」に近い概念。スキの間柄の者同士は互いに「suki ! 」と呼び合う。スキの間柄では相互契約的な色彩をおびる。しかし、どの段階の相互関係からがスキなのかという定義自体は難しい。ひとつは双方の立場の人間の認知的なズレもあるし、発展的概念でもある。また戦術的な意味での呼称の使用が見られる。この関係は kumpare・kumare ( 脚注註 6 参照 ) に発展して強化されることが指摘されている ( Davis W.G. 1973 )。
- ( 5 ) この表 2-2 における「平均収入」とはあくまで市場商いによる収入であり、世帯の全収入をいったものではない。当然エリーの場合は夫の収入、娘の収入、仕送りなどが日々の収入を補っている、また、ニニンの場合はこれ以外に夫の養豚、マニラの娘からの仕送りがある。しかし、ドドンの妻は、調査期間中、産後間もなかったため、彼の世帯の収入はその双肩にのしかかっていたのであり、そこから生活の困窮度が押し量られるだろう。第 3 章で検討するが、これらの経済的条件の中で「売れ残りを出す」ということの危機的状況の重みをもう一度確認したい。ここで留意しておきたいのは、いずれの商人の場合も、売すべき魚を入手するとすぐに、その日分のオカズになる魚を取り置きしていることである。ドドンの場合、17 日と 19 日は売上げがマイナスではあったが、その日のオカズは確保していた。
- ( 6 ) kumpare・kumare 関係とは、子供の洗礼、結婚を機に、その子供を媒介とした親と儀礼親、儀礼親間の関係を意味する。また儀礼親と儀礼子の間は、それぞれ maninoy・maninay と ihado・ihada と呼ばれる。

## 第3章

### 販台上のディスカルテ

本章ではとくに売場場面を取りあげ、よりミクロな場における商人たちのディスカルテを検討してゆきたい。

## 1 売り場場面のディスカルテ

ここでは彼ら自身が典型的なディスカルテであるという、小売り場面の「客との掛け合い」と「魚の盛りつけ」の実践について検討したい。いずれの実践も、客足の鈍くなった午前9時台の後半に顕著になる。商人はその日の売り上げを家に持ち帰るため、魚を捌ききり、売れ残りを出さないためにさまざまな工夫を練り広げることになる。

以下では、販台越しの実践と販台上の実践に分けて検討してみるが、とり急ぎそれらの考察に当たって前提となる市場の不文律について触れておきたい。市場では客と商人は一対一で交渉を行い、その際、他の商人はその交渉が決裂するまで口を挟むことはできない。それを破ると、特に男性の場合、暴力沙汰にまで発展することがあるという(Szanton, M.C 1972、Davis, W.G 1973)。これは、商人が仕入れの際行う漁師との交渉や販売の際の客との交渉の両方にもあてはまる。前述したように、イビサンではこれをパウナウナ(paunauna)と呼んでいる。客との交渉中、他の売り手はそれに横やりを入れることはできない。その中には強引に客を奪うことや、交渉中の売り手よりも安い価格を提示してはいけないことが含まれる。前述したように、これは売り手同士が値下げの競争を行い、その結果としての共倒れを防ぐ機能を果たすと解釈されている。

## 2 販台越しの実践 - 客との掛け合いのディスカルテ -

売場で耳を澄ませればさまざまな声が飛び込んでくる。「プロ、プロ、プロ(Pulo, pulo, pulo)」「魚の値段10ペソ」、「ラップ、ラップ、ラップ(LapLapLap)」「魚の名前」、「キンセ(Kinse!)」「15ペソ」、「マレ(Mare!)」「コンパドレ関係にある女性同士の呼びかけ」、「バカル アナイ ディリ(Bakle anay diri)」「買ってください」、「マノン(Manong!)」「おじさん」、「タットロ ポロ(Tatolo pulo!)」「3つで10ペソ」、「ホイ」(親しい人物の注意をこちらに向ける呼びかけの言葉)、「プスプス」(人の注意をこちらに向ける唇と歯の隙間から息を吐き出す音声表現)など。これら魚価や扱っている魚の名の連呼、自分の元で買ってくれという懇願、特定の人々への呼びかけは、商人たちの言葉によれば、まさに彼らのディスカルテの宝庫であるという。

表 3-1 売場で行われる客との掛け合いのディスカルテ

ドドンさん(男性商人:38歳): 見知らぬ者とのやりとり

魚商人ドドンは彼の販台の前を一人の男(同年代)が通りかかるのを目に留めた。どこかで以前、見た顔だった。

(T:売り手;C:買い手)

| 日本語訳                                    | 原文 (イロongo語)   |
|---|--|
| 1 T: おっ、違うかな...                         | 1 T: <i>Oh. Indi bala.</i>   |
| 2 T: <u>あんたはクジャンからかい?</u> ねえ            | 2 T: <i>Taga, taga Cudian ka? un.</i>  |
| 3 T: <u>俺達二人は友達だ。</u> 怖がってるみたいだね。       | 3 T: <i>Migohay ta nga duwa. Daw nahadlok ka.</i>                              |
| 4 T: 俺から魚買ってよ。                          | 4 T: <i>Bakle ko anay isda ho.</i>   |
| 5 T: 1キロだけだから                           | 5 T: <i>Isa lang ka kilo.</i>  |
| 6 T: <u>俺達は友達じゃないみたいだね</u>              | 6 T: <i>Daw indi ta migohay nga dua kag.</i>                                   |
| 7 T: 俺の魚は本当にいいよ。気に入らないの?                | 7 T: <i>Kanami gid lang sang isda ko indi ka sini kaoyon nga.</i>              |
| 8 T: でも俺達友達だろ                           | 8 T: <i>Migo ko ni pero.</i>   |
| 9 T: こっち来て                              | 9 T: <i>Dali di-a.</i>   |
| 10 T: ちょっと見てよ。ねえ本当にいいものなんだよ。            | 10 T: <i>Lantawa bala ho. Kay madayad ho.</i>                                  |
| 11 T: <u>俺達友達だから値引きするよ。</u> いくら払ってくれるの? | 11 T: <i>Para sa pagamigohay ta nga duwa. Paayo-on ta ka. Pila ayo mo haw?</i> |
| C: 値引きしてくれるの?                           | C: <i>Can you?</i>   |
| 12 T: ああいいよ。                            | 12 T: <i>A-sige.</i>   |
| 13 T: いいよ、問題ないよ。                        | 13 T: <i>Okey wala problema.</i>   |
| 14 T: いいよ。                              | 14 T: <i>Okey ya.</i>  |
| 15 T: ありがとう。 <u>バレ</u> 。ありがとう。          | 15 T: <i>Salamat. Pare, Salamat.</i>   |
| 16 T: 今度また俺の所に来てくれよ。 <u>俺たちはスキだから。</u>  | 16 T: <i>Next time sa iban nga adlaw balik ka diri sa akon kay suki kita.</i>  |
| 17 T: ありがとう。 <u>バレ</u>                  | 17 T: <i>Salamat. Pare.</i>  |
| 18 T: どうもありがとう。                         | 18 T: <i>Thank you very much.</i>  |

オタイさん(女性商人:35歳): 親類とのやりとり

オタイは自分のおばが向こうで買い物をしているのを見た (T:売り手;C:買い手)

| 日本語訳   | 原文 (イロongo語)  |
|--|---|
| 1 T: おばさん!   | 1 T: <i>Te!</i>   |
| 2 C: 何? オタイ!   | 2 C: <i>Anonaman na Utay hay?</i>   |
| 3 T: 向こう(別の魚商人)で買うの?   | 3 T: <i>Dira ka gid mabakale.</i>   |
| 4 C: 姪っ子、ちょっと待って、私はここで買い物をして居るんだから。  | 4 C: <i>Dali lang, gumankon, kay gabakal pa ako di.</i>   |
| 5 T: 後でここに来てよ、おばさん!  | 5 T: <i>Dali di dayon Te ha.</i>  |
| 6 C: 分かった。ちょっと待って。あなたは何を持っての? 姪っ子!   | 6 C: <i>Oo, dali lang. Ano imo, gumankon, baligya hay.</i>  |
| 7 T: あるよ。おばさん。これ買ってちょうだい。おばさん。私、 <u>ミルク(子供用)</u> を買うんだ。お願い。これが最後の。それ20ペソで買って。もう家に帰るから。 <u>ミルク</u> を買うのよ。 | 7 T: <i>Are, Te, ho. Bakla na ni Te ho kay ibakal ko ni gatas. Sige na Te! Kataposan na lang ini Bakla na 20 kay ibakal ko gatas.</i>             |
| 8 C: あれまあ。姪っ子。あんたに気をかけてなかったら私は買わないよ。もう私のカゴには魚があるんだから。  | 8 C: <i>Bau, gumankon, wala lang ako, gumankon, naloooy sa imo. Indi ko sini magbakal. Damo na akon sud-an, akon bande damo nano akon sud-an.</i> |
| 9 T: あら、あなたの姪はかわいいそうなのよ。これ全部買って。 <u>20ペソ</u> でいいから。  | 9 T: <i>Hay gumankon mo kaloooy bakla na lang 20 na lang tanan tanan.</i>   |
| 10 C: 分かった。いいよ。全くこの姪っ子たら。 <u>20ペソ</u> で買ったから。さあ包んでよ。包んでよ。  | 10 C: <i>Hay sige na lang Bau ining gumankon ko gid bala. Daw indi mo gid. Hay posta na da kay baklan na 20. Posta na.</i>                        |

ここでは商人自身に、売り場で行われる客との掛け合いのディスカルテを再現<sup>(1)</sup>してもらい、彼らのディスカルテの一端にせまることにする。再現という手法を取ったのは、ディスカルテを使う者の意図を探るもくろみがあるからである。ここに登場する二人は、いずれも町場の鮮魚商人である。彼らは一人で商人と客の二役を演じ分けている。表 3-1 のダイアローグは、彼らの演技をビデオ撮影し、その会話を文字に起こしたものである。それに基づいて、後に聞き書きを行うという方法をとった。彼らが特に「ディスカルテである」といった部分には下線を付した。

表 3-1 の 2 つのダイアローグをふまえて考察に入ろう。まずドドン、オタイの両者とも客となり得る人物を見つけ出すところから始まる。ドドンは売り場を通過する男性に声をかけ、自分の売り場に寄せるきっかけをつかむ。オタイは他の商人の元で買い物をしてきたオバをめざとく見つけ呼びかける。商人はまず自分のところに客を引き込み、一対一の交渉に持ち込まなければならない。

下線を付したディスカルテの部分を検討すると、以下の 3 つの特徴が指摘できるだろう。1 つは、自分の扱っている商品を買うことの利点を告げる表現の使用（直線部分）、次ぎに商人自身の生活必需品の欠乏を訴える表現の使用（点線部分）であり、さらに商人と客との個人的関係を喚起する表現（波線部分）を用いていることである。

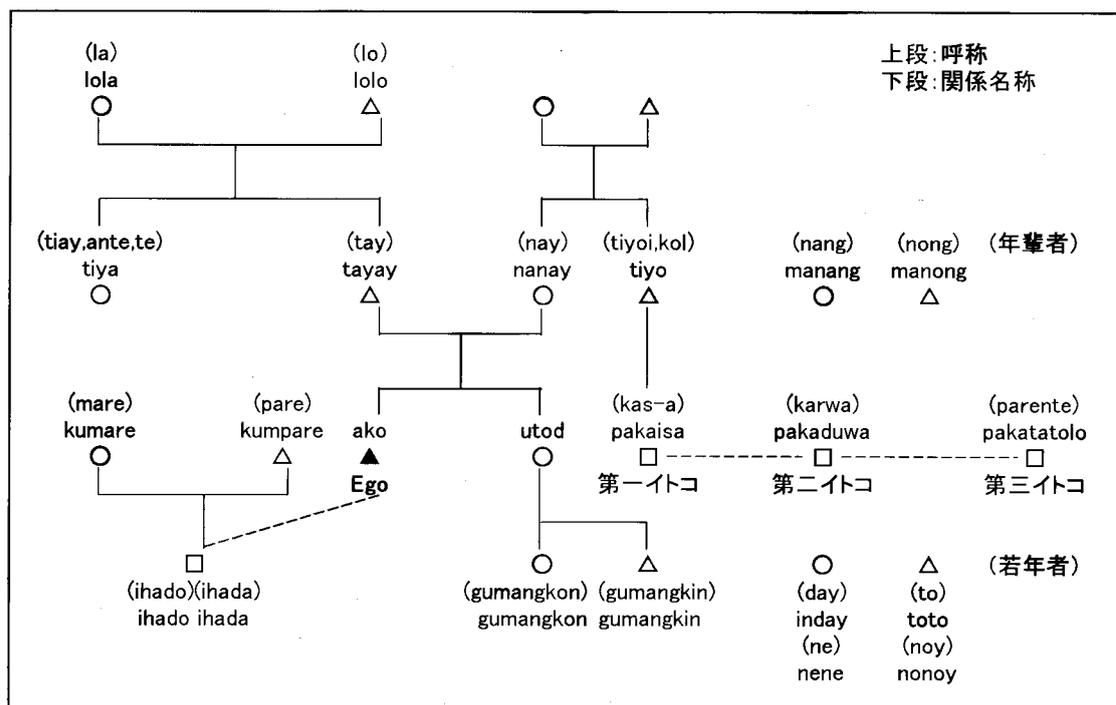
に関していえば、ドドンの「おいしい (kanami)」、「よい (mayad)」、「値引きできる (paayo-on)」、オタイの「全部を 20 ペソでいい (20 na lang tanan)」といった表現がそれに当たる。

の生活必需品の欠乏に関しては、通常、米 (bugas)、子供のミルク (gatas)、朝食のパン (pandesal) を買うお金がない、だから買ってこれという表現であり、市場で日常的に耳にする表現である、オタイの「ミルクを買う (mabakal ko gatas)」がその例である。客に同情を引く (kalo-oy) このような商人の表現は、男性が用いると失笑を買うといわれる。

に関していえば、イビサンでは身近な者同士の助け合い (bulos-bulos) が社会的規範として重要視されているが、これらの表現はこの規範を喚起させるものとして機能する。表 3-2 は現地イビサンにおける関係名称と呼称を示したものである。

ダイアローグに戻ろう。ドドンは見知らぬ客を「友人」として仮構的に設定し、「友達だから買ってくれるのは当然」という論理を用いて、取引成立へと向かわせる。この中で「ミッグス (migs)」、「パレ (pare)」<sup>(2)</sup>、「スキ (suki)」という表現に注目したい。「ミッグス」は友人関係にある者に対する呼びかけの表現であり、「パレ」はクンパレ (kumpare)、すなわち儀礼的兄弟関係にある者への呼びかけの言葉である。このような表現を順次使い、商人は客との親しさを演出する。「スキ」は得意客であり、この関係に付随する値引き、信用貸しなどの利点を強調することになる。一方、オタイの場合は、オバに対して「かわいそうな姪っ子」という表現を用い、客であるオバと自分の関係を強調してみせるのである。

表 3-2 イビサンにおける関係名称と呼称



聞き書きによると、「客とのやりとり」で要になるのは、カロオイ (kalo-oy: 衰れみを乞う、同情を引く) であるという。すでに見た2つのプロトコルの中でも大半を占める2つの実践(②と③)は、いずれもカロオイに含められる。②ではカロオイを日常欠かすことができないモノに仮託した表現の使用によって、また③はカロオイを社会関係上のモラルに訴えることによって実現しようとしているといえるだろう。彼らはしばしばこの場面でのディスカルテとカロオイを同義で使用している。以上のように、客との掛け合いのディスカルテとは、売れないものを売るためのイデオムや社会関係知の使用、つまりそれを具現化する「ものの言い方」の妙といえるのではないだろうか。

### 3 販台上の実践—盛りつけのディスカルテ—

次に、盛りつけのディスカルテについて検討してみよう。魚は量り売りであれ山売りであれ、いずれの場合も山 (atado)<sup>(3)</sup> をかたち作り、販台の上にきれいに盛りつけられる。また小道具が用いられることもある。たとえば、バナナの葉や緑ないし青色のビニールシートを魚の山の下にひくことや、赤いミニトマトに緑色のねぎを突き刺し、それを銀色の魚の上に置くというものである。いずれも「見た目がいいからだ (manami ang lantewon)」といわれる。中には場違いな人形をおいて人目を引く者もある。魚自体を使った山の造形表現としては、魚種によっておおよそ一定の傾向がみられる。以下にそれを示す(図3-1)。



写真 販台の上にきれいに並べられた魚の山

魚の飾り付け  
(上段：形態名称、下段：魚名)

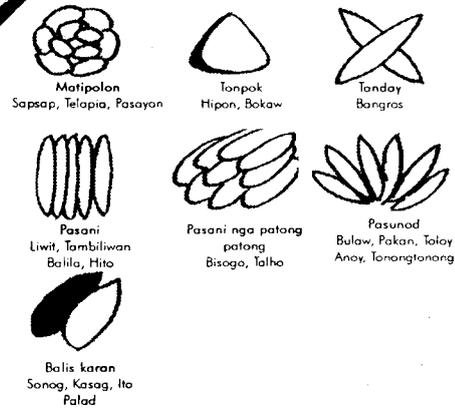


図 3-1 魚の飾り付け

ある男性の商人が、浮き袋がつぶれ腹がへこんだ魚の口に、自ら口を付け息を吹き込んでいるのを眼にしたことがあった。このような見た目や飾り付けへの執念はいったいどこから来るのだろうか。先に指摘した市場の不文律を重ね合わせると、私たちが通常スーパーでみる飾り付けとはまた違った意味をもっていることが分かる。市場では魚の価格は目に見える形で表示されてはいない。また、値段を商人同士で競り合うことは、不文律を破ることにもなる。さらに、売場で隣りあう商人たちが扱う魚種はどれも代わり映えしないものである。このような中で、他の商人との差別化をはかるためには盛りつけが鍵となるのだ。いわば、言葉による駆け引きを「騒々しい熱い戦い」とすれば、それはまさに「静かな熱い戦い」呼べるものである。

ただ、ここには見落としてはならない小さな実践が複数存在している。魚の欠点を利点に、いや、そこまでは行かなくとも、見劣らないようにする試みの数々である。たとえば内臓をわざと見せること（特徴的魚種：バングロス）や、青魚を青い染料に浸すこと（タギギ）である。私はまた、ある男性商人が、見るからに鮮度の落ちたサップサップを販台に並べていた商人に向かって、「ディスカルテを使えよ」と声をかける場面に遭遇したことがあった。彼はひよいと拾い上げたその小さな魚の背骨を器用に折り始めた。魚を「く」の字に折ることは死後硬直を装い、新鮮さを演出してみせる工夫なのだという。これらは鮮度が落ちたものを新鮮に見せる工夫である。同様の工夫としては、ほかに魚の重なり具合を最小にして大きな山に見せることや、濡れた新聞紙を丸めて魚の山にそっと忍ばせること、あるいは上げ底の皿を使用することなどがある。これらは量の少ないものを多く見せる工夫である。

また、山売りでは、量り売りとは違い、量の微妙な調節も可能であるところから、客の見ている前で、魚を一握り加えてみせるなどといった演出も見られる。

以上のように、盛りつけのディスカルテとは、それぞれの魚の特性に見合った方法で、売れ残りの出そうな魚を売り切るために、今あるものに一工夫加えることを意味するのだ。

#### 4 まとめ<sup>(4)</sup>

以上、鮮魚商人たちのいう2つのディスカルテを検討してきた。こうした小売り場面では、それ以外にも様々な実践が見いだされる。たとえば「客の支払いとしてバナナを受け取り、のちにそれを販売すること」や、「売れ残りを干して保存すること」などで、これらはいずれも売場のディスカルテであるという。このディスカルテは表3-2のように、「目的」、「デリカード状況」、「対応法」という3つの要素に分類・整理できる。

こうしてみれば、鮮魚商人のディスカルテとは、市場の不文律などの諸条件のもとで、利益を家に持ち帰るといふ「目的」のための、さまざまな「デリカード状況」への「対応法」だといえる。ディスカルテとはまさにこの対応法の妙である。「客との掛け合い」では売れないものを売るための巧みな言葉遣い、すなわち「ものの言い方」がそのディスカルテであったわけであり、また「魚の盛りつけ」では、売れないものを売るために加える「魚への一工夫」がそのディスカルテであった。それは、親族・友人関係の知識、あるいは魚類に対して持つ知識の、場面に応じた使用であり、民俗的知識の実践的運用技術といえるものである。問題はその運用技術のあり方にある。

表 3-3 鮮魚商のディスカルテ（小売り場面）

| 目的           | デリカード状況       | 対応法 (diskarte)               |
|--------------|---------------|------------------------------|
| 家に利益を持ち帰ること。 | 売れ残りがでそうだ。    | 巧みな言葉で客に買わせる。                |
|              | 売れ残りがでそうだ。    | 見栄えよく魚に手を加え客に買わせる。           |
|              | 客が現金で支払えない。   | 代わりに客の持っていたバナナを受け取り、後でそれを売る。 |
|              | 売れ残った魚が腐りそうだ。 | 干し魚にして後日販売する。                |

ある時、腐りかけた家の屋根に開いた穴を見ながら、ディスカルテについて説明を受けたことがある。たとえば、その穴を段ボールでふさぐこと、それがひとつのディスカルテであるというのだ。試みに屋根を葺き替えることを提案してみたが、それはディスカルテの本意からはずれるといふ。ここでは「その穴をどう埋めるか」という点が強調されている。全体を一挙に変えてしまうのではなく、問題が生じる部分にあり合わせのもので用を足すこと、これをディスカルテといっているのである。レヴィ＝ストロース (1976: 22-28) は資源自体のパイを大きくするのではなく、その中でどうやりくりすることをブリコラー

ジュと呼んだが、まさにこのプリコラージュこそこの場面にあてはまるといえるだろう。ちなみに、「小さいディスクルテで大きなお尻 (diskarte gamay dako munay)」というのは「男性のちょっとしたディスクルテで女性をものにする」とをいったものである。このような性的な表現を幾度か耳にしたが、「お尻 (munay)」を「利益 (ginansya)」に置き換えてもよいという。すなわち、ディスクルテとは最小の努力で最大限の成果を指向するものであるのだ。

また別の機会に、椰子の実採りを例にディスクルテの説明を受けたことがあった。「お前は椰子の実がほしい。しかし椰子の木に登ることができない。じゃどうするか？」私はそこからへんに転がっていた竹の棒を指さして、「あれで実を落とす」と答えた。彼らによると「それがディスクルテだ」というのである。また木登りのできる人に頼むこと、それもまたディスクルテであるというのだ。試みに、椰子の木自体を品種改良して背を低くすることを提案してみたが(隣町のマンブサオ Manbusao で当時、その種の品種改良が試験的に行われていた)それはディスクルテとは言わないという。ここでは、「今、ここで椰子の実がほしい」という点が強調されている。その時、その場で結果を得る、すなわちおかれた状況の中で必要を満たすことがディスクルテであるというのだ。結果はすぐに (madali) 出なければならない。時間のかかるディスクルテを「腐る (lob-ok)」という。このように、ディスクルテとは限られた資源の中で、その場その時に結果を求める、民俗的知識の実践的運用技術である。ここではそう理解しておきたい。

(註)

(1) 他の女性商人たちとドドン演技を収録したビデオを見る機会があった。笑いながらも彼女たちの感想は、「彼のディスクルテは時間がかかりすぎる (dugay)」というものだった。その演技とは、この例にもあるように、客との個人的関係をテコに交渉を進めるというものである。ドドンは彼女たちのいない場所で、私に「でもあれは確かにディスクルテである」と憤慨気味に耳打ちした。以下の引用と重ね合わせると、それは女性と男性のディスクルテの性差に由来するかもしれない。「小売りは、女性の手でなされる。漁村でも農村でも、男性は畑や海で働く生産者で、女性は余剰生産物売り、これから得た収入を仕切る。エスタンシア市では、あるレベルでは相互支持の義務と生存する権利 (a Right to Survive) が人々の間に認識されている。男性には他人への気前良さと配慮が要請されており、彼は伝統的に秩序付けられた対人関係の中での役割行動で評価される。これに対して、女性の行動は家族の経済的福利を優先してなされ、女性は家族内の家計を仕切る能力で評価される。ここでは女性が家族の内部を志向し、男性は他の家族ないし社会に対面した自己の家族の地位を確立するというように外部を志向する。市場では、男性の価値と対人行動が重要視されている卸商からは排除されるが、小売は女性が活躍する場面である。男性の場合だと威厳に関わるとみなされる、市場での儉約や値切りは、女性が

得手であるとみなされており、期待されてもいる。近隣・親類からの1～2ペソとか一合の米といったささやかな借りの願いを断ることが難しい。女性は家族の収入に注意しなければならない。こうして、女性は願い出た者を侮辱することなく、家族の資産に対する要求を断ることが許される。女性は、家族が必要とするといった理由で、貸付の利子や返済を要求できる。男性の場合だと、借り手が払えないのではないかといった配慮とか、デリケートな対人関係を考慮してしまいがちなのである。」(D.Szanton 1971:102-103)。

- (2) 親しい友人へのタガログ語の表現「パレ (pare、儀礼的兄弟)」は、当地のイロング語の場合「ミグス (migs)」あるいは「ミゴ (migo)」に相当する。
- (3) イビサンでは小売商をマノガタド (manugatado) という。マヌッグ (manug) とは「その行為を行う人」を意味する接頭語であり、アタド (atado) は「一盛り」、「一束」を意味する。このように山で売ることが小売りの特徴とされる。
- (4) 本論で検討した「客との掛け合い」と「販台上の魚の盛りつけ」から派生した関心を記しておきたい。「客との掛け合い」に見いだされた「彼らのやり方」は、いわば目的達成のために即興的に人を動員する術ともいいかえられるものだろう。この点は、「要求する」、「ただ酒を飲む」、「女をものにする」といった言い方（特に同情を引くもの言い）に敷衍して考えることはできないだろうか。また「魚の盛りつけの」における「彼らのやり方」とは、目的達成のために即興的にモノに施す術を意味する。それは、いわば在地的な技術適応ともいえるものであり、あり合わせ材料を用いた漁具（第6章第3節を参照）の組み立てや、ジプニ（米軍払い下げのジープを乗客や荷物を多く積めるようにトラックに改造したもの）の製造に敷衍できるのではないかと考えている。

## 第 2 場面 漁場で稼ぐ

- ハカップ河口域の小規模漁業 -

タカスから漁場に向かうには、養魚池の土手沿いに船着場まで向かわなければならない。船着場まで徒歩約 20 分。住居の一角をぬけると一面養魚池が広がる。今までの喧噪とは違って代わって、そこは静寂の世界である。無音が逆に耳の奥に圧力となって迫ってくる。時たま水面をはねる魚の水音が聞こえるばかりである。灼熱の太陽に焼かれてむき出しの土手を踏み、船着場に向かう。船着場といっても、養魚池の土手下に竹の筏を浮かべただけの場所であるが……。そこはこんもりとマングローブの老木が生い茂り、その葉が強烈な日差しを遮ってくれる。数隻のアウトリガーカヌーが木々の根元に結わえられている。そこから舟をこぎ出して 20 分もすれば、大小さまざまな竹製の漁具が展開する彼らの漁場「タラバハン」である（写真集 2 参照）。

## 第4章

### 汽水漁場の利用とディスカルテ

- タバ(エリ)漁師を中心にして -

本章では、主に「タラバハン(Talabahan)」に展開している漁具・漁法利用者のなかでもタバ漁に従事する漁師たちのディスカルテを、とくにタゴットッド出身の漁師が利用する区画を中心に考察を試みたい。田和(2002)もいうように、河川河口を利用する人々はとくに漁業集落を形成しているわけではない。行政上、この一帯はバランガイ・クジャンに属する。そこには、地元・クジャン出自の漁師からタゴットッド、ピナノボル(ともにバランガイ・ポブラシオンノルテ)、またロハス市のバランガイ・バリワガンなど、さまざまな地区の出身者が漁撈活動にたずさわっている。そこで私は、まず漁場を写した一枚の写真(図4-1)を手がかりに、彼らの生活保全の実践にせまりたいと考えた。

## 1 ハカップ川漁撈活動の概要

かつて矢野(1998)は、パナイ島沿岸のエコ・システムを干潟エコ・システム(北部沿岸地域)、珊瑚礁エコ・システム(イロイロ州東北部一帯の沿岸地域)、砂浜エコ・システム(南東部一帯)の3つに分類したが、本論でとりあげた調査対象地は、そのうちの干潟エコシステムの類型に属する。干潟エコシステムは、内湾群系のサブシステムであり、パナイ島一帯では熱帯的な気候上の制約を受けたマングローブ沼沢域を特徴としている。内湾群系の特徴として沿岸域から隔離されており、水が多少とも停滞的で、干満の差による影響と陸上の河川から流入する水や土砂に大きな影響をうけるために、底質は泥底が卓越的である。堆積した泥土は無数の汽水性生物の住み家となり、エビ・カニといった甲殻類や二枚貝などの底生生活形をもつ生物群集にめぐまれているほか、魚介類の産卵・稚魚肥育の格好の場となっている(矢野1992)。

三方を山でかこまれたイビス湾にそそぐハカップ川は、その源をイラヤ・イビス(Ilaya Ivisan)、ミヤナイ(Mianay)、マロクロク・ノルテ(MALOCLOC Norte)の山中に有し、町の中心部を横切って、イビス湾にそそいでいる。

現在の河口は、上流部から「タラバハン(Talabahan) タホガン(Tahogan) オボス(ubos)」と三つの漁区に分類され、認識されている<sup>(1)</sup>。「タラバハン」とはカキ養殖場、「タホガン」とはミドリガイ養殖場のことであり、「オボス」とは「おわり」を意味し、川は海(lawod)にそそぐ。上流から流れる河川は「タラバハン」で川幅をひろげ、ここから「オボス」にかけてさまざまな定置漁具の展開がみられる。

### (1) 漁法の分類

写真(図4-1)で視認できる漁具は、taba(エリ)、bakong(エリ)、saluran(樫木網)、timing(カゴ網)、paduyang(四ツ張り網)などの定置網漁具類であるが、ここにはより下流のミドリ貝養殖をのぞく河口漁業のほとんどを見いだすことができる。

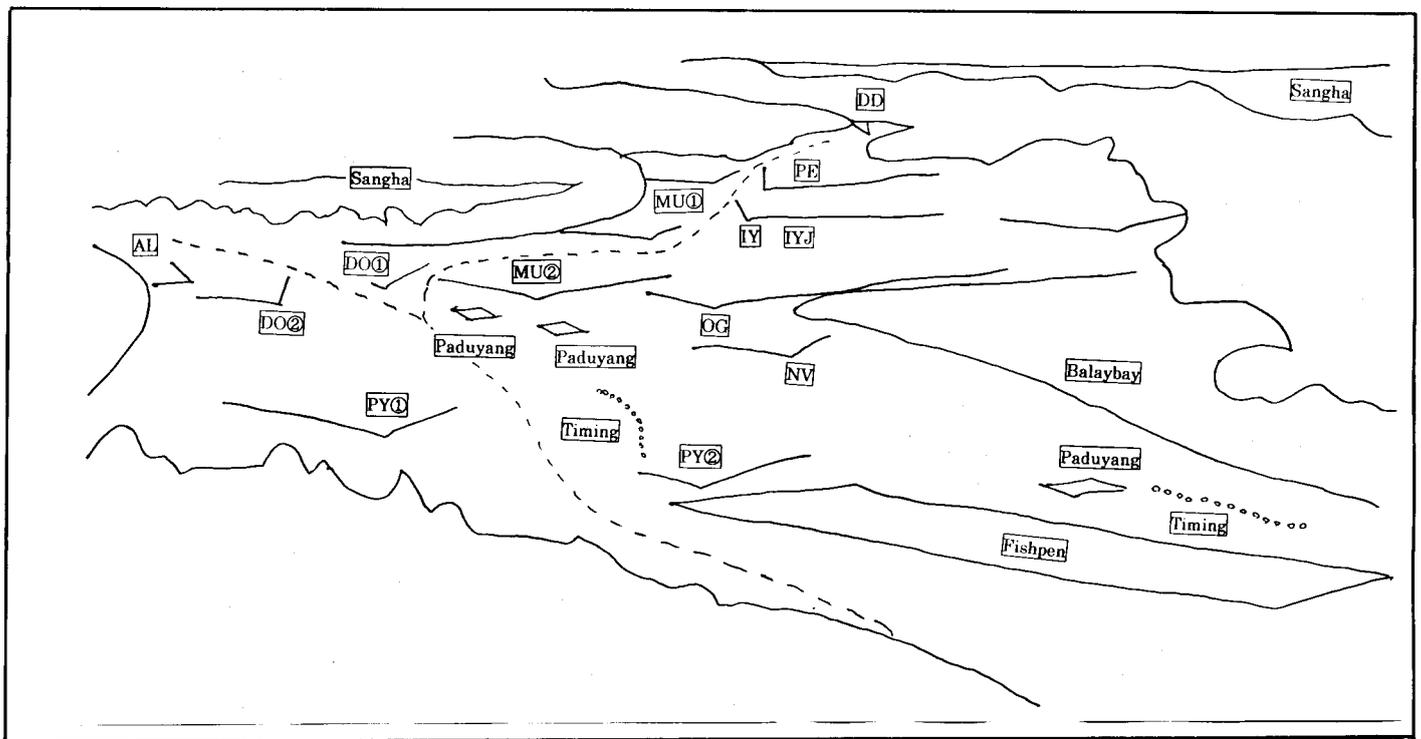
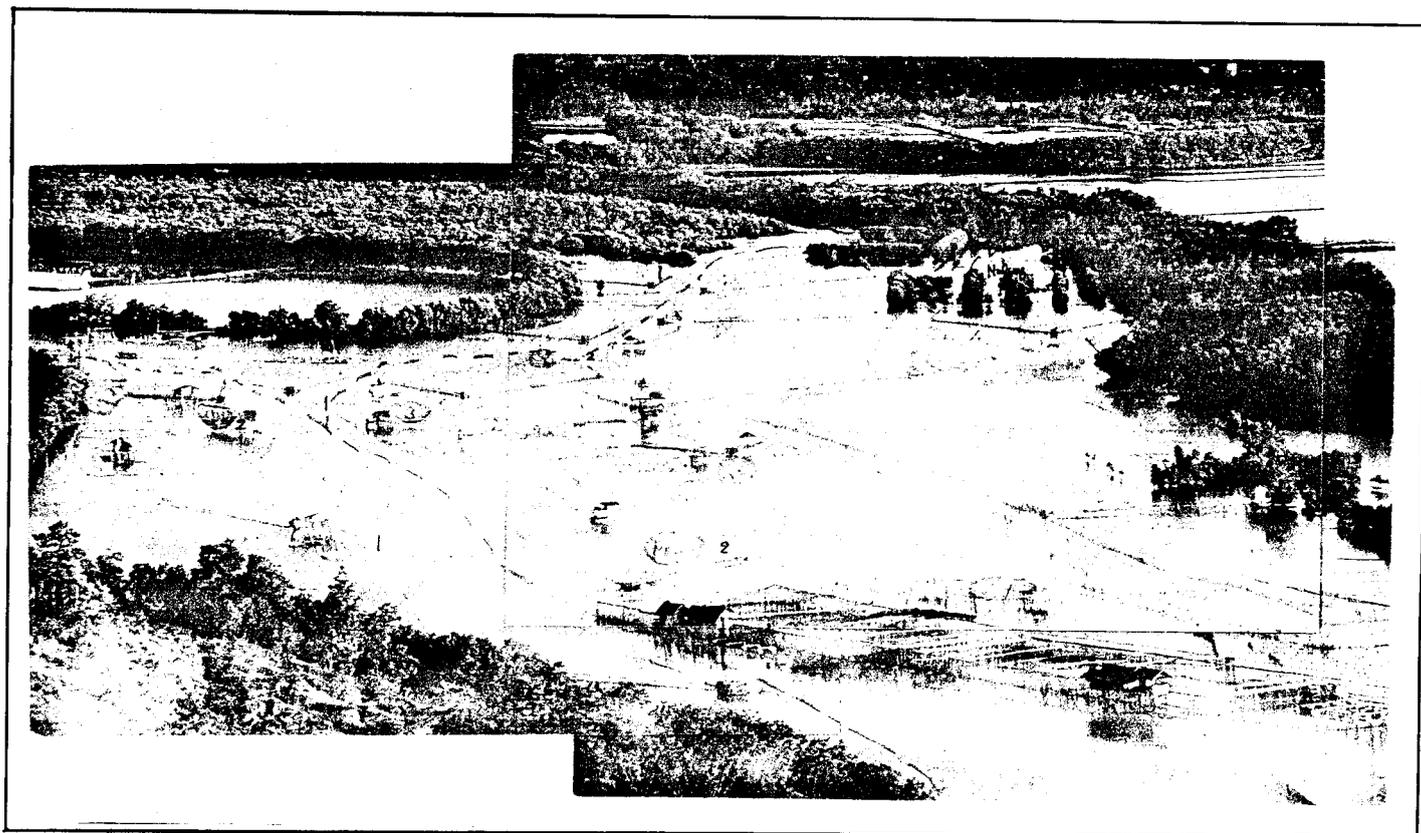


図 4-1 河口（タラバハン）の情景および図説

注) ①点線は漁船の通路を意味し、水深のある水路である。②記号については表 4-1 および表 4-5 を参照されたい。

表 4-1 河口漁業における漁法

| 記号 | 漁具漁法       |        | 操業<br>人数 | 船 | 干満 | 潮流 | 昼夜 | 灯 | 主要な漁獲物                    | 流通                  | 最低資本<br>(ペソ) | 許可証  | 漁労活動従事者<br>の主な居住地            |
|----|------------|--------|----------|---|----|----|----|---|---------------------------|---------------------|--------------|------|------------------------------|
|    | 現地名        | 和名     |          |   |    |    |    |   |                           |                     |              |      |                              |
| a  | taba       | エリ     | 1        | ○ |    | →  | ○○ | × | pasayan, tanga            | ←→Rxs               | 5000         | 70まで | Cudian                       |
| b  | bakong     | エリ     | 1        | ○ |    | →  | ○○ | × | pasayan, tanga            | ←→Rxs               | 5000+        | 70まで | Cudian                       |
| c  | saluran    | 樗木網    | 1        | ○ |    | →  | ○○ | △ | pasayan, tanga            | ←→Rxs               | 5000         | 70まで | Talon (Roxas)                |
| d  | balaybay   | 建干網    | 2-3      | ○ | ↑↓ |    | ○○ | × | alimang, kалантугас       | ←                   | 1000         | 70まで | Pob. Sur, Pob Norte          |
| e  | sorabaw    | 四ツ手網   | 2        | ○ | ↑↓ | ←→ | ○○ | ○ | pasayan (w), hipon        | ←→                  | 10000        | 70まで | Talon (Roxas)                |
| f  | paduyang   | 四ツ振り網  | 1        | ○ | ↑↓ |    | ○○ | ○ | pasayan, tanga, hipon     | ←→                  | 3000         | 70まで | Cudian                       |
| g  | tapangan   | ウケ     | 1        | ○ | ↑↓ |    | ○○ | × | alimango                  | ←→BYR               | 15×100㊦      | 無    | Pob. Sur                     |
| h  | binjol     | カニ小型敷網 | 1        | ○ | ↑  |    | ○○ | × | pasayan (w), hipon, risaw | ←                   | 5×100㊦       | 無    | Pob. Sur                     |
| i  | bobu       | ウケ     | 1        | ○ | ↑↓ | ←→ | ○○ | × | isda (tikilo, sagisian)   | ←→                  | 10×2-3㊦      | 無    | Pob. Sur                     |
| j  | timing     | カゴ網    | 1        | ○ |    | →← | ○○ | × | pasayan (w)               | ←                   | 5×100㊦       | 無    | Pob. Sur                     |
| k  | paduamon   | 柴袋     | 1        | ○ | ↓  |    | ○  | × | isda, alimango            | ←                   | —            | 無    | Talon, Baliagaan (Roxas)     |
| l  | patolov    | 刺網     | 1        | ○ | ↑↓ | ←→ | ○○ | × | risaw (網の目による)            | ←                   | 2000         | 無    | Pob. Norte, Cudian           |
| m  | panonet    | 延縄     | 1        | ○ | ↑  |    | ○○ | × | isda                      | ←                   | 100          | 無    | Cudian                       |
| n  | salawisw   | 跳白船魚   | 1        | ○ | ↓  | ←  | ○  | × | pasayan (w), risaw        | ←                   | 2000         | 無    | Talon                        |
| o  | hudhod     | サテ網    | 1        | △ | ↑↓ | ←→ | ○○ | × | pasayan                   | ←養魚池                | 500          | 無    | Pob. Norte                   |
| p  | taboy      | 曳網     | 2        | △ | ↑↓ |    | ○  | × | tanga                     | ←                   | 500          | 無    | Pob. Sur                     |
| q  | panohu     | 鉤引具    | 1        | × | ↓  |    | ○  | × | alimango                  | ←                   | —            | 無    | Cudian                       |
| r  | panohu (t) | —      | 1        | × | ↓  |    | ○  | × | tanga                     | ←                   | —            | 無    | Cudian                       |
| s  | paninpot   | エビ小型敷網 | 2-4      | × | ↓  |    | ○○ | × | pasayan (小)               | ←                   | 300          | 無    | Ondoy                        |
| t  | panlagap   | すなどり   | 1        | × | ↓  |    | ○○ | × | pasayan (w), ulang        | ←自家消費               | —            | 無    | Ondoy                        |
| u  | talabahan  | カキ養殖   | —        | ○ |    |    | —  | — | 10×20m (規模)               | ←BYR                | 2000         | 90まで | Cudian, Pob. Sur, Pob. Norte |
| v  | tahongan   | ミドリ貝養殖 | —        | ○ |    |    | —  | — | —                         | ←Crossing Talabahan | 10000        | 80まで | Talon (Roxas)                |
| w  | abahungan  | 貝養殖    | —        | ○ |    |    | —  | — | —                         | ←船着き場               | —            | 無    | Talon (Roxas)                |
| x  | fishpen    | 生簀養殖   | —        | ○ |    |    | —  | — | 10×20m (規模)               | —                   | 80000        | 有    | Roxas                        |
| y  | cage       | 生簀養殖   | —        | ○ |    |    | —  | — | 20×20m (規模)               | —                   | 10000        | 有    | Roxas                        |

表 4-1 は、そうした漁具と漁法をリストアップした一覧である。表 4-1 について若干補足しておきたい。

本論の中心をなす漁具は a. Taba(エリ網)であるが、採捕部の形態は異なるものの<sup>(2)</sup>、ここでは b. Bakong、c. Saluran を総称して、タバと呼んで論をすすめたい。u~y はそれぞれ養殖の形態をとっている。流通の項目における左向きの矢印は地元イビサン市場を意味し、記号の Rxs は口ハス市を、Byr は仲買人による直接買いつけを意味している。また資本は当該漁具または施設作成上必要とされる最低投下資本を意味している。

この漁法リストを作成している過程で、さまざまな発見があった。まず第一は、それぞれの漁法の間にも一種の格づけが存在していることである。タバ漁師であるオンゲルに作成中のリストを見せ、コメントをもらった時のことである。漁具リストはランダムに挙げており、タバ(Taba)とホッドホッド(hudhod)がとなりあって記載された。このリストを見たオンゲルはさも不快そうに顔を曇らせた。なぜなら、タバは「漁師の漁具(pan mangingisda)」であり、ホッドホッドは「貧しい者の漁具(pan pigado)」であるからだという。

表 4-1 でいえば、a~n が漁師の漁具であり、o~t が貧者の漁法であるという。この分類はおおむね操業時の舟(船外機なし)の有無による。また、patoloy(刺網)漁師であるトトン(ドドンの弟)によると、見込まれる漁獲の量から漁師の漁具・漁法も大きく2つに分類できるのだという。a~f と j に対して、h・i・k・l・m・n による漁獲高は貧しい(pigado)といわれる。漁獲量も多く、河口に多数存在しているタバは、その漁具だけで「家族を養える」といわれている。

## 2 定置漁具：タバ漁の実際(2002年7月13日)

「大潮はタバの時期(bat-og ang tiempo sang Tigalaba)」といわれるように、タバは干満の差によって生じる潮の流れのうち、下げ潮を利用してエビ類やハゼ類を夜間に採捕する漁法である。

写真のちょうど中央に見い出せるV字型の漁具が、オンゲルの操業しているタバ(OG)である。オンゲル(年齢36歳)は、調査地タゴットド・タカス出身である。第一イトコ(pakaisa)であるナトについてタバの操業方法を学び、1985年からこの場所でタバを操業している。オンゲルは未婚で同居者はいない。

彼は、タバ以外に小規模のタラバハンを経営しているが、陸上の生業には従事しない専業漁民である。以下、2002年7月13日(土)にオンゲルのタバ漁に同行した際の操業の様子を示した。

午後4:30、タカスを出発。オンゲルは首ひものついたつばつき帽をかぶり、かい(buksay)にバケツを通し、肩にかつぐ。バケツの中には、ビニール袋に入れた夕食のための残り飯

と、灯りのための灯油を入れたビン、タバコ、1 ガンタの大きめの空き缶などが入っている。タカスの細い裏道をしばらくゆくと、養魚池の土手に出る。

午後 4:50、オンゲルの船が係留されている船つき場に着く。岸には、船に乗り込むための竹のイカダが浮かべてある。川岸は泥質地になっており、イカダは船に乗り込む便をはかるためである。脇岸をすべり出す。川の両岸はマングローブ（ヤエヤマヒルギ・ヒルギダマシなど）にかこまれている。途中、全長 5m ほどの小規模な bakong がみられる。Likoan と呼ばれる分岐点を右手に進み、左にゆっくり蛇行している川をしばらく進むと、突如視界がひらけてくる。そこがタラバハンである。林立する竹製の定置漁具の間を水路ぞいに縫うように下ってゆく。

午後 5:25、オンゲルのタバに到着する。オンゲルのタバはブノアン（bunoan）と呼ばれる八角形の採捕部を要に、上流に向かって、扇状に腕をひろげた形をとっている。両そでの部分（写真向かって）は右 60m、左は 20 メートルで水路にかかる。網の高さは 260cm あまり。扇の要部の上には、高さ 160cm ほどの三角屋根の小屋が設置されている。この小屋は仮眠をとるためのものだ。

午後 6:30、夕食の準備にとりかかる。食材は捕漁部ブノアン内の小魚 gisaw や pasayan をタモ網ですくったものである。調理には持参の空かん（gantagan）を使うが、このカンひとつですべてをまかなう。カンで水をすくい、火にかけ、料理ができたならそれが器となる。

午後 7:35、オンゲルは上半身はだかのショートパンツ一枚のすがたで、ブノアンの中へ入る。水深は腰くらいである。ブノアン内にある返しを閉じ、ひもで結わえる。この返しの開閉が、彼の小さなディスクルテ（gagmay nga diskarte）であると笑う。日中、タバで作業する場合は、返しの部分を閉じておく。これはブノアンに一旦入ったエビが逃げ出さないようにするためである。

ブノアンの内側の網にタモ網（sibot）をこすりつけるようにして、エビ類をすくいあげる。すくいあげたものは、ブノアン内にかべた生け簀に移す。同様の作業を 20 回ほど繰り返したが、要した時間は約 20 分ほどである。それが経ると仮眠をとり、あとは翌朝の作業である。

午後 11:30 頃、ロイ（オンゲルの第一イトコ）が妻とともに小屋にやってくる。食事がまだ済んでいないというので、再び火をおこしてオンゲルの夕食の残りを持参した gisaw を火であぶって食事をとる。

真夜中 2:10 仮眠をとった後の作業再開。船を操り、ブノアン内部にかべておいた生け簀をとりあげ、内にはいった木の葉や、流れこんだビニールなどのゴミをとりさる。エビをゴミとを分別した後、イケス内のエビ類をバケツにうつす。本日の漁獲は 2 kg ほどであった。表 4-2 は、オンゲルのタバの平均の漁獲量を示したものである。

表 4-2 オンゲルのタバの漁獲量 (pasayan と Tanga)

|               | 通 常 |            |                       | 小潮(ayaay)時<br>(8日間/月) |                          |
|---------------|-----|------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|
|               | 漁 種 | 漁獲量        | 合計                    |                       |                          |
| 雨 期           | 最 高 | エビ類<br>ハゼ類 | 10 caltex<br>5 caltex | 5 ganta               | 1 ganta<br><br>(毎日)      |
|               | 最 低 | エビ類<br>ハゼ類 | 2 caltex<br>1 caltex  | 1 ganta               |                          |
| 乾 期<br>(3,4月) | 最 高 | エビ類<br>ハゼ類 | 6 caltex<br>3 caltex  | 3 ganta               | 5 caltex<br><br>(2~3日おき) |
|               | 最 低 | エビ類<br>ハゼ類 | 2 caltex<br>1 caltex  | 1 ganta               |                          |

注) 1 caltex=0.8kg、1ganta=3.2kg (=3 caltex)

真夜中 2:25、漁場をはなれて、船着場 (dongka-an) に到着。その足でイビサン市場へ向かう。

真夜中 3:10、バケツに入ったエビをもってオンゲルが市場にあらわれると、姪のネリサがかけよってくる。彼のバケツをうばいとり、さも当然のように竹製の台の上に中身を広げる。その後、夫ノノンも手伝ってエビを大きさによって分類する。エビは体長の大・小で、2つの山に仕分けられる。大型エビは 2 kg、小型エビは 1/2kg ほどである。オンゲルは大きいエビを 100 ペソ/kg、小さい方を 40 ペソ/ 1/2kg で販売することを希望したが、姪に値切られ、結局それぞれ 80 ペソ/kg、30 ペソ/ 1/2kg で売却する。当日の売り上げは、合計 230 ペソであった。エビを分別した残りの Tanga・Alimango は、彼の朝食にするという。

真夜中 3:45、市場門前の屋台でおかゆ (kardo) を食べ、家路につく。

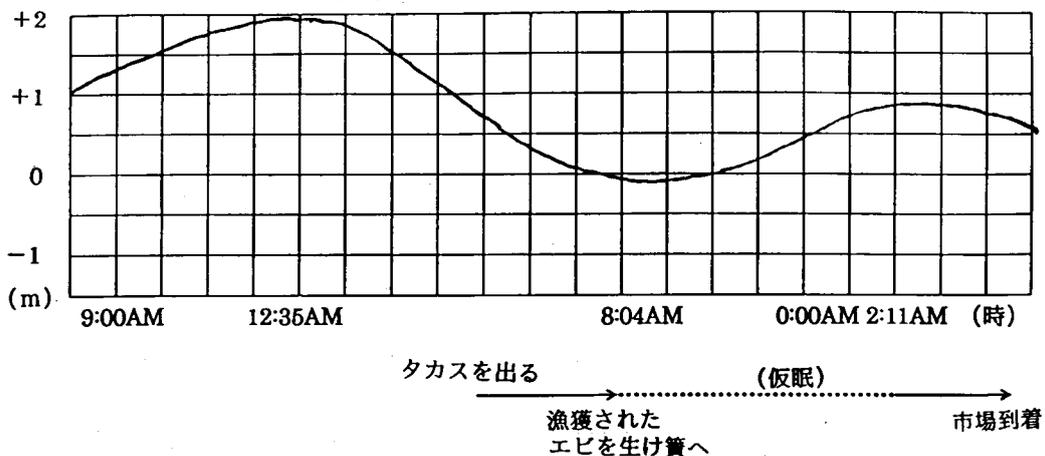


図 4-2 潮位の変化とタバの操業

以上が、彼のタバ操業のあらましである。この日は、高潮位が 12:35PM、2.0m、低潮位が 8:04PM、-0.2m、高潮位が 2:11AM、0.8m であった。オンゲルは、潮位の変化を見越しながら、下げ潮の途中で漁場に到着し、干潮時に漁獲をイケスにうつす。エビの鮮度が市場価格を決める重要な要素なので潮位と、市場開門時間をみはからい、生きたままエビをイケスからとり出し、市場へ向かったことがわかる。

オンゲルは、漁獲物のエビをイビサン市場だけでなく、しばしばロハス市の市場 (Lipunan) で販売する。それは、操業をおえた時点で、早朝 5:00 までにロハス市の市場に到着がみこめる場合で、かつ生きたエビの漁獲が 5 ~ 6 カルテックス以上の場合である。ロハス市場ではエビの買いつけ価格が 3 割方高めである。そのうち、生きエビは bonet (Bisogo の一本づり) の生き餌となる。こうした取引は、漁師との現金決済であり、彼には特定のスキ関係はないという。ロハスでは、生きたエビは 40 ~ 50 ペソ/ caltex が相場であり、エビの少ない aya-ay (aya-ay とは小潮の時期をいったものだが、干満の差による潮の流れを利用するタバにとっては、収穫の乏しいしのぎの時期となる) で 70 ペソ/ caltex と高騰する。イビサン市場では、生きエビでもせいぜい 25 ~ 30/ caltex であり、aya-ay でも 40 ペソ/ caltex にすぎない。ロハスに運んだエビのうち、死んだものは地元の小売商に 25 ~ 30 ペソ/ caltex で売却される。ただし、ロハス市場に bonet の生き餌用にエビを運ぶという商いは最近のものであり、3ヶ月前から第一イトコのロイとともに始めたのだという。

### 3 タバを中心とした漁場の開拓史

ここでは、とくに写真で切りとられたタラバハンの一区画 (図 4-1) における漁場利用の歴史的展開についてタバ漁を中心に追ってみたい。表 4-3 はタラバハンにおける漁場利用の歴史的展開を示したものである。

この区画にタバが登場するのは、1970 年ペリヤーノ (PY) がタバを設置してからである。当時、水深が干潮時でも 3 m 以上あったといわれ、水深のためにタバの設置は困難をきわめた。漁具設置には男たち数人がかわりタババン (tapaban : 無報酬による互助労働) によって設けられ、また操業においても、麻製の網のため海水につかると一層重量を増し、複数人で作業せざるをえなかった。漁撈活動の場面でもタババンがみられたわけである。翌年、1971 年にペリヤーノの対岸の、現在オンゲルのタバが設置されている部分に、バライバイ (balaybay) を設置したナトの話によると、パンハガップ (貝のすなどり) においては、竹の杭を川底に打ち込み、それを両足ではさんで、浮き上がらないように海中にも

ぐり、litob などの貝類を手づかみしていたものだという。また、川にワニ (buwaya) が出没すると噂されたのもこのころである。1970 年以前にも同じ川すじにタバは存在したが、写真のずっと上流部水深の浅い場所において操業されていた。

表 4-3 タラバハンにおける漁場利用の歴史的展開

| 漁具設置時期  | 設置者                      | 記号        | 漁具型        | 他の漁法、養殖   | 漁場環境の変化   |
|---------|--------------------------|-----------|------------|---|---|
| 1960' s |                          |           |            | Taba (上流部)<br>Pamonet<br>Hudhod<br>Panhagap が主    |   |
| 1970    | Perlyano①<br>Dodoy (←Ju) | PY①<br>DD | T→B<br>T→B | 1971<br>Balaybay (Nato)<br>1973<br>Balaybay (Jr.) | Beneto の養魚池開削<br>のためマングローブ林<br>の伐採<br>1972-3<br>Hulyo の養魚池の開削 |
| 1980    | Dolpin①                  | DO①       | T→B        |   |   |
| 1982    | Munang①                  | MU①       | T          |   |   |
| 1985    | Perlyano②<br>Ongel       | PY②<br>OG | S→T<br>S→T | 化繊網の導入  |   |
| 1987    | Munang②<br>Peryong       | MU②<br>PE | T<br>S→T   | 1986<br>Talabahan (Jr)                            | 1988<br>養魚池の拡張  |
| 1989    | Altemio                  | AL        | B          |   |   |
| 1995    | Iniyano                  | IY        | T          |   | 中州ができる<br>泥の堆積が顕著になる  |
| 1998    | Iniyano Jr               | IYJ       | T          | 1997<br>Timing (Nato)<br>1998<br>Paduyang         |   |
| 2001    | Dolpin②                  | DO②       | B          | 2000<br>Fishpen                                   |   |
| 2002    | Nolving                  | NV        | B          |   |   |

この「漁場の状況が変わった」のは、左岸にフリオ・レディスマの養魚池 (sangha) が開削された 1972 年以降であるという。この開削で、マングローブ林がつぶされ、その結果干満による海水の出入りが減ったために、土壌の堆積が進んだという。その結果、水深が浅くなり、タバなどの定置漁具の設置が容易になったともいわれる。当時バライバイ (balaybay) が 2 ケ続存在したが、漁具が今ほど立て込んでいなかったために、川岸を自由に移動して操業していた。ナトン (Naton) によれば、一晚の操業で小エビ (hipon) が 10 人乗りの船一艘分の漁獲があり、船をそのまま器のかわりとし、塩をもみ込んでダヨック (塩辛) をつくったものだという。

1985 年頃には、網地が化学繊維にとって代わられはじめた。それ以前、網はアバカ (麻) の繊維をよったものが利用されていた。しかし、それはすぐに破れ、耐久性がなかったと

いわれる。タバ漁は、まさに「タバ」を利用していた。タバとは、竹を格子状に編み込んだものであり、これがタバ漁の名称の由来でもある（田和 2002）。水深が浅くなったことに加え、網が化学繊維にかわったことなどがひきがねとなり、タバ漁は一人で操業が可能となった。

ハカップ川流域でタバが急激に増加したのは 1980 年代だといわれるが、この間に写真に見られるだけでも、ドルピン（**DO**）、ムナン（**MU**）、ペリヨン（**PE**）、アルテミオ（**AL**）らがタバを設置し、ペリヤノ（PY）とムナン（MU）は 2 ヶ続目のタバを設置した。1985 年には、タバはすでに設置する「余地がない（puno）」といわれるようになった。また、この時期以降漁法上の改良がすすみ、タバ漁の最中には海中に身体を沈める必要はなく、ブノアンにひかれた網を上下することで漁獲が可能なバコン（bakong）型が主流をなすようになった。表 4-2 の漁具型は T：タバタイプ、S：サルランタイプ、B：バコンタイプを示している。バコン型は大幅に労働を軽減することになった。1990 年代に、カキ養貝場であるタラバハン（talabahan）が大きく拡大していく。カキを加工し、オイスターソースを製造する韓国系企業の進出により、カキの価格が上昇したのも、拡大を促進したのもその要因だという。

1980 年代後半、ミドリ貝の養貝場タホガン（tahogan）が下流部（ubos）に拡大した。タホガンは大量の竹の杭を使用し、この杭が、上流から流れ込む泥を堆積させることの張本人であるといわれる。タラバハンの養貝のための竹杭（kaginking）とタラバハンを囲った柵も、同様の影響をもたらした。その結果、1995 年には泥の堆積が顕著になり、干潮時ともなれば、川に中州が現れるようになった。潮の流れを利用するのではなく、夜間の集魚灯を利用したパドゥヤン（padayang）が 1998 年以降出現したのは、こうした底泥の堆積の影響を反映しているといえるかもしれない。現在、干潮時の水深はくるぶしあたりであり、その様子を写した写真をみた漁師たちは、「それは水田か」と顔をしかめる。

そして 2000 年、バングロス（bangros）を中養殖するフィッシュペン（fishpen）が、この区画に設けられた。これは高額の資本投下を必要とするものである。所有者は、隣市口ハスの住人であり、一般漁民たちとの面識はない。フィッシュペンは泥の堆積を促進し、またカキ（talaba）の稚貝が被害を受けるといわれ、多数の抗議が町役場によせられている。

以上たかだか 30 年ほどの歴史を概観したにすぎないが、漁場はきわめて短期間にその様相をかえてきたことがわかる。

## 4 漁場の利用秩序とディスカルテ

### （1）漁法の競合関係とパウナウナ

漁場は「嫉妬の場 (mahisa-an) である」といったのは、あるタバ漁師の妻である。彼女を訪ねたのは、ちょうど2003年9月の乾期 (tigadlaw) の折であった。丁度それは乾期の到来とともに漁獲 (エビ) の減る季節である。当時、タバの網が鋭で破られるという出来事が頻発していた。

オングルの第一イトコであるロイ (前出) のタバは、レディスマの養魚池を挟んだ反対側のイビサン川沿いにある。そこは timing 漁と taba 漁の漁場である。そのタバは親類縁者 (pamilya) によって占められている。しかし一方、「タラバハン」は様々な居住地の者で占められている。それゆえ、漁獲に対する妬み (hisa) も大きいという。そのためか、漁獲物の盗みや、網を破ることさらには網を盗みとることなどが頻繁に起こるといふ。ただ、盗みの現場を目撃しても、それが親類に被害が及ぶ場合以外は、特に報告することもない。仕返しが怖いからである。

次に各漁法間の漁獲をめぐる競合状況について見てみたい。表4-4は、各漁法間の影響関係を記した相関図である。表の○印は漁獲の取り合いを、△は漁獲に影響があるものを示している。縦軸がそれぞれの漁法であり、横軸がその漁法に競合・影響を与える漁法である。

表 4-4 漁法間の漁獲をめぐる競合・影響関係

|           |   | a | b | c | d | e | f | g | h | I | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | v | w |   |
|-----------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Taba      | a | ○ | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ | △ | △ |
| Bakong    | b | ○ | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ | △ |   |
| Saluran   | c | ○ | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ | △ |   |
| Balaybay  | d |   |   |   |   | △ |   |   | △ |   |   |   | △ |   |   | △ | △ |   |   |   |   |   |   | △ | △ |
| Soranbaw  | e | △ | △ | △ |   | ○ | △ |   |   |   | △ | △ | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ | △ | △ |
| Paduyang  | f |   |   |   |   | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Tapangan  | g |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Bintol    | h |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Bobo      | i |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Timing    | j |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Padugmon  | k |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Patoloy   | l |   |   |   | △ | △ |   |   |   |   | △ |   | ○ | △ |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   | △ |
| Pamonet   | m |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Saliwsiw  | n |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Hudhod    | o |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   | △ | △ | △ |
| Taboy     | p |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   | △ |   | △ |
| Pamohu    | q |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Pamohu(t) | r |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |
| Paninpot  | s |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |
| Panhagap  | t |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |
| Talabahan | u |   |   |   |   | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | △ | △ |   |   |   |   |   |   |
| Fishpen   | v |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| Pamboat   | w |   |   |   | △ | △ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

たとえば、a の taba をみてみよう。taba が競合するのは a. taba、b. bakong、c. saluran であり、それは同一漁種を同じ川筋でとりあいるためである。また、taba の漁獲に影響をおよぼすものとして patoloy があがっているが、これは patoloy 漁師がしばしば taba 採捕時に開口部を網でふさぐことがあるからである。また、U・V は前述したように、土壌の堆積をうながすからである。つぎに、patoloy をみてみよう。patoloy が競合するのは同じ patoloy であるが、e. sulambaw は設置した網をやぶることがある。また J. timing は水没した timing に網がからみ、網をやぶってしまうことがあるからである。

漁獲の取り合いをめぐる葛藤を仲裁するのが河川の利用のパウナウナ原則である。パウナウナによる漁場の利用秩序はリスク軽減の制度のひとつと見なすことができる。第2章の市場場面でもふれたように、パウナウナとは「早い者優先」の原則である。漁場に即していえば、より早く漁場に網をおろした者がその場を優先的に利用できる権利(patakalan)を有する。patoloy 漁師であるトトンよれば、遅れて自分が設置できなかった場合でも、「残念がっても、うらやむ(mahisa)ことなく、他の場所に移動する」という。秋道(1998)はこの「早い者優先の原則」にふれて、そこに貧しい漁民の生活を保障する漁場秩序の機能を見いだしている。生活上必要に迫られた者は、他の者より、より早く漁場に到着して網をおろせばよい、その場は優先的に利用できるからである。これは patoloy をはじめとした可動式の漁具にあてはまるだろう。

定置漁具の設置の場合もパウナウナ原則が適用されるが、定置式の漁具に関してはまた違った様相がみてとれる。そこで次にタバの設置についてふれることにしよう。

## (2) タバの設置とディスカルテ

タバを設置する理想的な漁場は、干潮時であっても水の流れのある水路沿いである。前出オングルのタバは片袖を水路に開いている点では理想的な立地である。タバのパウナウナは、まず適当な場所に杭(osokan)を打つことに始まる。町役場で許可証をもらい、その場所を確保することになる(しかし、タバの許可制は70年代に消滅している)。自らタバを設置する場合には、下流のタバとの間を100メートル空けなければならない。それは下流のタバの漁獲への配慮であり、役場(a fishing code)でもそのように取り決められている。その間隔は、ナトによれば、70年代初頭には500メートルと取り決められていたというが、河川利用事情の実態に合わせ近年間隔がますます狭まってきているわけだ。行政の取り決めとは別に、上流にタバを設置する場合は、下流のタバ所有者に許可を得ることが良い礼儀(maayo nga batasan)となっている。ここにタバ設置のディスカルテが発生

する余地がある(ただし、既存のタバの下流に設置する場合はその限りではない。しかし、近すぎれば当然漁獲は減ることを覚悟しなければならない)。

ここでは 1996 年にタバを新設したイニヤーノとオンゲルの軋轢の事例をとりあげて検討しておきたい。このあらまは以下の通りである。オンゲルとイニヤーノはクンパレ関係にあった。それはイニヤーノが洗礼時、オンゲルに自分の息子のマニノイ(儀礼親)になってくれるように願い出たからである。親しく付き合ううちに、イニヤーノはオンゲルの漁獲にも興味をもつようになった。そこで彼は、オンゲルのタバの上流にタラバハンを開くことにし、隣接するタラバハン所有者であるオンゲルの兄に設置の許可を求めた(当時、バウバウのタラバハンはオンゲルのタバ内にあった。この点については後述する)。タラバハン設置の際にはオンゲルも杭うちなどの手助けしたという。二人の関係が悪化したのは、それから数週間もしないであった、発端はイニヤーノがタラバハンの柵を利用してタバを建てたことに始まる。その際、オンゲルには事前に何の話もなかった。つづいて、自分のタバに隣り合う形で息子のタバを設置した。このタバの設置は、仕事もなく、結婚したばかりの息子らの生活のためには仕方がないことだとオンゲルはいう。問題はイニヤーノであるというのだ。オンゲルは地方行政の末端の長であるバランガイ・キャプテンに相談を持ちかけたが、100メートルの間隔があれば問題ないという返事であった(オンゲルとイニヤーノのタバの間隔は実際には100メートルもない)。しばらく経って、イニヤーノは息子のタバをつなぎあわせるようにしてタバを拡張した。その結果、オンゲルの漁獲は以前に比べて4分の1減少した。そもそも彼の網は古く、傷んでいたことにも一因があるわけだが、オンゲルは立腹し、「キャンドルを返した」という。これはクンパレ関係を破棄したという意味である。

このことの顛末で興味深いのは、タバの設置過程でディスカルテが使われている点である。オンゲルの兄ボトイによれば、「オンゲルはイニヤーノにディスカルテを使われた」のであり、「クンパレであれば、オンゲルがいやとは言わないだろうという読みがあったはずだ。しかし、許可無しでタバを設置したのはだました(tonto)のと一緒だ。イニヤーノのディスカルテはやりすぎ(sobra)であった」という。ただ、川岸に設置したために、漁獲量の影響は少なかったとはいえ、イニヤーノの息子に対しては生活の必要という理由から、オンゲルが寛大に処置している点は興味深い。

この事例の場合、最終的には二人の関係が破綻してしまうのだが、「クンパレ関係にあるからいやとはいまい」という期待、すなわち個人的な関係をテコに定置漁具を設置してゆく論理は、現在の漁場環境の形成を考えるうえで無視しえない要因であり、こうした論理が結局のところ当初、行政上決められた500メートルの間隔をなし崩し的に縮めていったと推察できる。

### (3) パウナウナからパイヤイヤへ

漁場はどこであっても (bisan diin lang) パウナウナが原則であるが、タバの両袖垣にかこまれた空間は、タバ漁師のものと認識されている。その根拠のひとつは町役場発行の許可証であるが、それは 1970 年代までで途絶えている。また、許可は漁具のみに与えられ、漁具を設置している土地には直接関係しないのが原則である。このためタバ両袖垣の空間は、他の漁場と同様に、taboy、bintol、panhagap など小規模漁撈 (pigado) のもってこいの良漁場であり、オープンな空間であった。しかし、1990 年代にタラバハンが普及すると、次第に両袖垣内部にタラバハンが開削されるようになる。この空間は、タバ漁師には占有意識があるため、内部は身内の中で分割されるようになる。オンゲルのタバの場合、パウバウ (オンゲルの長兄)、ポトイ (オンゲルの次兄) らでその空間を利用しているが、彼らは特にオンゲルに許可を取ったわけではない。兄弟間のコンシデラシヨ (konsiderasyon: 思いやり、配慮) であるという。当初タバの両袖垣の空間にタラバハンを開くのは嫌われた。事実、当初オンゲルが自らタラバハンを開くにあたって袖の外側を利用したのだった。これは土壌の堆積を懸念したためでなく、dinga (夜光虫?) がタラバハン内のカギンキンや柵に当たり、発光して小エビの漁獲の妨げになるのを懸念したためである。川岸に開かれたタラバハンは、タバ両袖垣内の空間にも広がっていった。この過程で小規模漁撈は閉め出しを食らうことになった。ここには早い者勝ちの原理であるパウナウナから、「彼のものは彼のもの」というパイヤイヤ (paiyaiya) の原理への変化を見てとることができる。

## 5 生業複合とディスカルテ

表 4-5 はタバ漁師のタバ以外の漁法や他生業との複合状況を示したものである。

ここに挙げたすべてのタバ漁師がタラバハンを経営しているが、その参入の容易さ<sup>(3)</sup>とともに、小潮 (hayaa) に対処する彼らのディスカルテのひとつであるからといわれる。月に 2 回、前後 3 日間の小潮の期間はタバの漁獲減少に伴う収入減が生じる。タラバハンにはそれを補う意味がある。タラバハンが川の貯金箱といわれる所以である。

この地には「doble-doble, sapihak-sapihak kita」という表現があるが、doble-doble とは、仕事を複数かけもちすることをいい、sapihak-sapihak とは、機会があれば、あちこちどこへでも出かけることをいう。それは「ひとつの仕事だけを信頼 (magsalig) してはいけない」という戒めを表現したのものである。かつてベロロ (1994) は、汽水定置網をその受動的活動形態から運 (suwerte) に左右される漁業、そしてトロール船漁業を船頭の能動的活動にもとづくディスカルテ (diskarte) の漁業という二つの類型を示した。しかし生活保全の観点からいえば、汽水定置網漁師にとっては、いかに他の漁法、生業を組み合わせるかに彼らのディスカルテが発揮されているといえる

だろう。まして漁場環境の悪化にともない生業の組み合わせの際に発揮されるディスカルテはタバ漁師たちの死活問題であるともいえるだろう。

表 4-5 タバ漁師の生業複合状況

| 記号  | 氏名(年齢)           | オンゲルとの関係   | 他生業複合(下線は陸の生業)  | 妻の仕事       | 居住地                |
|-----|------------------|------------|---|------------|--------------------|
| OG  | Ongel (35)       | ego        | taba×1+ <u>talabahan</u> +魚商  | なし         | Pob..Norte         |
| MU  | Munang (45+)     | 知人(kilala) | taba×3+ <u>talabahan</u>  | 死亡、sukiに販売 | Cudian             |
| PE  | Peryong (48)     | クンバレ       | taba×3+ <u>talabahan</u> (+arong)+ <u>大工</u>                                    | 死亡         | Pob.Norte          |
| DO  | Dolpin (50+)     | 知人         | bakong×2+patoloy+ <u>taboy</u> + <u>tapangan</u> + <u>talabahan</u> + <u>大工</u> | 同行         | Pob.Sur            |
| -   | Ju (35)          | 知人         | 稲作(借地)+ <u>talabahan</u>  | 同行、魚商人     | Cudian             |
| IY  | Iniyano (50)     | クンバレ       | taba×2+ <u>talabahan</u> + <u>大工</u>  | 同行、魚商人     | Cudian             |
| IYJ | Iniyano Jr (28)  | 知人         | taba×2+ <u>timing</u> + <u>talabahan</u>  | 同行、魚商人     | Cudian             |
| AL  | Altemio (52)     | n.d.       | taba×1+ <u>talabahan</u>  | ピヤヘドール     | Cudian             |
| -   | Jr (50))         | 知人         | 稲作(借地)+balaybay+ <u>talabahan</u> + <u>タンコン畑</u>                                | 同行、魚商人     | Pob.Norte          |
| DD  | Dodoy (Juの子)(32) | 知人         | taba×2+ <u>talabahan</u> + <u>timing</u>  | n.d.       | Cudian             |
| NV  | Nolving (40)     | 知人         | bakong×1+ <u>talabahan</u> + <u>大工</u>  | 同行、魚商人     | Pob.Norte          |
| PY  | Peryano (52)     | 義父         | 稲作(自作)+bakong×1+ <u>talabahan</u> + <u>養魚池</u>                                  | 同行、魚商人     | Bali jagan (Roxas) |

## 6 まとめ

「川は何人にも開かれている」とは彼らの言である。おそらくこの言葉は、言外に「開かれているべきだ」とする意味も含んでいるのだろうが、パウナウナという制度はまさにここから出立下したものと考えられる。こうして汽水漁場には、専門の漁師からその日のおかず取りといった、すなどり(panhagap)を行う人々まで、実に多種多様な漁撈活動が展開しているのだ。

本章では、一枚の写真をもとに、河川のミクロな歴史とそこで活動する人々の実践の有り様を検討してきた。今回調査の対象とした“タラバハン”は、養魚池の開墾の過程<sup>(4)</sup>で漁場となりえた。漁場の利用はパウナウナが原則であったが、タバなど定置漁具の過剰な設置とカキ養殖タラバハンの導入により、囲い込みが生じ、漁場の環境が激変してきた。その背景には、漁具設置におけるディスカルテ、また身内の間のコンオンシデラションという生活保全の営みがあり、皮肉にも漁場環境の悪化(土壌堆積、漁獲の減少、貧困の共有化現象)をもたらしている状況を本章では明らかにした。

(註)

- (1) これらの空間認識は定置漁具を扱う漁民のものだが、次章でふれる可動漁具のサデ網漁師のそれは、川すじ、すなわち操業ルートでなされている。
- (2) 漁具の構造・立地の類似性と、捕漁部の交換により、容易に相互転換する点を鑑み、タバを Tabá、Salulan、Bakog を総称するものとして扱う。
- (3) 前出ナトはこの区画のなかでタラバハンを開いた先駆者である。1984年、タラバハン造成に乗り出したが、当初、町の許可証を得るためにタラバハンのための土地1平方メートルあたり1ペソ支払う取り決めであった。300×400mを開くにあたり12000ペソと高額なものであった。詳細な事情は不明であるが彼がその年支払った金額は300ペソであった。その後当局が土地の広さに関わりなく300ペソ課税することになったが、後発の者たちから不満が噴出した。その後3年して課税による参入規制はなくなったという。また、ナトがタラバハンを開くにあたり、稚貝をタロンの海岸やバリワガンの河口で採取しなければならなかった。休日を使い自分の子供たちを動員して採取にあたったという。しかしオンゲルがタラバハンを開始する頃には、稚貝はタバの竹杭に大量に附着するようになった。ここに、タラバハンを開く土地さえあれば容易に参入できるという条件が揃うことになった。
- (4) グローバル化のなかにおける養魚池の開墾過程についてはブルーレボリューションとその帰結という形で別稿にゆずり、改めて論じるつもりである。

## 第5章

### サデ網：暮らしの最終兵器

- 養魚池の展開とサデ網漁師 -

1980年代に、フィリピンのマングローブ汽水帯では大きな3つの変化が見られた。ひとつは、汽水養魚池の適地でもあるマングローブ沼地の開拓が進み、その面積が半減したこと（1968年448,000haであったものが、1976年には251,600haに減少した）、もうひとつは、汽水養殖池の開発がすすみ、1952年の88,700haから1980年には176,000haに約2倍の増加をみたこと、そして1980年代後半には伝統的なミルクフィッシュ（bangros）の養殖から、（主として日本向けの）輸出用のエビへの転換が起こったことである（鶴見1999：309-310）。本章でサデ網漁をとりあげる理由は以下のとおりである。

まず、これまでのマングローブ沼地およびそこで生産・捕獲されるエビ類の調査研究が、主として養殖池（sangha）に関して、あるいはクルマエビ科の大型エビの輸出先である日本との関連に主たる焦点があてられてきたことが指摘できよう。その陰で、国内および地域内での稚エビ・小エビの利用・流通については断片的な記述にとどまってきた。

また、イビサン湾を囲むように点在する村々を歩いてみると、家の軒下や養殖池のマングローブの木陰など、あちこちでサデ網を目にすることができる。同じ漁具はなにもフィリピン・パナイ島に限られるわけではなく、東南アジアの各地にも広く分布している。そればかりか、たとえばSan Miguel Bay研究（Smith, IR. & Mines, AN.1982：4）によれば、scissor (push) net (soakage) の所有漁具数は漁具別統計で第2位（634ヶ統・全漁具数の約18%）を占めているという。貧しい住民層にとってはサデ網漁が、漁撈活動への参入の容易さやエビの豊穡さとあいまって、生活を保全していくための重要な手段のひとつであるからである。サデ網の選択は彼らにとって生活保全上ディスカルテであるのだ。

## 1 漁獲対象と漁具の構造

ここではまず漁具としてのサデ網を構造の面からとらえてみる。サデ網漁法は、その主要な漁獲対象である稚エビおよび小エビの種類に応じて異なった漁具を有している。まず、イビサンにおけるサデ網漁の主要な漁獲対象魚類である稚エビ・小エビの分類を考察しておこう。

|     | 当地における分類                | 流通経路                                  |                                       |
|-----|-------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 魚 類 | isda (大型の魚)             | 鮮魚として地元市場へ                            |                                       |
|     | ibis (小型の魚)             | 鮮魚として地元市場へ                            |                                       |
|     | dayokdok (エビと魚の稚魚が含まれる) | 塩辛ペーストに加工し地元市場へ<br>あるいはtiming漁の餌として販売 |                                       |
| エビ類 | hipon                   | dumalaga 15mm以下<br>banlag 25mm以上      |                                       |
|     | pasayan                 |                                       | pote<br>da-ayda-ay<br>garas<br>suwahi |
|     |                         | 塩辛ペーストに加工して地元市場へ                      |                                       |
|     |                         | 生のまま地元市場へ                             |                                       |
|     |                         | 地元市場あるいはマニラへ出荷                        |                                       |
|     |                         | 地元市場へ                                 |                                       |
|     |                         | 地元市場へ                                 |                                       |
|     | 地元市場あるいは養魚地へ            |                                       |                                       |
|     | lokoi                   | 主にマニラに出荷                              |                                       |

図 5-1 エビの分類とその流通

### (1) 漁獲対象物としての稚エビ

イビサンではエビ類を次のように分類している (図 5-1 参照)。

(a) hipon は体長によって dumalaga と banlag とに分類される。hipon は小エビ塩辛ペースト (dayok) に加工される浮遊性の小エビ (Acetes 属と思われる) で、体長は 1~4cm。浅海域・入江・汽水域・河川域などの沿岸部に主に棲息する。とくに、産卵行動に関連して未成熟の稚エビが潮流や風によって海岸近くの砂浜 (baybay) に打ち寄せられる。そのため hipon の漁期は限定されている。

(b) pasayan はクルマエビ属 (Penaeus 属) の小エビの総称で、図 5-1 に示すように、イビサンでは 4 種に分類される。

クルマエビ属の親エビは沿岸の大陸棚に棲息する。産卵後半月ほどでプランクトンに成長し、その後成長・脱皮を繰り返して稚エビ (postlarva) に至り、潮流に乗って海岸の浅瀬、とくにマングローブ林の汽水域に接近してくる。体長 5mm 程の稚エビおよび小魚を総称して、当地では dayokdok と呼ぶ。稚エビは沖合に比べて安全性の高いマングローブ地帯でさらに小エビへと成長をとげる。これをサデ網漁師 (manughudhod) がまちかまえて採捕する。

ところで、hipon と pasayan の棲息域は多少異なっている。hipon はマングローブの繁る栄養に富んだ泥沼や砂浜海岸に浮遊・棲息しているのに対し、pasayan は冷水を好み、雨水の流入する河川ないしは感潮クリーク (suba) に遡上し、主に川底に棲息している。そのため、hipon と pasayan の採捕漁場および採捕の方法はおのずと異なっている。そして、雨期に採捕された pasayan は主として養魚池へ放流され、養殖される。放流時 2cm 程の小エビは 2 ヶ月後には体長 12cm に成長し収穫される。なお、pasayan は漁獲量に多少の季節的変動 (乾期のほうが収量減) がみられるが、hipon と異なって周年操業が可能である。

dayokdok は、前述したように稚エビと小魚の混在した総称で、従来は稚エビ小魚の塩辛

ペースト dayok (タガログ語では bagoong) に加工された。しかし、近年、川の河口部にカゴ網 (timing) が隣町 Sapián 地域から導入され、利用・加工の様相に変化がみられる。円筒形のカゴ網にはカニ捕りカゴ網 (timing pang kassag) とエビ捕りカゴ網 (timing pang pasayan) の 2 種類があり、それぞれワタリガニ (kassag) とホワイトエビ (pasayan nga pote) をとる。とくに、後者の仕掛け用の餌として dayokdok の需要が高まり、このため価格も高騰した。漁獲された kassag や pasayan (pote) は主にマニラに向けて出荷される。

## (2) サデ網漁具の構造

調査地イビサンにおけるサデ網は以下の 4 種類に大別される(写真 3 参照)。

Type A : ミルクフィッシュ稚魚採捕用のサデ網

Type B : 稚エビ・小エビ採捕用のサデ網

Type A は、砂浜 (baybay) 海岸地帯でよく見かけるミルクフィッシュの稚魚を採捕するための漁具である。これは稚エビや小エビを採捕するためのサデ網とは別種のものである。しかし、実際には同一名称で呼ばれている。

Type B には、

(a) Hudhod sang pasayan

(b) Hudhod sang hipon

(c) Hudhod sang dayokdok

の三種類があり、基本的な漁具の構造は類似しているが、捕獲対象物に応じて細部に工夫がほどこされている。構造上の差異は pasayan 用および hipon 用はサイズおよび網目が異なる。dayokdok 用と比較して、他の 2 種類は漁具のサイズおよび網目が大きい。とくに dayokdok 用は体長 5 mm 以下の稚エビや、稚魚を採捕するために、網目が細かい蚊帳を転用する場合もある。また潮流に対する抵抗力が大きくなるため、漁具自体のサイズも他の 2 種類の漁具よりも小ぶりのものとなっている。もうひとつの差異は、labay と呼ぶエビおこしのための縄が pasayan 用にはつけられているが、他の 2 種類には装備されていない点である。これは hipon などが水中あるいは水面を浮遊しているのに対し、pasayan が川底に棲息しているためで、小エビを水底から浮き上がらせる仕掛けとして labay が取りつけられているわけである。この装備上の工夫は、エビ・トロール網に装着されている、エビ起こしチェーン (ティックラ・チェーン) の原初形態である。

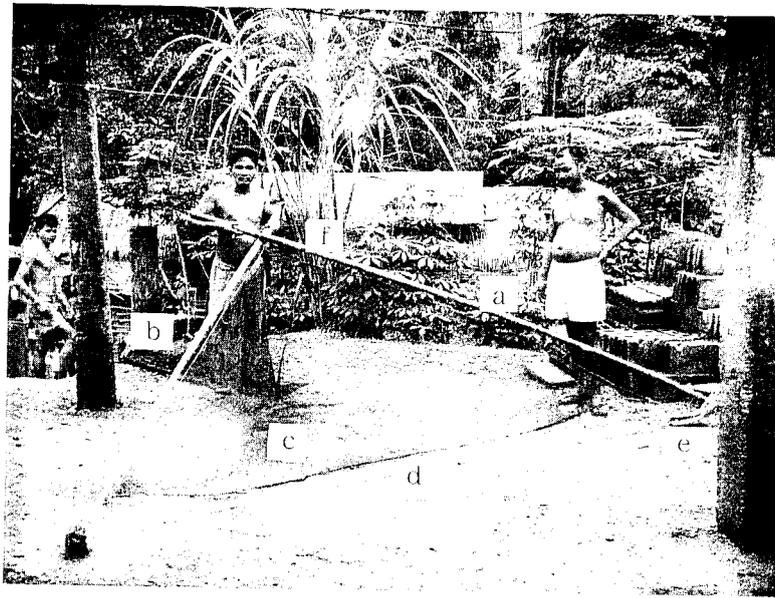


図 5-3-a

Ivisanのpasayan用サデ網 (hudhod sang pasayan)  
 a. kawayan (4 m), b. poyo (2.5m), c. pamanig, d. labay (3.5m),  
 e. sapatos (20cm×7 cm), f. tonong

サデ網は上述したように3種類あるが、図5-3-aに示したのは、新しい工夫を加えたサデ網で、イビスン町のT地区で観察したものである。

この新型の特徴は、同一の網で pasayan および dayokdok の双方の漁撈に利用できる工夫が捕魚部にほどこされている点である。基本的な網の構造自体を変えることなく、部分的なマイナー・チェンジを加えることによって、技術的な工夫をこらすというこうした方法は、典型的にはたとえばジプニー (jeepney) にみられるように、資本力においても制約が大きい、一般民衆レベルの技術的適応のひつつのパターンといえることができるのではないだろうか。



網の末端部 (poyo) に新しい工夫を加えたサデ網  
 採捕末端部分が網目の大きさの異なる2重の袋になっており、dayokdokと  
 pasayanの両方に使用できる

図 5-3-b

ちなみに、サデ網の製作費用は1998年現在で網地とロープの購入費用が約300ペソ(約

750 円)である。sapatps の材料である piapi 材はマングローブ林からと、竹棹(kawayan)は裏山などから現物調達される。San Miguel Bay の調査(Smith, IR.& Mines, AN.1982: 61)でも「調査されたすべての漁具の中で、サデ網の投下資本は一番低く、200 ペソをわずかに上まわる程度である」と報告されている。

hipon 漁の漁期は主に 5・6・7 月であるため、操業は季節限定的であり臨時的な形態であるといえよう。hipon 漁に従事する漁民は、イビサン川の東岸(Bgy-Talon)の Sitio-Nipa の住民が多い。この地区の人々は、季節的漁撈活動としてのサデ網漁以外に、カキ養殖場(talabahan)、筏四ツ手網(solambaw)、採貝漁(panghaggap)、エリ網(tabu)漁などを組み合わせた複合的な生業形態をとっている。

Hipon の漁場は、砂浜(baybay)やマングローブが繁るミドリガイ養殖場(tahunan)地帯である。hipon そのものは河川域(suba)を遡上することはほとんどない。漁撈活動は昼間で、海面を浮遊し、あるいはとびはねる hipon の群れを目で確認して採捕する。

### (3) dayokdok 用サデ網漁(hudhod sang dayokdok)の場合

dayokdok の豊漁期は 5・6・7 月であるが、むしろ季節風(amihan)の時期(11 月・12 月)に周辺の多くの農漁民が dayokdok 漁に参入する。この時期は季節風が強いため、イビサンの主要な漁法である arong 漁(四ツ手網、Yano1994 参照)が操業不能となるためである。dayokdok の操業漁場は浅海域や河口域・河川域である。河川・河口域の場合、pasayan 漁が河川の中央部を利用するのに対して、dayokdok は川岸近くのマングローブ林が繁る一帯(higad)がより良い漁場となる。

### (4) pasayan 用サデ網漁(hudhod sang pasayan)の場合

pasayan のサデ網漁師は、イビサン町内の中心市街地 T 地区に多く居住している。pasayan の豊漁期は hipon や dayokdok と同じ時期(5 月~7 月)で、水温の低いところを好む習性があり、雨後に河川を遡上する傾向がある。hipon と違って、年間をとおしてサデ網漁の操業が可能である。この背景には pasayan 自体の経済的価値も当然関与している。

## 2 サデ網漁法とその労働過程、稚エビの流通

つぎに、労働過程の資料としてタゴットッド在住の ボイ(仮名、42 才)の出漁事例(1999 年 7 月 12 日)をとりあげてみよう(図 5-4 参照)。

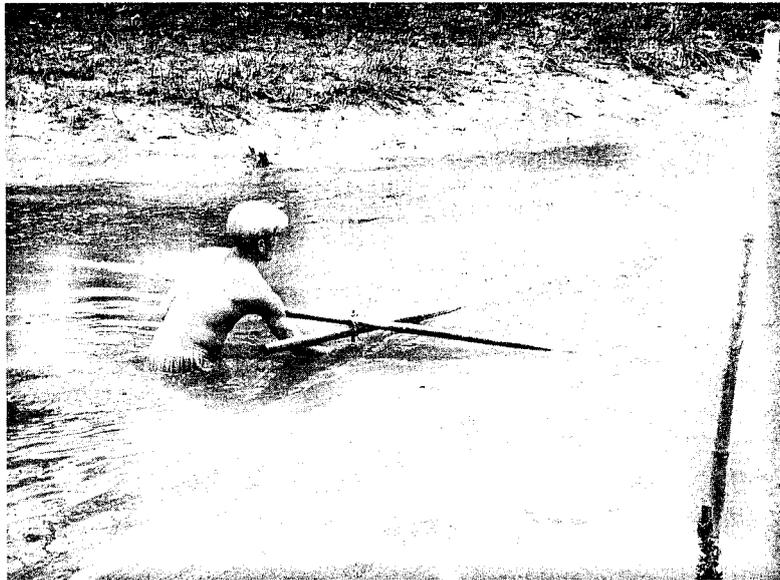


図 5-4 サデ網漁操業の様子

この日は小潮で低潮位 PM2:08、0.6m、高潮位 PM11:00、0.8m、低潮位 AM4:39、-0.1m (この潮位は Batan Bay における観測データのため、実際にはイビサン湾では約 1~2 時間程度遅れるものと予想される) (図 5-5)。

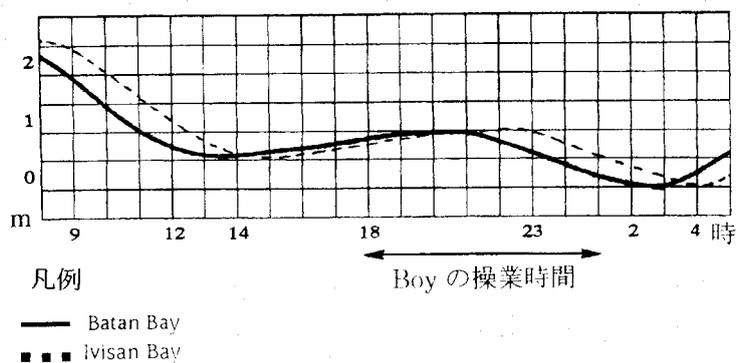


図 5-5 潮位の変化とサデ網の操業

ボイの出漁時間は PM6:00~AM1:00。この間、上げ潮を利用して漁撈活動に従事した。た

だし、小潮で潮差は 20cm 程度あるから、潮流速度は大変ゆっくりしたものであったと考えられる（潮差の少ない時期を aya-ai と呼ぶ）。サデ網（pasayan 用）の出漁時間は夜間を利用して行われる。満月よりも新月の時期の方が暗いので好ましく、大潮よりも潮汐の動きの少ない小潮時（aya-ay）の方が、一層 pasayan 漁にとっては好ましいという。同一漁場（suba）を利用するエリ網（taba）は、サデ網漁と競合する関係にあるが、下げ潮にのって流入する pasayan を捕獲するエリ網（taba）が、小潮時にはほとんど漁獲がないのも、サデ網漁にとっては大きな利点となる。



図 5-6 カキ殻から足を守る midyas

この日、ボイは夕方家を出発し、マングローブが繁る養殖池の堤をあるいてサデ網を置いてある出漁基地（donka-an）に至り、そこで身じたくを整える。ここ 10 年程、カキ養殖（talabahan）が盛んになったため、棄てられた貝殻でケガをする危険性が増加した。以後、かつてのように裸足で河川域に入ることはなく、靴下の上から厚地の布で作った袋（midyas sang hudhod）（図 5-6）をはいて、それをロープでしばる。

PM6:00。準備が整い川に入る。適当な水深のところを選ぶ必要があるが、pasayan の場合は、hipon や dayokdok の場合（ヘソ位の水位）よりも深めの、胸あたりの水深のところを選ぶ。持参した舟形のイケス（boloyan）を海底にさした竹棹に結びつける。このイケスは一定の場所に固定しておいて持ち運ぶことはない。サデ網を張り、棒の先を手でもって上げ潮に逆らって川下に向かって歩きはじめる。ここで大切な点は、砂泥中をうまく押し進めるように、先端にとりつけてある木製（piapi 材）のすべり板（sapatos：原義「靴」）を、しっかり川底に接地させて押し進むことである。この際、二つの sapatos 間（約 3.5m）をつないだ沈子がとりつけられている、アバカ製のロープ（labay）をいっぱい張った状態にする。Pasayan 用サデ網にのみにとりつけられている labay が、川底に棲息する pasayan

をおどろかせて起こす役割をする、というわけである。それを網(pamanig)ですくいとる。網に入った小エビが逃げださないように、袋網の末端の捕魚部(poyo)に時折押し込む必要がある。そのため、しばしば竹棹(kayawan)を持ち上げねばならない。そのタイミングは、操業時に左手で袋網の底部をもちあげた時、腕にぶつかる pasayan の感触でわかるという。ただし、ホワイト(pasayan nga pote)は跳躍力にすぐれているので捕獲するのが難しい。網の持ち上げ方にもコツがあり、kayawan の一方の末端を右腰にあて、そこを支点として、右棹をにぎった右手は上方へ持ちあげ、左棹にあてた左手は逆に押し下げてテコの原理で網を水面までもちあげる。網の末端部には、浮子(pataw)として空ボトルや発泡スチロール片がとりつけられ、操業中袋網が水中を浮くように工夫されている。また、網の末端部から 40cm のところは、採捕したエビが逆流また水圧で圧死しないように紐で結いてある。pasayan の場合、生きていないと価値が半減してしまうからである。河口部まで達すると、今度は逆に潮流と同じ方向に向かって折り返す。設置しておいたイケス(boloy-an)に達すると、ロープでしばってある袋網の末端を開いて採捕した pasayan をイケスにあける。この日、Boy は PM11:00 まで、河川域を河口部まで約 2km を 3 往復した。

Boy はこの日計 7 時間(上げ潮が流れはじめ、ほとんど停止するまでの時間)サデ網漁に従事したことになる。同日の漁獲量は総計 15caltex (1caltex=1l 0.8kg)であった。

### 3 稚エビの流通経路：養魚池(sangha)と地元市場(mercado)

ここでは、サデ網で漁獲されたエビのその後の流通経路について概説しておきたい。エビは、主に養殖池(sangha)への売却されるものと、地元のイビサン公設市場(mercado)で販売されるものとに分けられる。

#### (1) 養魚池(sangha)へ運ばれるエビ<sup>(1)</sup>

まず、先述のボイのエビの流路を追ってみよう。彼は特定の養魚池と契約(contrata)を結んでおり、雨期には捕獲された pasayan を優先的に養魚池に売却する。契約先の養魚池では、堤に近いところで網(bitinan, 1.5m×2m)を水底に敷いて、その上に pasayan を caltex に 1 杯ずつすくって網の上に落とす。しばらくすると、生きている元気な小エビは水底の網から泳ぎだしていく。この作業を最後まで繰り返し、あとに網に残った小エビを計量すると、養殖池に放たれた生きた小エビの量が算出される。この日は計 15caltex のうち 7caltex はすでに死んだエビで、8 caltex が養魚池に売却された。売却価格は 1caltex あたり 25 ペソ。死んだ小エビはボイが自宅へ持ち帰り、自家消費や豚の飼料に供された。

## (2) 地元市場 (mercado) へ運ばれるエビ<sup>(2)</sup>

イビサン市場は、先述した出漁基地 (donka-an) から 1 km、徒歩で約 20 分のところにあり、市街地の中心に位置する。市場開門の午前 4 時頃、操業の時間帯によって、エビは漁場から直接市場に運ばれるか、あるいはいったん帰宅した後、早朝に生け簀の稚エビをバケツに入れ替えて市場に運び込まれる。

サデ網漁師のポチョッグ (仮名、44 才) は、鮮魚商である妻メルナ (仮名、40 才) に pasayan の販売を託し、自ら市場の売場に立つことはない。甥のエドガー (仮名、30 才) とヘンデ (仮名、22 才) は、共にメルナに売却している。彼女は彼らのスキであるという。このように、エビは漁師の妻あるいはなじみの商人に売却される。スキは通常若干高めの価格で pasayan を買い上げてくれる。エドガーとヘンデンは他の者の場合よりも約 8 % (25 ペソの場合 30 ペソで) 高値で買い上げられている。彼らが他の商人に pasayan を売ることはない。

では、商人の側から pasayan 販売の利点を考えてみたい。市場には約 80 人の鮮魚小売商人がひしめき合っている。Pasayan に特化した小売り商人も 4 名ほどいるが、ほとんどすべての小売商がエビを扱うことになる。Pasayan は副次的なおかずであるがゆえに、他の魚類 (isda, ibis) と組み合わせられて販売されることが多い。Pasayan は多くが河川・河口域で捕獲されるため、他の外洋の漁獲 (isda) に比べて天候 (風) による影響が小さい。そのため、安定した供給が見込める。特に M.C.Szanton (1972 : 136-137) が生存維持的商人 (subsistence vendors) と類別した、自ら生産手段を持たない町場の零細な鮮魚商にとっては、比較的安定した仕入れができる魚類である。また、小潮 (Aya-ai) の前後 2、3 日は潮流が小さくなり、その潮差を利用する定置漁具には十分な pasayan の漁獲が見込めないため、可動式漁具であるサデ網の漁獲は貴重なものとして高値で取り引きされる。

小売商によって購入された pasayan は、他の魚 (isda) と共に販台 (tapangko, papag) に盛りつけられる。Pasayan の中でも特に人差し指大の suwahi は主に量り売りで、それ以下の suwahi、da-ayda-ay、garas などは山 (atado) 単位で販売される。1999 年 7 月 23 日 (金) 午前 8 時台、小売商人のニン (仮名、53 才) は suwahi 1/4kg、25 ペソ、1 山 10 ペソで販売していた。サデ網の他の漁獲である dayokdok や hipon はそのまま販売されだけでなく、塩辛ペースト (dayok) に加工して販売する。塩をまぶして揉み込むだけといった加工法はごく単純であるが、作り手によって味が微妙に変わると言われ、「あの人の作った dayok でなければ・・・」と評判を呼んで客を取り込み、固定客の獲得にもつながるといふ。ニンの dayok もそうした評判の一品である。なにより pasayan は鮮度の良さが売り物であり、客もそれを好む。しばらく時間がたちピクリともしなくなった pasayan は、客の手間を省くためにむき身にされて販売される。その際、廃棄されたエビの頭は自宅の家禽アヒル (itik) の餌として持ち帰るか、客へのサービスとして分け与えられる。

Pasayan は地元の消費者だけでなく、地元食堂 (carindaria) のオーナーや内陸部からやってきた魚の買い付け商人 (biyahedor) たちにも売却されてゆく。彼らは早朝、地元の足であるジブニーで乗り付け、竹籠に 5 山、10 山単位で pasayan を購入してゆく。出身地の市場では 10 ペソ/1 山、15 ペソ/2 山、20 ペソ/3 山、30 ペソ/5 山、50 ペソ/7 山の卸値で購入したものを、10 ペソ/1 山で販売し、その差額が彼らの儲けになる。Pasayan は商人と客の間を流れるばかりでなく、市場内では地元商人間で転売、貸し借りといったかたち (こうした商慣行を Panting-panting という) でも流通する。こうして pasayan (ここではエビ類のみに着目するが) は、前述したとおり、織物の縦糸・横糸のように人の手をタテ (商人と客) ヨコ (商人同士) に流れる。当然、利益は細分してゆくが、幾ばくかの利益をそれぞれの手に残してゆくことになる。養魚池で大きく育った pasayan やトロールで掻き取られた pasayan は、マニラへ、そしておそらく日本へ空輸される。pasayan はそれ以外の魚商人たちの手に抱えられて、島の内陸部へ、地元へと運ばれ、食卓に供されることになる。

#### 4 養魚業の展開とサデ網漁

本節では、1970 年代・80 年代・90 年代の各時期にサデ網漁に従事した 3 名のインフォーマントに登場してもらい、当時のそれぞれの生計戦略とそのなかに占めるサデ網漁の位置づけを中心にみてみたい。

##### (1) 1970 年代のサデ網漁師：エルニン (仮名、51 才) - 複合生業タイプの事例 -

エルニンは現在 15kahon (筆) の水田を所有し、米の 2 期作を行っている。「自分は農民 (mango-ngoma) だ」という。しかし、若い頃からの職業歴をふりかえてみると、小学校卒業後まもなく Manila へ出稼ぎに行き、建設業に従事した。18 才にマニラで知り合ったイロカノ出身の女性と結婚し、イビサンへ帰郷した。父親もサデ網漁師 (manughudhod) であったこともあり、pasayan を採捕するサデ網漁を第 1 子誕生まで 7 年間続けた。当時、彼のサデ網仲間は 7 人程であった。エルニン自身はヤシ酒 (tuba) 採り (manugpanagat)<sup>(3)</sup> や水田耕作に従事しながら、むしろ片手間でサデ網漁にも従事していた。すなわち、生計としては多就業形態をとりながら、主農従漁型の複合生業形態システムを営んでいたといえよう。サデ網漁に従事した理由を尋ねたところ、「水田やヤシ酒作りだけでは子供たちを学校へやることのできないので、家計を補足する手段としてサデ網漁もやっていた」という。Sitio においてのヤシ酒は、村の男たちにとってはなくてはならない必需品である。ヤシ林を借り受けてヤシ酒を醸造した。1970 年代当時の米の価格は 1 ガンタあたり 1.70 ペソ、tuba は 1 caltex あたり 10 センタボ (1 ペソ = 100 センタボス)、pasayan は 1 caltex

あたり4ペソであった。

サデ網漁を中止した後は、市場の商人や小型トロール漁にも従事したが、現在は水田耕作を中心に家計を営んでいる。

## (2) 1980年代のサデ網漁師：ドドン（仮名、41才）－専門タイプの事例－

ドドンは1959年、T地区に生まれた。父親はT地区の草分け的（ムラの創設者）存在で、現在この地区の住民の多くが彼の家族となんらかの関係を有している。

ドドンは小学校を卒業したあと一時期、母親が市場で鮮魚商を営んでいたため、その手伝いをしてきた。1978年から一年間程マニラのオジのもとに寄宿して建設労働者として出稼ぎ労働に従事した後、1979年に前妻と結婚した。1983年から90年頃まで、専門的にサデ網漁に従事し、かつその漁獲物を市場で小売りした。1983年当時すでに子供が3人おり、サデ網漁への参入理由としては「家族のために日々の米を買うため」であったという。

当時、T地区には同地区を二分する小道の両側に、主に居住地を軸に2つのグループが存在したといわれる。しかし、ほとんどの若い男たちがなんらかのかたちでサデ網漁に従事していた。サデ網漁師は当時が最も多かった。参入当初、ドドンのサデ網仲間（gropo）はAto、Kato、Sarding、Boy、Jr(p)、Jr、Bawbaw、Botyog、Filix（以上仮名）がいた。Filix以外はみな既婚者であった。P地区出身のJr以外はすべてT地区出身である（表5-1）。このうち現在も従事しているのは3名である。ただし、なんらかの契機が生じればいつでも再開できる可能性は潜在している。

表5-1 ドドンのサデ網漁仲間（gropo）<sup>(4)</sup>

| 名前     | 年齢（'85年時点） | 中止年  | 職業（'99年9月現在） | egoとの関係       |
|--------|------------|------|--------------|---------------|
| Dodong | 26         | 1990 | 鮮魚商人         | ego           |
| Ato    | 21         | 1999 | 鮮魚商人         | 隣人（現：kumpare） |
| Kato   | 24         | 1991 | 臨時建設作業員      | 弟             |
| Saden  | 28         | 1991 | 大工           | （現：儀礼的親族）     |
| Boy    | 28         | 継続中  | サデ網+カキ養殖     | （現：儀礼的親族）     |
| Jr(p)  | 24         | 継続中  | サデ網          | （現：儀礼的親族）     |
| Jr     | 33         | 1982 | マニラへ出稼ぎ      | —             |
| Bawbaw | 25         | 1990 | カキ養殖         | 第一イトコ         |
| Botyog | 29         | 継続中  | サデ網          | —             |
| Felex  | 23         | 1985 | マニラへ出稼ぎ      | （Jrの弟）        |

ドドンは参入するとすぐに養殖池の契約（contrata）を結び、pasayanを売却しはじめた。契約はバグロスの成長の遅い雨期<sup>(5)</sup>に限定されており、他の季節は地元市場へ持ち込む。雨期には全収量の約70%位がこの契約で処理された。契約分を養魚池に売却し、残りの収量は市場に直接もってゆき、自ら販売するか、仲買人に売却した。

ドドンが関係を持った養魚地 (sangha) は、Benil Lidisma 氏 (仮名、Iloilo 市在住) をはじめ、Boyet、Juniup、Folio Lidisma、Tagoi 氏 (以上仮名) の所有になるものだった。それら 5 つを合計すれば、約 1000caltex を請け負ったことになる。養魚池との契約は、その所有者 (owner) や管理者 (operator) と個人的なつながりを持つサデ網漁師が中心となり、彼が必要な人数のサデ網漁師を集めた。ドドンの場合、第一イトコのバウバウが基本的なユニットであった。サデ網漁はその漁法の性質上、共同で行われることはなく、操業の単位は基本的に個人である。各サデ網漁師は決まった時間までに竹かご (bandi) に入れてそれぞれの漁獲物を管理人のもとに持ち込み、報酬は計量後、現金で支払われた。そのため、収入は個人の収量によって異なった。

80 年代当時、養魚池に売却する方が市場で販売するより収入が良かったという。養魚池への販売は 1caltex あたり 5~10 ペソ、市場で小売りすると 1caltex あたり 15 ペソである。一見大差がなさそうに見えるが、市場での値は需給関係で決まるが、養魚池は定額の買いつけであったから、収量が多ければ多い程収入になった (表 5-2)。

表 5-2 pasayan の価格比較 (1985/1999)

|        |  |
|--------|--|
| 1985時点 | P 5~10/caltex<br>cf) 米価 P16/ganta (3.2kgに相当する) |
| 1999時点 | P 25/caltex<br>cf) 米価 P35~6/ganta (3.2kgに相当する) |

1990 年代ドドンがサデ網をやめた理由のひとつとしては、カキ養殖場 (talabahan) が増加し、サデ網の漁場もせばめられたことがある。カキ養殖場は 1981 年に初めてイビサン湾に導入され、その後 1985 年頃以降その面積が急増した。前述したように、カキ養殖場の投棄した貝がらによるケガの危険性が増大したことも一因としてあげられる。かつてのサデ網漁師たちは、聞き書きの際、しばしば大ケガをした足のキズあとを見せてくれた。環境条件の悪化に伴って pasayan 自体の漁獲量も減少したことや、肉体的に困難な労働条件や夜間の不規則な労働ゆえの問題なども、サデ網漁を放棄した要因となっている。

ドドンとサデ網の話をしていると、つぎからつぎへと関連した話題がとびだしてくる。現在、市場で時たまにしか小売に参加できず、stand-by member と自ら称している彼に「市場とサデ網漁とどちらが楽しいか」と尋ねると、「市場は市場の楽しみはあったが、サデ網は楽しかった」と答えた。サデ網は同年輩の男たちの漁撈活動であり、仲間 (gropo) でそれぞれ競い合いながら出漁する。また、満潮で川の水位が高い場合には、潮の引くのを待つ間、よくサデ網仲間とウイスキーを飲んだり魚を焼いて食べたものだと話してくれた。

話のなかで大変印象的だったのは、水揚げに関してである。タゴットッド地区のサデ網漁師たちは、漁獲物を陸路で市場わきの船着場 (pangpang) に直接サデ網持参で水揚げす

ることではないのだという。ドドンのおジの Ramon (仮名) は例外であるが、それは彼が盲目であるからだという。ドドンの場合、通例は養殖池の畔づたいに自宅へ一度漁獲物を持ち帰った後、市場へもって行く。「時に夜間、教会裏のクリーク (「町場」の意か) から直接、陸あがりすることもあった (明るくなって、直接船着場に陸あがりすることはなかった)」と彼はいう。サデ網持参で船着場 (pangpang) に揚ることは恥ずかしい (Nahuya) という。また、イピサンでは、年齢階層が 18~22 才の未婚男性を soltero と呼び慣わしているが、ドドン曰く、「サデ網は soltero が従事するのはいいのだが、(家族持ちのいい大人がサデ網漁をしていることはためられる)」と。

こうした言説の背景は意味深長である。ひとつはサデ網が貧しさの象徴であること、もうひとつはサデ網自体若年層の一時的な生業活動とみなされていて、一人前の男がやる漁撈活動としては認知されていないことを示すのだ。

1999 年 8 月、漁の不漁期で市場の「スタンバイ」(stand-by) である ドドンは入荷する魚類が乏しいために窮状にあえいでいた。「またサデ網漁でもやろうかな。しかし……」。そう言って言葉を呑んだ彼の想いは、サデ網漁のおかれている状況や社会的認知の厳しさを語ってあまりある。

### (3) 1990 年代のサデ網漁師：ヘンデン (仮名、22 才) - 家計補助型の事例 -

ヘンデンは 1995 年、ハイスクール卒業と同時にサデ網漁に参加した。理由としては、かつて市場で鮮魚商を営んでいた母が病気になり、治療費をかせいで家計を助けるために参入したという。そうした背景には、陸での雇用先がなかったこと、サデ網漁は手っとり早く毎日日銭が入ることが考えられる。たしかにサデ漁は、その日暮らしの生活をしている人々にとっては大きな魅力となっている。

それゆえか、イピサン町周辺地区からのサデ網漁への参入者が近年増大しつつきている。とくに海岸近くや養殖池周辺に位置する Bgy Cudian や、Bgy Agmalobo 等地区や、近年移住者が多く居住するようになったピナノボル地区からの参入者が多い。

次表は、あるインフォーマントが 1993 年と 1999 年とを比較して述べたことを対比して示したものである (表 5-3)。

表 5-3 pasayan の漁獲高と市場価格 (1993/1999)

| 年    | サデ網漁師の数 | 一人あたりの漁獲高<br>操業時間 4 時間 (18-22) | 市場価格                |
|------|---------|--------------------------------|---------------------|
| 1993 | 10人     | (+) 1 balde (=12kg)            | (-)                 |
| 1999 | 30人     | (-) 3 caltex (=2.4kg)          | 価格上昇<br>(30~40peso) |

注) (+)・(-) は相対的な高低を示す。

あきらかに収量は減少しているにもかかわらず、市場価格は上昇している。加えて、1980年代を通じてみられたミルクフィッシュ養殖からエビ養殖への動向は、1990年に入るとエビの病気の発生などにより、たとえば lokon (クルマエビ属) の養殖はロハス市一帯では衰微し、逆に伝統的なミルクフィッシュ養殖 (ただし一部 pasayan の混殖を含む) に回帰する傾向がみられる。そのため、ドドン時代 (80年代) に隆盛をきわめた養魚池との定額制の *contrata system* は衰退化の傾向にあり、むしろ収量 (供給) が減少した分だけ小エビ類はより高価格での取り引きされる市場へと向かう方向にある。

ヘンデンも通年にわたって pasayan を養魚地ではなく市場に卸している。「たかが 20caltex の契約 (*contrata*) なんて5人で2日で終わってしまうから」だという。ドドン時代にはひとつの養殖池で最大 300caltex の需要があり、11名の仲間で1日最高 100caltex を供給しても3~4日要した。契約関係にある養殖池をドドンの場合には5カ所以上もっていたのと比較すると、養魚池への pasayan 需要は明らかに低下している。市場価格の変動に対して安定的な価格維持機能をもつ契約関係の弱体化のヘンデンの不平不満は、どうやらそこにある様子だった。

## 5 まとめ (ドドン庭先のサデ網)

海と陸のはざまの舞台である汽水マングローブ地帯は、そこに棲む生物種の多様性と個体数の多さに特徴がある。その典型的な生物種が、マングローブ沼地を生育の場とする稚エビ・小エビ類である。このエビ類の豊饒さを基盤として、これに依拠して貧しい零細農漁民の生計が営まれている。典型例がサデ網漁師である。

サデ網漁の特徴は、村人がよく口にするように、「誰でも容易に参入できる」点に求められる。それは、経済的な側面としての投下資本の安価さにもとづく。海と陸のはざまに生きる生産手段としての船のもつ意味は大きいですが、サデ網漁は船を所有しなくても参入できるのだ。次に、参入に対する社会的な規制がほとんど存在しない、つまり漁具さえ所持すれば誰でもが操業できるという簡便さも、サデ網漁の特徴といえる。しかも、技術の習得にいたっては、身体的条件さえ満たしていれば数回の試行で容易かつ短時間で漁法をマスターできるのである。

こうした諸要因が、限界的な農漁民にとってサデ網漁の持続性の基礎をなしているといえる。しかしながら、そこには社会的評価や規範として「若年世代の漁撈活動である」という認識があり、従来は片手間の生業、つまり人生の一時期における経済的地位上昇のための生業活動あるいは家計補助手段としての生業として位置づけられてきた。

つぎに漁場環境に目を転じてみよう。汽水マングローブ沼地は、環境破壊に対する抵抗力が弱く、微妙なバランスの上に成立しているうえに、土壌自体が硫化物の堆積から形成

されているため、作物の栽培や農地への転換に不適とされている（鶴見 1999：288-289）。このため、こうした環境にすぐれて適応的な利用形態として、養殖池やカキ養殖場が導入・拡大し、従来コモンズとしての汽水域の囲い込み（enclosure）が一層進展した。そしてこれらの養殖産業は一握りの都市部の資本家層や地域の富裕階層に独占され、加えて労働吸収力も弱いという弱点をもっている。

こうした歴史的経緯のなかで、サデ網漁撈もその時々で状況に適応してきたといえよう。たとえば技術の面では、カキ養殖場の拡張に伴う危険性の増大に対しては、前述した足袋（midyas sang hudhod）の採用によって対応した。一方、就労形態としては、本来の若年時代に限定された就業から、多就労形態の一環としての複合生業システムに、そして 80 年代には、とくに養魚池との共生関係としての *contrata* 慣行による専門化を経て、90 年代の稚エビの漁獲量の減少化傾向と、エビ養殖から従来の伝統的なミルク・フィッシュ養殖への回帰とに対応してとはいえ、そこには限界漁民の主体的な生業の選択が働いていることはいうまでもない。

2003 年 9 月、ドンを再訪する機会を得たが、ドンの家屋には月賦で買ったといったが、冷蔵庫、真新しい家具が並んでいた。それは妻オタイの商売の成功によるものだが、まず真っ先に入手したというのがサデ網だったという。それは綺麗に折りたたまれて、家の軒先に吊してあった。いつ使うかわからないが、と笑っていたが、サデ網が暮らしの経済にとってなんたるかがわかる例ではないだろうか。

#### （註）

- （1）養魚池に送られる小エビは約 2 cm、2 ヶ月経って収穫時には 12 cm に成長する。一等級のエビは 1 kg 当たり 80 ペソで売買される（2003 年 9 月現在）。稚エビ（*premera*）には 4 cm 程しか成長しない *da-ayda-ay* や *balas-kugay* が混じることがあるが、養魚池の経営者はそれを好まない。
- （2）*pasayan* はサデ網漁に限らず、エリ網（*taba*）、筏四ツ手網（*solanbaw*）によっても市場に搬入される。
- （3）ヤシの樹液からつくられるヤシ酒は、時間の経過と共にアルコールの度数を増し、最後には酢となり、調味料として利用される。ビールやウィスキーに比べて安価（1 *gantán* = 30 ペソほど）であり、手軽に酔える。
- （4）表 5-1 はドンのサデ網仲間を示しているが、すべての契約にそれらすべての者が参加するわけではない。中心人物がその時々で仲間を選好することになる。また養魚池と誰が個人的関係を持つ（つまり中心人物になる）かによって、仲間の範囲自体が異なる可能性も否定できない。サデ網仲間（*gropo*）を境界明瞭な集団として理解するには留保が必要であろうと思われる。ここでは *gropo* に「一緒に物事をする人」の意味で「仲間」という訳をあてた。
- （5）6～12 月は 1～5 月に比較して気温が低く、ミルクフィッシュの餌となる藻の発生

が少ない。ミルクフィッシュの補完的収入源として、混殖用の pasayan の需要があるとされる。

## 第3場面 居住地を守る

夕方になるときまって住人たちが集まる場がある。雑貨屋サリサリの軒下の長いすである。あるものはそこで酒を酌み交わし、あるものはおしゃべりに興じている。子供たちもその周りでめいめいに遊びに興じている。この場所が私にとって重要なのは、そこはインタビューの場でもあるし、またその日に起こった出来事についての情報の集積地でもあるからだ。タカスには道を挟んで2軒のサリサリが向かい合っている。ひとつはドドンの妹二二の店であり、向かいに立つのはエルニンのサリサリである(写真集3を参照のこと)。

## 第6章

### 居住地を守る

小さな人々の土地をめぐるディスカルテ

この章では、多くの土地を持たない住人たちの、「立ちのき (ginpahal inon)」というデリカード状況に対するディスカルテを検討したい。「土地があるのは墓場だけ」(ボイ)、「荷車の上に家を建てろと言うのか」(カカ)、「川に住む」(エルニン)とは、立ちのきに対して語った住民の言葉である。ボイは「人は空中に住めない」のだから、だれにとっても自分の土地が必要になるというのだが、その言葉には、墓地でさえ使用料がかかるという皮肉がこめられている。カカの言葉は、自分の土地をもたず、右往左往している自分たちの姿にこっけい味を添えて語っている。エルニンの言葉は、他人の土地に住むことができなかったら、「だれの土地でもない」川の上にも小屋を建てるか、といった含意を帯びている。実際、幾人かはそういう選択をしている者もいるのだ。

本章の前半部では、住み着きの過程における居住者の土地所有者に対するディスカルテの検討をしたい。具体的には、カカの「オナルシー・コンパウンド」の形成過程を追い、住みつき過程における地主との関わり合いを、ディスカルテとしてのカロオイ(後述)の観点から考察する。また、それに対比する形で、エルニンらと地主の関係を聖週間の山車行列をとおして検討したい。さらに、後半部では、立ち退きに対処する具体的なディスカルテを検討するが、地主と小作人の関係にあるエルニンと、その周辺に位置するボトイを中心にとりあげ、両者の居住地を守るディスカルテを検討する。エルニンは小作人として、周辺的位置にあるボトイは植樹行為をとおして立ちのきに対抗する姿を検討することにした。

## 1 土地問題の頻発とその背景

大きな人々 (dako nga tawo) と小さな人々 (gagmay nga tawo)

同じイロンゴ社会を研究したホカーノ(1980)によれば、「土地は特にイロンゴにとって重要視される」という。土地が実質的な力の源泉と見なされているという意味だが、それは単に農地のみをさしたものではない。調査地において、「大きな人々 (dako nga tawo)」という言葉が聞かれることがある。当地においては、大規模に土地を所有するものであり、裕福であっても土地を持たないものはこの範疇には入らない<sup>(1)</sup>。

2001年6月の深夜、調査地で発砲事件があった。それは、自分の所有地にあった小学校に通ずる小道を地主が柵で塞いだことから始まった。小道わきの木が、勝手に切り出されたことに腹を立てた地主の行為によるものだが、通学路をふさがれたことに対する腹いせではないかとささやかれた。その夜、地主宅に投石があり、発砲はそれに対する威嚇射撃であった。警察沙汰となり、翌朝、犯人探しがはじまったが、住人の多くは投石をした者に同情的であった。

その際、耳にした表現が、「大きな人々 (dako nga tawo) は(私たち)小さな人々 (gagmay nga tawo) の気持ちかわからない」というものであった。

図 6-1 は、ドドンによる所有地の区分けである。彼によると、現在タゴットッドは主に 9 つの家族 (pamilya)<sup>2)</sup> が土地を所有しているという。タゴットッドの住民の何世帯かは、彼らから土地を購入し、宅地を所有しているが、地主の中でも、とくに 6 家族が、タゴットッドにおける土地所有のほとんどの所有者 (Tunay nga Tag-iya) であるという。均分相続を旨とする当地では、Tunay nga pamilya とは、父方、母方の姓を同じくするもの、すなわちキョウダイ関係を意味するが、この 6 家族の土地が、キョウダイ間で所有されている。しかし、ピラグラシアは代わりし、所有地が細分され、その多くの土地が売りに出された。アルゲリエス、ハマンドレとガンバンは、土地を新たに購入した家族である。

彼ら多くの土地持ちについては語られることは、彼らの職業である。その多くが、医者や弁護士、保険会社のマネージャーといった専門的職業をもつ人物であり、また、養魚池所有者であったり、海外出稼ぎ者である。

現在、住民の多くに立ちのきというリスクをもたらししている背景には、土地の資産価値の上昇が挙げられる。まずタゴットッドの立地である。町の中心機能を担う役場・教会、さらに市場 (プラザコンプレックス) まで、徒歩で 5~6 分という近距離にあり、役場の土地開発計画書では、商業開発重点区域に色分けされている。また 1997 年に、隣接するカピス州の州都であるロハス市とイビサン町を結ぶバイパス道路が舗装整備された。従来の約半分 (15km が 8km に短縮された) でロハス市へのアクセスが可能になったことは、ロハスーイロイロ間を結ぶ、長距離バスのルートこそなっていないものの、モルティカブやジプニーといった日常生活の足である乗合自動車の路線となって、通学や買い物の便を満たしている。その道路沿いに位置するタゴットッドの地価は、1970 年当時にくらべ、じつに約 300 倍と他の地区に比べて大きな上昇率をみせるまでになっているのだ。

さらに、彼ら地主の土地に居住している多くは、借地契約を結んではいない。この点については以下の節で詳述するが、これは、地主が土地の賃貸収入に課税されることを嫌うという理由以上に、土地が必要となった際、地主が容易に立ちのきを迫ることができることを担保にしているためである。

以下では、とくにタカスのアドベンコラ (Advencola)、ビリヤロス (Villiaruz) 両家の土地に居住する、カカ (世帯番号 43) やエルニン (世帯番号 72) らを中心にとりあげてみたい。カカは借地人として、エルニンは水田の小作人として、それぞれ居住地を確保している。点線で囲った A と B がそれぞれアドベンコラとビリヤロス所有の土地の範囲である。

ビリヤロス家の現所有者はアメリカに出稼ぎに出ている。また、アドベンコラ家も、相続予定者が海外出稼ぎに出ている。具体的にカカやエルニンらのリスクの背景となっているのは、土地相続予定者の帰国にともなう土地のとりあげである。とくにビリヤロス家の場合、所有者の一人が 5 年後、アメリカでの定年を機に帰国することが、2 年前の親族会 (family reunion) の席で具体的に話題にのぼったという。

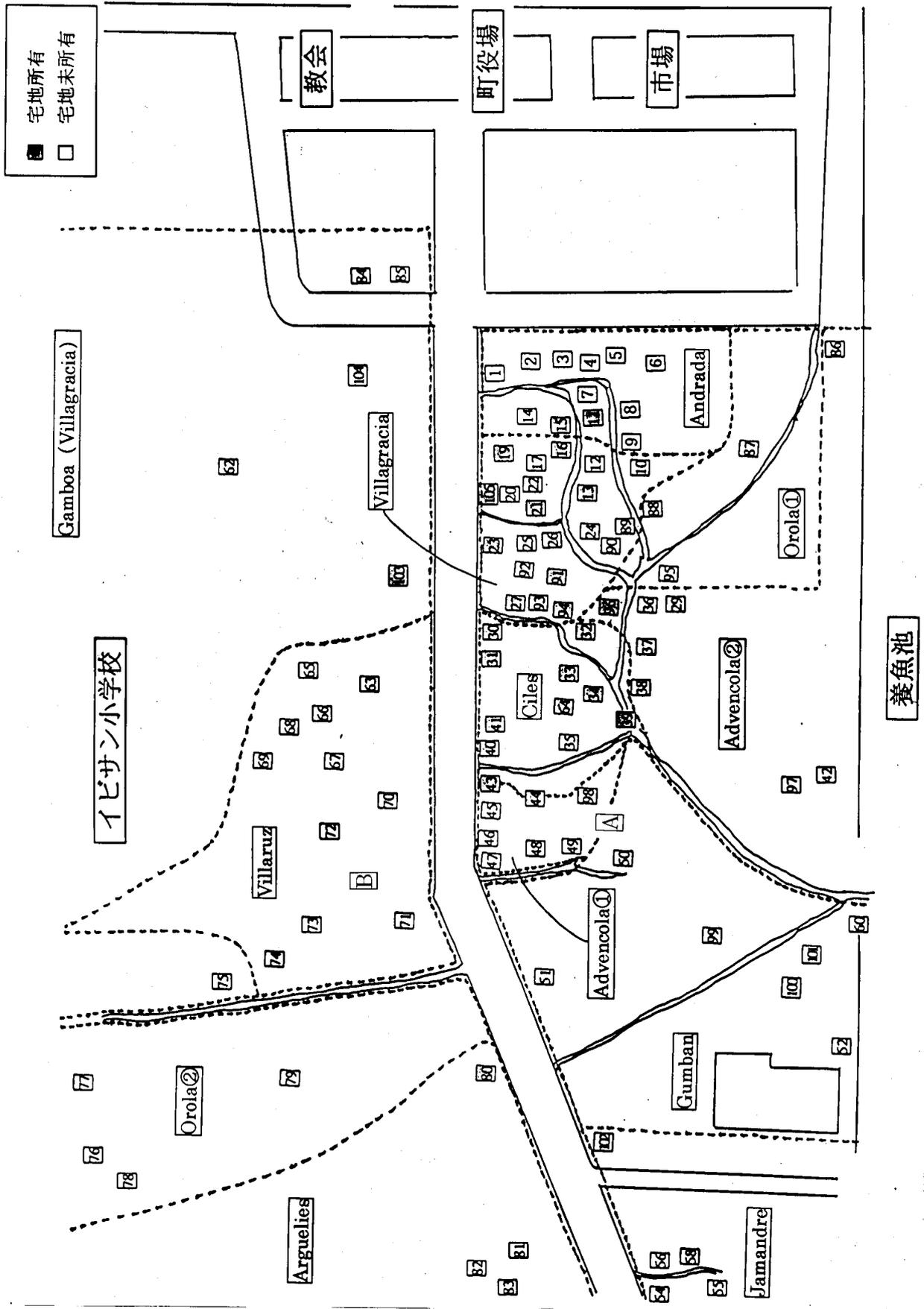


図 6-1 タゴットッドタカスの土地所有区分

## 2 住みつきのディスカルテ

次に、まず土地をもたない「小さな人々」の住みつきのプロセスを検討し、彼らの住みつきのディスカルテを検討していこう。

### (1) 住みつく - カカの「オナルシー・コンパウンド」の形成 -

1960年代、タカスにはエルニンの母の家を含む3軒があったにすぎなかった。この土地は、一部のヤシ畑や小規模な水田、そしてサトウキビ畑を除いてやぶに覆われた荒蕪地であった。現在、タカスに住む者は「ほとんどが一つの家族(pamilya)だ」といわれる程、オナルシー姓、あるいはその親類たちによって占められている。

ここではオナルシー(Unarce)家の住みつきのプロセスを、ドドン姉であるカカを中心に検討してみよう。カカは現在、夫と2組の娘夫婦、2人の孫、息子、娘の計10人と暮らしている。ビリヤロス家の土地の一角に1972年に土地を構えたエリーを除いて、他の家族のほとんどは、アドベンコラ家所有の土地に居住している。2003年9月現在、アドベンコラの土地には、カカのキョウダイと親類、あわせて8軒が居住している。

「フィリピンの平地キリスト教民の社会では、いわゆる核家族が基本的居住形態となっており、結婚後の居住にしても、夫か妻のいずれかの両親の家に同居することが多い」といわれ、また「子供が生まれ、新たな家を建てて移り住む場所でも、両親の家の敷地内や、なるべく近くに建てるといふ。そこでは、それら家々のあいだで、互いの成員の行き来や料理の分かち合い、あるいは食料や調味料、またはお金の貸し借りなどが頻繁に行われる」(寺田・大野 2001: 62-63)。

調査地イビサンにおいても、同じ様相を呈している。カカの長女であるネリサ(世番 43a)は、高校の非常勤講師であり、夫は外国航路の船乗りである。2003年9月現在、ネリサ夫婦は、娘2人と生後まもない息子とともに、カカの家同居(paglumon)していた。すなわち結婚初期妻方同居の例である。ネリサの未婚のキョウダイたちを含めて10人暮らしである。母の家の近くに新居を建てようと考えているが、敷地内に余分なスペースがなく、同居を余儀なくされていた。ただし、ネリサは母親と食費を分担している。母に洗濯物を頼む場合には現金で支払っている。「外出の際には、誰かしら、子供たちの面倒をみるものがあるということも安心だ」とネリサは言う。

次女ママ(世番 98)は、2000年に母カカの家裏に新居を構えた。夫パクノイとともに、鮮魚販売に従事している。ママたちは、結婚後、3年ほど妻方に同居していた。第2子誕生後、新居を構えたわけである。夫パクノイが、夜間口ハス市の漁港で魚を仕入れ、ママが近隣の町の市場で巡回販売している。夫婦で子供の面倒がみられないときは、母または、オジであるトンの妻に預けることもある。その際は、現金を支払うこともある。それは「彼らが現金を必要としているからでだ」と言い、いわゆる賃労働に対する支払い

というよりも一種の互助を成している。ママらは独立したわけだが、食事時には料理を盛った皿が、家々の間を頻繁に行き来する。また、母の家に限らず、親類の家で食事をすまず機会も多い。ここにみられるような、モノの贈与や労働力の提供・金銭面での援助をはじめとする生活互助が普段の生活のなかで頻繁にみられる。加えて、上述の例からみられるように、母 - 子間の紐帯<sup>(3)</sup>の強さが印象的である。

また、近くにはカカの妹ニニ（世番 40）が住んでおり、サリサリ<sup>(4)</sup>を経営している。ママは細々した菓子類、シャンプー・歯磨き粉（小袋単位）、タバコ（一本単位）そして、ウイスキーなどをこのサリサリで購入する。それはツケがきくからである。その週のツケは、翌週の日曜日に支払うことになっている。サリサリは、また近隣の親類たちにとっての「井戸端会議」の場であり、夜になるとそこに男たちが集い、酒盛りがはじまり、酒縁の場と化する。

このように居住地は親類やキョウダイが集住しているばかりでなく日常生活のこまごまとした付き合い関係に覆われた濃密な空間だといえる。つぎにカカたちの住みつきの過程を検討してみよう。

カカのアドベンコラ家の土地との関わりは、彼女の兄（ノノン）夫婦を通してである。義姉であるレミンは 1994 年に夫ノノンと死別したが、現在、娘 2 人と息子夫婦、その子と 6 人で居住している。生活費は、レバノンに家政婦として出稼ぎ中の娘の仕送りに頼っている。義姉のレミンは隣村クジャン（Cudian）のプロパー出身である。大工の父のもと、4 番目の娘として生まれた。1972 年、カカの兄であるノノンと結婚すると同時に、妻方の実家に身をよせた。しかし、当時、鮮魚商人であった夫の仕事の便（クジャンからイビサンの市場まで、大人の足で 40 分かかった）を考え、半年あまりでタカスに移り住んだ。アドベンコラは、兄夫婦の結婚時の maninay（マニナイ：儀礼親）であった。彼女は、夫の母（鮮魚商人であった）のなじみの客であった。夫の母が選んだマニナイであった。兄夫婦は、このマニナイを頼って、ここに移り住んだわけである。当初住んだのは、小さな小屋（payag）であった。アドベンコラの夫インカルナシオンは、小屋が建つとわざわざ見に来てくれ、「いい家だと言ってくれた」と目を細めた。

表 6-1 タカス在住のカカの親類

| 世帯<br>番号 | 氏<br>名    | 夫<br>妻 | 親族<br>関係 | 主な生業                  |
|----------|-----------|--------|----------|-----------------------|
|          |           |        |          |                       |
| 4 3      | Boy       |        |          | 大工+井戸掘り+養豚            |
|          | Caca      |        | ego      | 市場魚商 (巡回)             |
| 3 4      | Tbtong    |        | 弟        | なし                    |
|          | Belin     |        |          | マニラでメード               |
| 3 8      | Kato      |        | 弟        | 自転車による魚の行商            |
|          | Juvy      |        |          | 徒歩による魚の行商             |
| 3 9      | Dodong    |        | 弟        | 市場魚商                  |
|          | Otay      |        |          | 市場魚商                  |
| 4 0      | Emar      |        |          | マニラで魚商                |
|          | Nene      |        | 妹        | サリサリ経営、おやつ販売          |
| 4 4      | Benny     |        |          | 妻の手伝い+カキ養殖場+養豚        |
|          | Nining    |        | 姉        | 市場魚商                  |
| 4 5      | Nonoy(死亡) |        | 兄        |                       |
|          | Reming    |        |          | なし (レバノンの娘の仕送り)       |
| 4 6      | Mondoy    |        | 母方オジ     | 大工                    |
|          | (死亡)      |        |          |                       |
| 4 8      | Iyan      |        |          | 市場魚商                  |
|          | Sally     |        | 第一イトコ    | 市場魚商 (巡回)             |
| 6 3      | Leoning   |        | 母方オジ     | 養豚                    |
|          | Isya      |        |          | 市場魚商+町菜買い付け+竹カゴ販売     |
| 6 9      | Botoy     |        | 第一イトコ    | 大工+カキ養殖場              |
|          | Melindre  |        |          | 洗濯婦                   |
| 7 0      | Ongel     |        | 第一イトコ    | タバ漁+カキ養殖場             |
|          | -         |        |          | なし                    |
| 7 1      | Ramon     |        | 母方オジ     | サデ網漁                  |
|          | -         |        |          | なし                    |
| 7 2      | Erning    |        | 第二イトコ    | 農業+市場魚商+井戸掘り+カキ養殖場+養豚 |
|          | Vering    |        |          | 市場魚商+サリサリ経営+おやつ販売     |
| 7 3      | Nato      |        |          | 養豚                    |
|          | Ely       |        | 姉        | 市場魚商                  |
| 9 8      | Packnoy   |        |          | 市場魚商                  |
|          | Mama      |        | 娘 (次女)   | 市場魚商                  |
| (4 3a)   | Nonog     |        |          | 船乗り                   |
|          | Nerissa   |        | 娘 (長女)   | 高校教師 (臨時)             |
| (4 4a)   | Onyok     |        |          | 役場職員 (臨時)             |
|          | Oday      |        | メイ       | なし                    |
| (4 5a)   | Bonbon    |        |          | トライシクルドライバー           |
|          | Vevel     |        | メイ       | 市場魚商                  |
| (4 5b)   | Bigaw     |        | オイ       | なし                    |
|          | Sena      |        |          | なし                    |
| (4 6a)   | Edwin     |        |          | 魚運搬人 (arong)          |
|          | Panin     |        | 第一イトコ    | 市場魚商 (巡回)             |

註：括弧内は同居を意味する。

カカがタカスに移り住む決心をしたのは、この兄夫婦がここに住んでいたことの原因が大きい。カカは、結婚と同時に夫の実家のあるマロクロク (Marocloc) に夫の両親とともに住み、サトウキビ農園で労働者として働いたが、炎天下の仕事のつらさとともに低賃金であることに見切りをつけ、結婚前から携わっていた鮮魚の販売を再開した。しかし、マロクロクから徒歩で1時間半もかかる上に、市場の朝は早い。毎朝3時に出る生活を続けていたが、時間的な制約もあり、十分な仕入れができなかった。子供ができたことを機に、イビサンに移り住むことにした。当初、小学校時代の幼なじみの父が所有する土地に移り住む予定で、建材まで運び入れた。しかし、そこは通りから奥まっであり、林の中のとてもしばしい (mamigaw) 土地であった。そこで、兄を頼って現在の場所に移り住むことになったが、当初住む予定であった土地には、現在では大きな家が建ち並んでおり、たとえ住めたとしてもいずれ立ちのきにあっていたらと語る。兄に付き添われてアドベンコラのもとには出向き、カニやエビを贈り物として、居住の認可 (Paglaong) をとった。当時を振り返り、カカの夫であるボイは、「カカはここにオナルシー・コンパウンド (コンパウンドとは、高級な分譲地の意) をつくろうと考えたのだ」と笑っていった。しかし、カカの居住を機に、キョウダイの多くがこの場所に集まり、住みつきはじめる。

まず、町の中心部に住んでいたカカの母は立ちのきにあい、カカの家の隣に移り住み、サリサリ (雑貨屋) をはじめた。また、時を同じくして、カカの姉であるニンが、夫の実家があるロハス市タロンから移り住む。表向きの理由は、子供の就学のためであったが、当時、鬪鶏に入れあげていた夫がギャンブルで借財をつくり、所有していたトロール船2隻を売却した結果の移住である。ニンは現在、娘夫婦とその2人の娘、そして夫の6人暮らしである。1985年、サウジアラビアに出稼ぎに出た兄が、母のために家を新築したこともあり、マニラに出稼ぎに出ているカトとドドンがつづいて帰郷した。彼らは帰郷後なもなくサデ網漁に従事した。カトは10人の子持ちであるが、子供の妊娠をきっかけに帰郷した。トトンも同様の理由により帰郷した。いずれも母の家に同居し、その後、トトンは母の家の敷地に家を建てた。カトが建てた家の立地は、ちょうどセルリス (Celis)、アドベンコラ、ハマンドレの所有する3つの土地の境界上にあり、立ちのきの危険を考えた上でこの場所に決めたという。これは彼のディスカルテであるとう。ドドンは、母が亡くなった後、その家を借りて現在住んでいる<sup>(5)</sup>。

## (2) 住みつきのプロセスと彼らのディスカルテ

以上の住みつきのプロセスを検討してみよう。まず、タカスへの移り住みは、経済的理由によるものである。カカの母が鮮魚商であったこともあり、カカのキョウダイは、幼少から母とともに市場に通い、商売になじんでいた。いずれも結婚し、家を構える前に鮮魚

の売買に従事していた経験をもつ。彼らにとっては、市場までの近さがメリットとなった。またマニラから帰郷したトトンとカトは、サデ網漁に従事したが、川へのアプローチが容易であることも、この地に移動した理由のひとつであるという。タカスの立地条件が居住地選択の要因になったわけだ。

次に住みつきのディスカルテを検討しよう。カカの意図したコンパウンド形成の要は、兄夫婦の土地の所有者とのマニノイ-イハド (ihado) 関係である。マニノイが自分のイハドのカロオイを断ることは、mahuya (はずかしいこと) だといわれることを見こした上でである。

住みつきのディスカルテの要諦は、土地を持つ知り合い (kilala) あるいは、親類 (parente) といった、個人的な関係をもつ者に居住の許可を求めることだ。トトンは以前、友人を介して、その友人の父の持つ土地の居住の許可をとったことがある。久しぶりに会う友人と酒を酌み交わし、昔話などし、旧交をあたため、頃合いを見計らってその話を切りだしたものであるという。

また、何も手づるがない場合、メイドを求めている地主の家に子供を送り込み、無給でもよいから働かせて、その子供に許可をとらせるといった手段も行われている。その際の決めゼリフは、子供に「Nalo-oy ako sa nanay kag tatay ko. (両親が不憫です)」と言わせることである。また、マニラ在住の地主の元に、子供をメイドとして送り込むこともある。これらは「よいディスカルテ (maayo nga diskarte)」であるといわれる。一方、地主と個人的関係を築くため贈り物 (regalo) をすることもある。贈り物は地主との間をとりもつ (pabalos) ディスカルテである。

このように個人的関係を利用することと、贈り物をするにとりまぜ、地主の許可をとりつける。実際、アドベンコラの土地に居住するものは、毎年、フィエスタやクリスマス、また、彼女の家の誰かがマニラに出かける際などに、ニワトリを贈ったりもしている。

さらに、アドベンコラからの要求でもったのだが、2003年のフィエスタの際にも、レミンはニワトリ一羽提供した。彼女はニワトリを飼っていないため市場で140ペソで購入し、それにあてたという。いずれにしても、これらの行為は、地主に慈悲 (カロオイ) を求める行為であるというのが、彼らの言である。しかし、これは義務 (obligasyon) ではなく、感謝の気持ちを示すものであるという。慈悲を求めているという立場を堅持するがゆえに、地主の無理な要求は、それを盾に断ることができるのだともいう。ここでいう慈悲を求めるといふ行為は、まさにディスカルテとしての意味を表したものだといえる。また、「慈悲を求める以上、地主に対して、敬意を払う (respito sa tag-iya) ことが大切であるが、腹のなかでどう思っているかは別である」と。

しかし、このような借地契約を望まない地主に、カロオイを求めるやり方での住みつきこそが、借地人たちの居住状況を不安定にしているともいえる。個人関係を利用したカロオイは、当事者間の関係にすぎない。土地所有者の代がかわり転売することになればその

関係は解消されてしまうのだ。

### (3) 立ちのきの危機

1985年、アドベンコラに隣接するセレスの土地が娘に相続されると、立ちのきの問題がもちあがった。セレスの死後、娘婿で保険会社のマネジャーをつとめるアルカンヘレスは、土地確定のために測量を行った。その結果、カカ、母、ニニンの家屋の一部が、アルカンヘレスの土地にかかっていることが判明する。彼女たちは地代を請求され、2年ほど支払いをしていたら、突然立ちのきをせまられた。この土地に目をつけた有力者が家を立てたいと希望したために、アルカンヘレスはその土地を更地にしようとしたわけである。立ちのきをせまられた7人(カカ、母、ニニン、リト、エトナ、ロケ)は、この要求をはねつけるべく行政の末端窓口であるバランガイオフィスに問題をもちこむ。だが不首尾に終わると、今度はダオ(Dao)にある下級裁判所に提訴した。裁判では地代を払っていたかどうかが争点になったが、前年の台風で、カカからは受領書(resibo)を紛失してしまっていた。幸いリトの財布の中に残っていた一枚の受領書が決め手となり、調停を有利に運ばせることができたのだ。裁判所側は、地主側に立ちのきの不当性を示し、代替地と移住費用の一切を負担すべしという判断を下した。その結果、カカからは裁判所が提示した地価で土地を買い取ることになった。カカは $20\text{m} \times 10\text{m} = 200\text{m}^2$ を6000ペソで、母は $400\text{m}^2$ を12000ペソ、これを月賦で購入することになった。いずれも地主が提示した額よりきわめて低額であった。このように、借地関係(契約書がなくとも)を結ぶことは地主側にとってみると、居住者を立ちのかせることの障害になる。同様に、エリーがビリアロスの地に住みついた際、借地料を支払っていたが、領収書を要求すると地代の要求はさたやみになったというのもこの事情を反映したものだといえる。アドベンコラが、賃料ではなくてかわりにニワトリという物納を要求するのは、この問題を回避するもくろみがあると考えられる。

では、レミンの立ちのきの危機はどうか。レミンが家を改築した際のことである。セメントの壁にぬりかえている時、たまたまアドベンコラが通りかかり、それをみとがめ、ただちにセメント壁をこわすように要求した。セメントで壁をつくること(これは「完全な家」を意味する)は、地主側にとって立ちのきの障壁となるからである。しかし、彼女の夫が3年後、4000ペソの借金をレミンに求めた。ギャンブルで負けこんだからだろうというレミンはうわさしているが、現在に至っても返済がない。セメントの壁の問題はそれ以後沙汰やみになっている。地主側にかしができたため、無理な立ちのき話はないだろうとレミンは語っている。問題は、代がかわり、現在海外出稼ぎしている者が帰郷した際に、この土地をどう利用するかだという。

### 3 土地を介したパトロン・クライアント

#### (1) 小作人エルニン

道を挟んで隣接するピリアロスの土地は、また事情が異なる。エルニンはこの土地にある水田（2 ha）の唯一の小作人である。まず地主側のピリアロス家についてその背景を説明することからはじめよう。この土地はピリアロス家のキョウダイのリリ、ビン、モリンが分割・登記しているが、実質的にはモリンが管理している。モリンは7人兄弟の第2子で合衆国に移住し、企業の事務員をしている。7人兄弟のうち、3人が合衆国、3人がマニラ、イビサンには末妹リリが居住しているのみである。1995年、モリンのムスコがマニラから来住し、彼が母モリンと住民とを仲介している形をとっている。モリンの父はイビサン町長の経験者であり、彼らの所有地はここタカスの他、マロクロク、クジャン、バラリン、また隣町シグマ（Sigma）にもおよぶ。

一方、小作人のエルニンは1972年、出稼ぎ先のマニラから妻をともなって父が住むタカスに帰郷した。父は、ピリアロスの土地のヤシ林を管理した。そんな父の関係もあり、その土地にある水田を小作し、水田を含めた3 haの土地を管理している。親の代から居住するものを含め、現在11世帯がそこに居住している（表6-2）。

現在、彼の小作地に住む住人は、新居の建築や改築などの許可はエルニンを通して得ている。エルニンは自分のことを無報酬の差配人（enkargador）であるという。地主は差配人や居住者から amo（親方）と呼ばれ一方居住者は tinao（従者）と呼ばれる。地主（A）、差配人（B）、居住者（C）の関係を図示すれば図6-2のようになる。

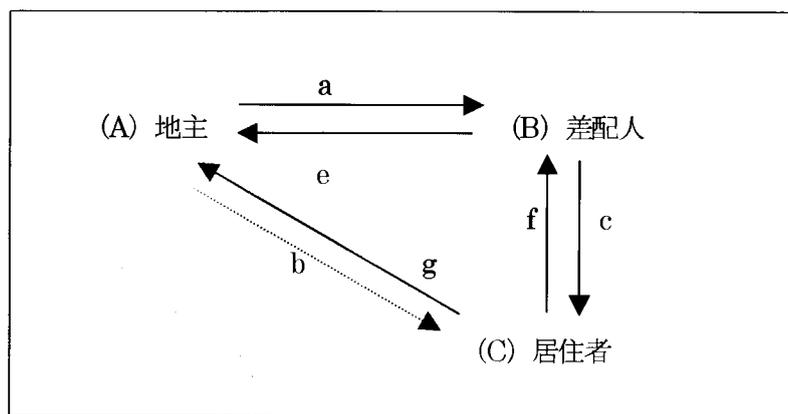


図 6-2 地主と居住者の関係

これらの3者の関係は、モデルとしては（A）—（B）—（C）間の二者関係からなっているといえるだろう。具体例にそってみることにしよう。（A）—（B）間においては、地主は差配に対して様々な場面（たとえば家の改修）で労働力を要求する（a）。それに対して、

差配は地主に対して借金を申し出ることができるといわれる (e)。(B) — (C) 間では、居住者は直接地主からではなく、差配を通じて居住の許可をとる (c)。それに対して、たとえば居住者が敷地内に樹木を植えた場合、その売却益を差配と折半することがある (f) (後述)。(A) — (C) 間では、居住者はその土地に住まわせてもらっているので既に大きな借りがある。緊急であっても地主に助力を求めること (g) は恥ずかしい (mahuya) ことであり、場合によっては追い出しを食らうこともあるという。両者間は間接的な関係 (いいかえれば (B) を仲介とした関係) にとどまっている (b)。

私が遭遇したひとつの事例をあげると、居住者ブダが家を新築する際、贈り物持参で地主ピリアロスに許可を求めるために訪れた。しかし地主は贈り物を拒み、エルニン (差配) に許可を求めるようにいった。ここには、立ち退きの際に生じるであろう関係のもつれを未然に防ごうという地主側の意図が見出せる。

居住者と地主との関係は間接的な関係であるがゆえに、居住者が地主のとの関係を強固にする機会 (g) が聖週間の準備作業においてである。

表 6-2 ピリアロス家所有地に居住する住民とエルニンとの関係

| 世帯番号 | 氏名       | 夫<br>妻 | 主たる生業                 | 関係            | 聖金 | 復活 |
|------|----------|--------|-----------------------|---------------|----|----|
| 7 2  | Erning   |        | 農業+市場魚商+井戸掘り+カキ養殖場+養豚 | Ego           | ○  | ○  |
|      | Vering   |        | 市場魚商+サリサリ経営+おやつ販売     |               | ×  | ○  |
| 6 3  | Leoning  |        | 養豚                    | 父の第一イトコ       | ×  | ×  |
|      | Isya     |        | 市場魚商+野菜買い付け+竹カゴ販売     |               | ○  | ×  |
| 6 5  | Renny    |        | サバディスタの牧師             | 知り合い(kilala)  | ○  | ×  |
|      | Ange     |        | 市場魚商 (巡回)             | 知り合い          | ×  | ×  |
| 6 6  | Sarding  |        | やし酒造り+養魚池番頭           | 知り合い          | ○  | ○  |
|      | Boda     |        | 市場魚商                  | 第二イトコ         | ○  | ×  |
| 6 7  | Junile   |        | 漁船船頭                  |               | ○  | ×  |
|      | Lya      |        | 市場魚商 (巡回)             | ムスメ(長女)       | ×  | ×  |
| 6 8  | Ronny    |        | 市場魚商 (巡回)             | クンバレ(kunpare) | ○  | ×  |
|      | Diding   |        | なし                    | クマレ(kunmare)  | ×  | ×  |
| 6 9  | Botoy    |        | 大工+カキ養殖場              | 第二イトコ         | ○  | ○  |
|      | Melindre |        | 洗濯婦                   |               | ×  | ×  |
| 7 0  | Ongel    |        | タバ漁+カキ養殖場             | 第二イトコ         | ○  | ○  |
|      |          |        | なし                    |               | —  | —  |
| 7 1  | Ramon    |        | サデ網漁                  | 父の第一イトコ       | ×  | ×  |
|      |          |        | なし                    |               | —  | —  |
| 7 3  | Nato     |        | 養豚                    |               | ○  | ×  |
|      | Ely      |        | 市場魚商                  | 第二イトコ         | ○  | ×  |
| 7 4  | Artem    |        | なし                    | 知り合い          | ×  | ×  |
|      | Landa    |        | なし                    | 知り合い          | ×  | ×  |

## (2) 聖週間の山車をめぐるパトロン・クライアント

フィリピンにおけるカトリックの主な年中行事といえば、クリスマス、イースター、万聖節（諸聖人の日）、フィエスタの四つだが、なかでも聖週間からイースターにかけての宗教行事が重視されている（寺田 2000）。ピリアロスの土地の居住者にとって、聖週間は paso（聖人を乗せた山車）のプロセッションへの参加と、その準備に費やされる。2003 年の聖週間は 4 月 13 日から始まった聖金曜日と復活祭当時のプロセッションと準備の参加者を示したのが表 6-2 である。

表 6-3 フィエスタの準備（2003 年 4 月）

|        | 行事     | 聖像の山車 (paso) をめぐる作業     | 参加世帯番号            |
|--------|--------|-------------------------|-------------------|
| 13 (日) | 枝の主日   |                         |                   |
| 14 (月) |        | パソの運び込み、掃除              | 72、70、68、67、63    |
| 15 (火) |        | ミーティング                  | 73、72、70、69、66    |
| 16 (水) | 受難の水曜日 | テント造り                   | 74、70、69、66、65、63 |
| 17 (木) | 聖木曜日   |                         |                   |
| 18 (金) | 聖金曜日   | パソのかざりつけ/プロセッション        | 表 6-2 参照          |
| 19 (土) |        | 聖人像(santo)のつけかえ、生花かざりつけ | 72、66             |
| 20 (日) | 復活祭    | プロセッション                 | 表 6-2 参照          |

事実、居住者の間で、聖週間から復活祭にかけて、行列の準備以外、教会の行事に直接参加する者はいなかった。また、カトリックでない者もこれらの準備と行列には参加している。ここには地主への配慮がかいまみられる。この聖週間の準備や参加が、地主に対する敬意を直接的に表現する場<sup>(6)</sup>なのである。それゆえの準備段階においても、だれが参加し、あるいはしなかったのかが居住者の間でことさら話題になる。

## 4 宅地の資源化あるいは小さな人々の抵抗

### (1) 小作人エルニンと契約書の裏書き・農地改革

エルニンは現在、水田を 2 ha 経営している。水田には灌漑設備がなく、天水に頼っている。1972 年当時、収穫は、年に一度だけだった。1985 年高収量米を導入したことにより、二期作が可能となった。1970 年当初、耕耘機はなく、水牛を用いて耕起したが、現在は耕耘機を知り合いから借用し、日当を支払っている。田植えはおこなわれず、直播きの方法をとっている。収穫には人を雇った。賃払いではなく、近くのクンパレを呼び、刈り入れを行った後、酒と食事でもてなした。この方が、日当を支払って刈り取りするよりも短時間で終了し、かつ安あがりであるという。これは彼のディスカルテである。ドドンが水道工事を請け負った際の話であるが、仕事をのぼすことが雇われ者のディスカルテであるとのことだ。初収穫は、一期作が 18 カバン（1 カバン = 50kg）と二期作が 16 カバンと一定しないが、年収量は 30 カバン前後である。1970 年当時は、12 カバンであったから、約 2.5 倍の収量増となる。当時、水田借地契約料は年 6 カバンであった。しかし、現地主であるピビンがアメリカに移住してからは、物納ではなく金納に替わった。現在の小作契約料は、年 2500 ペソの現金払いである。水田農業の収支をみると、エルニンの手元に残る米は、約 5 カバンである。彼曰く、水田（収入）は「赤字・損失（perde）」である。収穫された米は販売せず、もっぱら自家消費にあてられる。同じ敷地に娘夫婦が 2 組居住しているが、彼らに米をわけてやるので、一年分の食料にあてることもできない。種籾を残して、なくなれば米を市場で購入するわけだが、種籾にまで手をつけてしまう年もあるという。生活費は市場での鮮魚売買や井戸掘り、小規模な日常雑貨（sarisari）などの収入で補っている。また、大学卒業し、コンピュータ・メーカーで働く息子も家計を補ってくれている。

彼の口癖は、「一つの仕事（obra）だけを信頼（magsalig）してはいけない」ということだ。つねに doble-doble, sapihak-sapihak であらねばならないという。doble-doble とは、仕事を複数かけもちすることをいい、sapihak-sapihak とは、機会があれば、あちこちどこへでも出かけることをいう。収入の中に占める農業収入の比率は少なく、この場所に住みつくと、すなわち宅地を守るために自分は農業をやっているのだ、という。

そういえば、彼もまた地主から法外な価格で土地を買い取るか、さもなくば立ちのくかとせまられたことがある。1985 年のことだが、うまく乗り切った。きっかけは 1972 年、借地契約を結んだときにさかのぼる。水田の借地人を探している地主に、裏書き一文を頼んだことから始まる。当時地主は、地元の人々から「ロラ」（モリンの祖母）と呼ばれるピリアロス家の老婆であった。彼女の提示した条件は、年 8 カバン、支払いがよければ 3 年延長するというものであった。当時 80 歳をこえていたロラの申し出だが、ロラが亡くなれば、その条件は反故になると思ったエルニンは、「2、3 年で小作人がかわるような水田は、まるで 2 年しか借りることができない土地にヤシの苗木を植えるようなものだ。賃料が滞ることは絶対はない」といい、ロラに交渉して「賃料を滞りなく支払えば、永久に水田を耕せる」という契約書の裏書きを勝ちとった。当時を振り返ってエルニンはいう。「ロラは遅かれ早かれ、この地にも農地改革<sup>(7)</sup>が行われるのを知らなかったのだろう」。当地

で農地改革が実施されたのは、それから5年後のことである。エルニンは代がわりし、地主が変わり、立ちのきをせまられるたび、ロラの裏書きを見せたという。

数年前、再び地主から土地の買い取りをせまられた。町の農地改革事務所（Municipal Agrarian Reform Office）に小作登録したエルニンは、農地改革法の条文とロラと交わした借地契約書の裏書きをたてにその要請を断っている。エルニンによれば、マニラでの生活経験が生かされたのだという。出稼ぎ先のマニラで強制立ちのきを身近に経験したこと、また居住が生活の基本であることを骨身にしみていたからだともいう。

裏書きをとるということ、しかもその際には、英語ではなく自分の母語であるイロongo語で書かせたというのが、彼のディスカルテであったと述懐する。彼は小学校を中退したため、満足に英文の読み書きができないという理由に加え、英文の契約書ととりかわした知人が、内容を確認できず、不利益をこうむったという体験をしているからである。

また、今度立ちのきの要求があれば、水田を返すかわりに、農地改革で保障された小作権を交渉の材料に宅地を要求するのだともいう。以前、8000ペソを手わたすかわりに立ちのきを求められたこともあったが、現在の地価が1㎡あたり1000ペソであるわけであり、とうてい同意するわけにもいかない。むしろ水田を手放すかわりに宅地分を分与してもらう方が得策だと考えている。そのためにも地主に恩をきせたくない。裏書きも農地改革の趣旨も耕作権を保障するものだが、彼にとって水田を耕し続けること、すなわち耕作の既成事実をもつことは、家族がそこに永続的に住み続けることを可能にする、換言すれば居住地を守るためのディスカルテとなっている。

## （2）植樹するボトイ

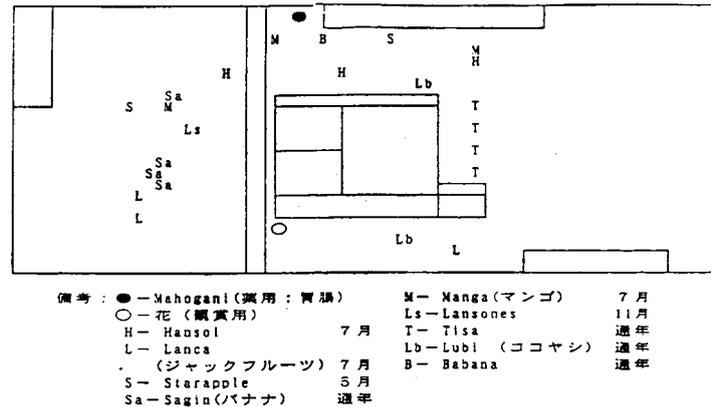
東南アジアの水田地帯を歩くと、水田の中に小島のように、こんもりと木々に囲まれた居住地をよく目にする。インドネシアでは、プカロガン（屋敷林）とよばれ、「台所の畑」として、さまざまな果樹を植え、日々の暮しに役立てているといわれる。調査地ではこのような表現こそないものの、敷地には様々な有用樹木が植えられている。それは、農村地帯だけでなく、町場の居住地でも同様である。トンの場合、猫の額のような敷地にもかかわらず、sagin、bayabas、indian mango、starapple、lubiなどが植えられている。敷地に好まれる樹木はlubi、mahugani、indian mangoなどである。利用法については、lubiは多目的に利用できる樹木である。mahuganiは単に建材となるばかりでなく、種子は胃薬に、また乾燥させた果皮は料理時の煮炊きの燃料に使われる。これら樹木の果実は、自家消費されるだけでなく、市場に持ち込み販売することもある。時に果実商による立ち木買いも立派な収入源になっている。以下では、とくに彼の所有地の家屋周囲に植えられている木々（家屋、船の建材、食料、薬用などに利用される有用樹木）を一覧表にしたものである（表6-4）。

表 6-4 家屋周囲に植えられている有用樹木一覧

| 現地名           | 和名             | 学名   | 用途       | 備考                               |
|---------------|----------------|--|----------|----------------------------------|
| Indian Mango  | ウルシ科クイニマンゴー    | <i>Mangifera odorata</i>                             | 食用       |                                  |
| Hansol        | センダン科サントール     | <i>Sandoricum nervosum (S. indicum)</i>              | 食用       |                                  |
| Starapple     | n.d            | n.d  | 食用、薬用    | 樹皮、葉→下痢                          |
| Lubi          | ヤシ科ココヤシ        | <i>Cocos nucifera</i>                                | 食用、加工、建材 |                                  |
| Nangka        | n.d            | n.d  | 食用       |                                  |
| Mangga        | ウルシ科マンゴー       | <i>Mangifera indica</i>                              | 食用       |                                  |
| Abokado       | クスノキ科アボカド      | <i>Persea americana</i>                              | 食用       |                                  |
| Saging        | バショウ科バナナ       | <i>Musa sapientum</i>                                | 食用       |                                  |
| Kakaow        | アオギリ科カカオ       | <i>Theobroma cacao</i>                               | 食用       |                                  |
| Babana        | バンレイシ科トゲバンレイシ  | <i>A. muricata</i>                                   | 食用       |                                  |
| Sorales       | n.d            | n.d  | 食用       |                                  |
| Cabugao       | ミカン科ザボン        | <i>C. grandis</i>                                    | 食用       |                                  |
| Tiza          | アカテツ科カニステル     | <i>Lucuma nervosa</i><br><i>Pouteria Campechiana</i> | 食用       |                                  |
| Bayabas       | フトモモ科グアバ       | <i>Psidium guajava</i>                               | 食用、薬用    | 葉→傷、実→下痢                         |
| Salguwilas    | n.d            | n.d  | 食用       |                                  |
| iba           | n.d            | n.d  | 調味料      |                                  |
| Garangan      | カタバミ科ゴレンシ      | <i>Averrhoa carambola</i>                            | 食用       |                                  |
| Kaspayas      | n.d            | n.d  | 食用       | 葉が石鹼の代わり                         |
| Mabulo        | オトギリソウ科マンゴスチン  | <i>Garcinia mangostana</i>                           | 食用       |                                  |
| Kasoy         | ウルシ科カシュウ       | <i>Anacardium occidentale</i>                        | 食用       | 葉→火傷                             |
| Lansones      | センダン科ランサ       | <i>Lansium domesticum</i>                            | 食用       |                                  |
| Kalanbutan    | ムクロジ科ランブータン    | <i>Nephelium lappaceum</i>                           | 食用       |                                  |
| Tambis        | クロウメモドキ科インドナツメ | <i>Ziziphus mauritiana</i>                           | 食用       |                                  |
| Markopa       | フトモモ科マレーフトモモ   | <i>S. Malaccensis</i>                                | 食用       |                                  |
| Babana china  | バンレイシ科ペリバ:イラマ  | <i>Annona diversifolia</i>                           | 食用       |                                  |
| Atis          | バンレイシ科バンレイシ    | <i>A. squamosa</i>                                   | 食用       |                                  |
| Tamarindo     | マメ科タマリンド       | <i>Tamarindus indica</i>                             | 調味料      | 種は子供のおやつ                         |
| Larrangita    | n.d            | n.d  | 調味料      | ジュース→咳                           |
| Marang        | クワ科ニオイパンノキ     | <i>Artocarpus odoratissima</i>                       | 食用       |                                  |
| Lumbuy        | フトモモ科ジャンボラン    | <i>Syzygium cumini</i>                               | 食用       |                                  |
| Taganhel      | n.d            | n.d  | 食用       |                                  |
| Bugnay        | トウダイグサ科ナンヨウゴミシ | <i>Antidesma bunius</i>                              | 食用       |                                  |
| Titilis       |                |  | 食用       | 精霊の住処                            |
| Kamonsel      | ネムノキ科キンキジュ     | <i>Pithecellobium dulce</i>                          | 食用       |                                  |
| Kape          |                |  | 食用       |                                  |
| Chiko         | ウルシ科ボンバガン      | <i>M. pajang</i>                                     | 食用       |                                  |
| Santores      | n.d            | n.d  | 食用       | ジュース→咳                           |
| Boboy         | n.d            | n.d  |          | 実の繊維が枕の材料となる。以前、サンダル (bakya) の材料 |
| Mahugani      | n.d            | n.d  | 建材、薬用    | 船材、種→高血圧                         |
| Nara          | n.d            | n.d  | 建材       |                                  |
| Kube          | n.d            | n.d  | 建材       | 柱 (haligi) に適す                   |
| Kawayan       | n.d            | n.d  | 建材、家具材   |                                  |
| Butong        | n.d            | n.d  | 建材、家具材   |                                  |
| Salong        | n.d            | n.d  | 建材、薬用    | 樹液                               |
| Jubilina      | Paper tree     | n.d  | 建材       |                                  |
| Akasya        | n.d            | n.d  | 建材       |                                  |
| Tangitan      | n.d            | n.d  | 家具材      |                                  |
| Painetree     | n.d            | n.d  | 観賞用      |                                  |
| Madre Kakaw   | n.d            | n.d  | 垣根用、薬用   | 葉、樹皮→切り傷                         |
| Ipilipil      | n.d            | n.d  | 薬用 (家畜)  | 豚の虫下し                            |
| Fourtune tree | n.d            | n.d  | 観賞用      | 香りがよい                            |
| Labnog        | n.d            | n.d  | 薬用       | 実→頭痛                             |
| Argao         | n.d            | n.d  | 薬用       | 葉→新生児の産湯                         |

ここでとりあげるのは借地に植樹したボトイの事例である。ボトイは、妻、幼い子供も含めて、6人で生活している大工であるが、刺網をもち、兄弟である漁師バウバウ（長兄）あるいはオンゲル（弟）の舟があいているときには出漁をする。また雨期には、サデ網漁も大きな収入源になっている。夫の仕事がないときは、妻が他人の洗濯を請け負って糊口をしのいでいる。

図 6-3 ドドンの家屋周辺の樹木



ところで、以前ピリアロスの土地に母の家があり同居していたが、2人目の子供が生まれた後、独立して家を構えた。家屋はエルニンの弟の家を購入したので、とくに許可を必要としなかったという。これも居住のディスカルテのひとつであるという。購入した家屋は、大勢の男たちが、肩に担いで現在の場所まで約30mほどを運んだという。これはフィリピンの農村地帯で時に目にするパタブン (patabang) と呼ばれる慣行である<sup>(8)</sup>。敷地には、ボトイが大工の腕を生かしてこしらえた東屋がある。その周辺にまだ、腰の高さに満たないが、おびただしい数の mahagani, jumilina が植えられている。これが彼の立ちのきに抗するディスカルテであるというのだ。敷地にある樹木は、建材にして販売するとき、エルニンの許可を得なければならないからである。つまるところはエルニンの胸先三寸であるが、売却益は折半することになっている。

植えた木はいずれも建材用であり、また成長の早い品種である。彼のディスカルテは、これら樹木を立ちのき問題が起こった時の交渉の材料にすることである。木を植えることは、エルニンには許可をとったが、地主には内密になっている。立ちのきをせまられたら、地主に樹木を購入してもらおうと考えているわけだ。ただ、その際、地主に必要な木を選んでもうつもりであると語る。地主が先に樹木を選ぶことになれば、すべて取りあげることは遠慮 (mahuya) してしないだろうというのが彼の読みである。その残りの樹木の売却益を移住費用に充てようと考えている。このように敷地の樹木は、単に経済的資源であるばかりでなく、立ちのきに対処するための交渉資源にもなっているのだ。

## 5 まとめ

以上、居住地をめぐる彼らのディスカルテを記述してきたわけであるが、明らかになったことをまとめてみよう。

今回調査対象としたのは、ピリアロスとアドベンコラ、セレス家所有の土地をめぐる居住者のディスカルテであった。近年における土地の資産価値の上昇を背景に、立ちのき問題も頻発している。地主側は、法的に居住者の立場を保護する借地契約を望まない。それは、地主が必要とした場合に、たやすく土地を取り上げるための担保である。一方土地を購入できない居住者は、マニノイなど、個人的な関係を通じて、地主から居住の許可をひきだそうとする。これはディスカルテとしてのカロオイ、すなわち慈悲を乞うことであった。この関係は地主との二者間関係にすぎず、地主の代わりや所有権の移動によって、両者の関係は容易に解消されてしまうものである。まさにこの構図が居住者の不安定要因である。カカらの場合は、地主の要請に従った贈答をとおして、またエルニンは小作人の立場を生かした宅地の確保、ポトイは植樹することによって、立ちのきの問題に対処しようとしていたわけである。

居住地を失うことは、単にその物理的空間を失うことではない。エルニンらの言葉によると、立ち退きはディスカルテハン(diskartehan)を失うことであるという。ディスカルテハンとはディスカルテに場所を表す接尾辞 an をつけたもので、文字とおり、「ディスカルテの場」を意味する。ディスカルテの場とはディスカルテを働きかける対象のことである。前述したように、カカらがタカスに移住した契機にはまず経済的理由がある。それは生活の糧を得るための市場が、そして漁場が隣接していたためである。立ち退きは彼らがディスカルテを働きかける場、すなわち市場や漁場を失わせることに通じる。ただし、ここで彼らがいうディスカルテの場とは生活の糧を生み出す場だけを意味するのではない。それはディスカルテをはたらきかける対象としての「人と人の関係」をも意味している。

立ちのきは、隣り合って居住し、培い、蓄積してきた社会関係<sup>(9)</sup>の喪失を意味する。いわばディスカルテをはたらきかける場としての「コミュニティ」<sup>(10)</sup>を喪失することにほかならないのである。

(註)

(1) 同様の表現はフィリピンの他地域においてもみいだせる(川田 2001)。

(1) pamilya はイロンゴでは両親とその子供という核家族と双系親族の二通りの意味で使われるが、ここでは後者の意味で使う。

(3) ジャワの家族を分析したギアーツ(1961)は、こうした現象をマトリフォーカリティ(matriforcality)という術語で論じている。フィリピン社会との異同については改めて論じたい。

- (4) このような「サリサリストア」は、フィリピン社会に限らず東南アジア地域に広く分布しており、日用雑貨の販売単位が小口であること、ツケ買いがきくことを特色としている。日銭の乏しい人々にとって生活に不可欠な存在であり、それに加え、サリサリストアは近隣コミュニケーションの重要な場を提供している。サリサリストアをめぐる問題については改めて論じたい。
- (5) ドンは婚姻後、実に12ヶ所移住を繰り返した。
- (6) 地主への敬意が測られる場としては、選挙がある。2001年6月、地方選挙が行われたが、ロハス市バラングイトでは、選挙前から確実な票読みが可能であった。バラングイトでは、そのT-帯の土地を所有する者がバラングイ・キャプテンに立候補した。当選は確実視され、事実その通りとなった。イビサンのバラングイでは、地主が自分の推す候補者への協力を居住者に要請したが、この候補者が落選すると、地主は怒り、道端の木々を切り倒し、その居住地に通ずる唯一の道をふさいだという事件が起こった。
- (7) 農地改革とは一般に地主の土地を政府が買収してこれを小作農に売り渡し、自作農を創設する政策をいう。堀(2001)によれば、戦後フィリピンの農地改革法は、これまで4回(1955年、63年、72年、88年)制定されたが、55年と63年に制定された農地改革法は、いずれも議会を構成する地主層の強力な反対によって骨抜きにされ、実質的に農地改革は行われなかった。72年にマルコス大統領が発表した農地改革はイネとトウモロコシに限定されたものであった。2月革命によって圧倒的な国民の支持を得たアキノであったが、地主層出身であったこともあり改革には消極的であった。アキノ政権下の包括的農地改革法(RA.6657)においては、地主保有限度を5haに削減、受益者範囲の拡大、分与された土地保有限度を3haとした。さらに改革推進のための組織改革を行った。しかしまた地主の利益を保護するうえで抜け道となる付帯条件が付けられたため、地主が農地改革を拒否する口実を与える結果にもなった。さらに受益者が証書(CLOA)を手にする手順が複雑(11段階)であるという問題点も指摘されている。地主が農地改革の手続を妨害する目的で小作人を相手に訴訟をおこすケースの頻発している。農地改革省の強制収用という権限は、地主の政治力によって形骸化されているのが現状である。
- (8) タガログ語ではバヤニハン(bayanihan)とよばれマルコス治世下、共同労働の象徴として取りあげられ、さまざまな図案となっているものである。
- (9) ある時、タカスのボイとともに彼の親戚の結婚式に招かれたことがある。まず目を引いたのは8頭という食事に供される豚の数の多さである。この村では村人全員が披露宴にやってくるという。一方、自分の居住地(タカス)では、披露宴の準備に参加しなかった者はそこで食事するのを遠慮するという。そのため披露宴に供される豚は1頭で充分であるというのだ。ここにはディスカルテハンに基

づく不関与という協力関係が成立している。

- (10) 近年フィリピン研究において、コミュニティ概念についての議論が盛んである (J-H Macdonald, Pesigan 2000)。筆者はディスカルテを手掛かりにコミュニティ概念を再構築できるのではないかと考えている。

# 結 論

## 1 考察：リスク、資源、そしてモラル

以上、市場における商い、漁場の利用、居住地の確保という具体的場面のなかで個々人それぞれのリスク対処文脈におけるディスカルテを検討してきた。

市場商い(2章、3章)では、売れ残りを出すというデリカード状況のなかで、ディスカルテは客に慈悲を乞うこと(kalo-oy)(3-2)であったり、魚に小細工したり(3-3)、またパウナウナという制度を逆用して、現金なしで魚を手に入れたりすることであった(2-3-3-2)。資本のある友人にカソシオを申し出ること(2-3-3-1)や、漁場利用(4章、5章)において、漁具の新設にクンパレ関係を利用すること(4-4-2)、一つの生業に信を置かず、水陸両方の仕事を組み合わせること(doble, doble, saphak, saphak)(4-5)、さらに、居住地を守る場(6章)では、地主との個人的関係を利用し居住地を確保すること(6-2-1)、そして立ちのきにあっては、耕しつづけるという名目で居住地の確保すること(6-4-1)、敷地に植樹し、立ちのきをせまる地主に交渉を持ちかけること(6-4-2)などもまた、ディスカルテというべきものといえる。

ここでは以下の3つの観点から、これらディスカルテのそれぞれを整理・検討してゆきたい。

### (1) リスクと実践 - デリカードとディスカルテの弁証法

第2章第1節では現地のデリカードの内容分析を行ったが、「ディスカルテがないこと」が生活上のデリカードであるという回答の存在と「何がデリカードになりうるかは本人のディスカルテ次第である」という彼らの語りに着目した。それは適切な(ここではデリカード状況にたいして)ディスカルテがあれば、それはデリカードにならずに済むということである。「デリカードになりうるかどうかは本人のディスカルテ次第」であり、そのデリカード状況に対して適切な「ディスカルテがないこと」が当人を実際のデリカードに追い込むということである。仮に危険を外部から到来する不可避のものとし、リスクを一定程度制御可能なものとして区分(土方 2002:163)する前提に立てば、ディスカルテが向き合うのはデリカードとしてイメージされる一群のデリカードであり、それをリスクと言い換えることができる。このように調査地においてリスクとはデリカードとディスカルテとの弁証法としてあるといえるだろう。また第2章第2節)でディスカルテがないことは「まだ子供である(bata pa)」、「ばか(buan)」、「怠けもの(matamad)」、「家族が養えない」などを意味し、ディスカルテとは積極的に社会的に期待された行為であることに触れたが、リスクとは、ディスカルテの習得、洗練により、種類またその質が変わりうる動的なものと考えることができよう。

## (2) 資源化と運用からみたディスカルテ

ここでは、ディスカルテの内実をデリカード状況に対して、いったい「何を」・「どうするか」という観点、すなわち資源化とその運用の面から検討してみたい。小林(1995)は縄文文化における資源認知と利用の研究の中で、資源化を「生活の諸般において意識された必要性和、その目的に応じたものを自然の中から選択し、相応の方法手段によって入手し、それを利用に供することである」と定義するが、この文脈では資源を単に自然物に限定しない。デリカード状況に対して、必要性・目的により資源化された「資源」により分類すれば、ディスカルテは、以下 モノ、 コト、 ツナガリ 3つを資源化・運用するものとして類別できるはずである。

表 7-1 資源によるディスカルテの分類

| 資源の種類 | 再資源化される「資源」 | その運用        | 本文事例                    |
|-------|-------------|-------------|-------------------------|
| モノ    | モノ          | 組み合わせてやりくり  | 3-3、4-5、6-4-2           |
| コト    | 状況、制度       | 読み替えて利用     | 2-3-3-2、6-4-1           |
| ツナガリ  | 個人的関係       | 関係をテコに協力を要請 | 3-2、2-3-3-1、4-4-2、6-2-1 |

モノの資源化・運用のディスカルテには、「モノを組み合わせやりくりする」彼らのやり方を意味する。例えば、魚に小細工すること(3-3)、一つの生業に信を置かず水陸両方の仕事を組み合わせること(4-5)、敷地に植樹し、立ちのきをせまる地主に交渉を持ちかけること(6-4-2)が相当する。

また コトの資源化・運用のディスカルテとしては、「状況、制度を読み替えて使う」やり方や、パウナウナという制度を逆用して現金なしで魚を手に入れること(2-3-3-2)、耕しつづけるという名目による居住地の確保(6-4-1)などがあげられる。

一方、ツナガリの資源化・運用のディスカルテとは「個人的関係をその関係をテコに協力を要請する」彼らのやり方を意味し、それには、客に慈悲を乞うこと(3-2)、資本のある友人にカソシオを申し出ること(2-3-3-1)、漁具の新設にクンパレ関係を利用すること(4-4-2)、地主との個人関係を利用し居住地を確保すること(6-2-1)などが相当するといえるだろう。

ディスカルテとは、既存に資源化されているローカルな資源を、生活の必要を充たすべく、再資源化し運用する能力であるといえよう。それはまさに「生きる力」<sup>(1)</sup>というに相応しいものである。

ある時、エントイの妻が、自分の娘婿についてこうことばしたことがある。「あいつ(娘婿)はディスカルテが足りない。ばか者だ」と。ことの次第は以下のようなものであった。

娘の夫は耕作地を所有していない農業雇用労働者である。現在、家を建てようとしているが遅々として進まない。それは家の材料を購入することができないからである。小学校の教員をしている妻の月々はいる給料を待って家を建てている。エントイの妻が批判しているのは、遅々として進まない家の建築に対してではない。娘婿が新築している家のすぐ裏手には、彼の叔父の家があり、敷地には建築材料となる竹がいくらでもある。それをもらい受けることができない彼のディスカルテに対して不満を吐露しているのである。ここで言いたいことは、たとえ叔父・甥関係（それにもとづく行為期待）というようなローカルな資源が存在していてもそれを、資源化し利用すること（個人的関係を利用し、竹を分けてくれるように働きかけること）ができなければ生活の必要を充たすことはできないということである。

セルトー [セルトー1987]はその著書の中で「戦略」と「戦術」を区分し、戦略を「周囲の環境から身を引き離し、一望監視的・鳥瞰的視点から環境を一挙に見通して客体化する主体がその客観化した対象を管理しようとする実践」と定義し、それと対比する形で戦術を「場との密接した関係に取り込まれながら、その中で瞬間的に現れる機会をつかみ、その機会を利用して、その場しのぎ的になんとかうまくやる機略・狡知」と定義している。ディスカルテはセルトーのいう「戦術」に近似したものであることは指摘できる。

ディスカルテの内容は「人それぞれ」であり、「個人的なもの (dipende sa tawo)」と語られるが、運用される資源と運用自体に着目すれば、ディスカルテは単なる「即興」や「創造」ではないことがわかる。それは、既にして資源化されたローカルな資源の再資源化であり、その運用だからである。運用されるローカル資源にはすでにして社会性が刻印されている。

### (3) モラル - 生存の権利と「生きんがためのディスカルテ」

#### 1) 生存の倫理とディスカルテ

ディスカルテには善・悪 (maayo・malain) 二つのディスカルテしか存在しないという。生きんがためのディスカルテ (diskarte para pangabuhì) は、生活上の必要という意味で肯定され、善なるものと考えられている。本論考で検討したデリカードの文脈における生活保全の実践は個人関係をその関係をテコに協力を要請することや状況ないし制度を読み替えて使うこと、モノを組み合わせてやりくりすることなどであったが、それらはいずれも、最低限の生活の必要を満たすという意味で「生きんがためのディスカルテ」であり、「善」であるといわれる。たとえば第3章で検討した魚の飾り付けのディスカルテ(3-2-2)などはごまかし、客との掛け合いのディスカルテでは「だまし (tonto)」の要素が色濃く出るが、これらも「生活の必要」から正当化され、「善」と考えられている。

先に分類した(表 7-1 を参照)、モノの資源化・運用のディスカルテや コトの資源化・運用のディスカルテにおいて、その過剰さは否定的にとらえられることなく、むしろ

「勤勉 (mahugod)」としてとらえられるが、関係の資源化・運用のディスカルテの過剰 (sobra) は、「生活の必要」を基準に「悪」と考えられる。たとえば、第4章で検討したタバの設置 (4-5-3) において、イニヤーノの行為は「過剰」ととらえられ、一方、同時期に隣に設置されたイニヤーノ息子の行為は「しょうがないこと」と理解されたのもこうした事例のひとつである。また、生活の必要を超えた頻繁な要求もまた「過剰」と考えられ、その行為を行うものは「ディスカルテドール (diskartedor)」と呼ばれ、蔑まれることになる。同じ境遇にある者同士 (parehas) におけるのディスカルテにおいては、互酬 (bolos-bolos : かわりばんこの意) が求められる。

## 2) リスク回避システムとディスカルテ

フィリピン・コンテクストの人類学的研究の中ではしばしば、住民間の生存の倫理について指摘される (Szanton 1972, Kerkvliet 1990, Pinches 1992)。1960年代後半に、パナイ島エスタンシャで市場商人の調査を行ったザントンは自著「A Right to survive」(Blac-Szanton 1972: 129) のなかで「人はみな家族を養い、生存するための権利を有している。その権利は他のすべての経済的、合法的配慮を横断する」と指摘している。その彼女は、市場において、スキ関係、(売り手と買い手間および商人間の) 共感 (compassion)、早いもの原則 (調査地におけるパウナウナに相当する) 分配システム (調査地におけるカソシオ、パンティンなど) に、零細な市場商人の生存保障を見出している。それらはみなリスク回避システムとして捉えられる、制度、規範である。しかし、ここでは、制度・規範をも資源化し運用してゆく生活術の次元への目配せを欠いている。本論考の眼目は、ローカルなリスク対処実践の中に、彼らの生活保全メカニズムを見出すことであった。彼女の論に対比させ本論考の結論を示すとすれば、「制度・規範が直接的に生存を保障するのではなく、人々が互いのディスカルテ (規範・制度でさえも再資源化され運用される) を尊重しあう、その中でそれぞれの生活保全が達成されてゆく」ということであろう。

## (4) 考察のまとめ

以上の考察をまとめておこう。ここではリスク研究を下敷きに、デリカードとディスカルテをとりあげ、ローカルなリスク・対処の枠組み理解に供し、生活保全のメカニズムの解明を目指した。ここでは、リスクはデリカードとディスカルテの弁証法あるとしてある。また、ディスカルテという実践は、生活上の必要・目的に即したローカル資源の再資源化であり、それは単に構造に一方的に規定される規範的行為でもなく、また全能なる能動性を備えた主体行為でもない。それはいわば「生活術」といった次元にある。現地においては、単に法的・慣習的制度が直接的に生存を保障するのではなく、そこには生活術という住民のディスカルテの次元が存在している、そこでは人々が互いの生きんがためのディスカルテ (diskarte para pangabuhi) を尊重しあうかたちで生活が保障されるという、生活保全のメカニズムがみいだせるのだ。

## 2 結論の含意と今後の課題

### (1) 結論の含意

生活の保全を理解しようと指向するリスク研究において必要とされるだろう視角とその可能性は、リスク認識、あるいはリスク対処行動の裏面に現れる、(あるいは図と地の転換により現れる)守られるべき「生活価値」<sup>(2)</sup>をいかに顕在化してゆくかにあるだろうと考える。なぜなら、リスク認識、対処という局面は、リスクのグローバル化、リスクの潜在化の進行する世界と生活の場の界面において現れる生活価値をめぐる受容と抵抗の微細なポリティクス<sup>(3)</sup>の場と考えることができるからである。生活保全理解指向のリスク研究という営みは、まさに、さまざまなリスクに取り囲まれ生きるわれわれ自身の生活指針(生活価値)の自覚化という運動の実践としても必要な課題になるのではないだろうかと考えている。

### (2) 今後の課題

以上、本研究では、住民を主体としたリスク研究を通して彼らの生活保全メカニズムを考えてきたが、今後に残された具体的な課題を以下に示しておきたい。

本論ではリスク認識・対処のローカルな枠組みを用いて、タカスに居住する幾人かの登場人物を対象として論じてきたが、個人のライフコースおよびコーホート集団に焦点をあてて、個々人の人生のなかでリスク・生活保全の彼らのやり方を明らかにすることが必要だと考えている。

個人(ここでは世帯主夫婦)に焦点をあてる一方で、もうひとつの焦点はローカルな社会的単位としての *pamilya* の働きに注目すべきこと。とくに個人を包摂する *pamilya* 内でのリスクを考察対象として取り上げることが必要であろう。

生活保全にあたってディスカルテによっては対処できないデリカードも当然あるわけで、それに対して人々はどのように対応しているのかを明らかにすることが求められる。

また、ディスカルテとジェンダーのかかわりについても、今後考察すべき大きな課題のひとつである。

さらに、研究のこれからの展開として「生活保全」概念の一層の精緻化とともに、「客体化されたリスクとリスクをめぐるポリティクスの側面」<sup>(4)</sup>すなわちリスク定義をめぐる権力の問題をローカルな文脈において考察してゆくことも今後の課題としたい。具体的には、以下のテーマを考えている。

リスクの定義をめぐるポリティクス：マングローブ汽水域における漁民、行政、NGO の認識の落差と関係構造

東南アジア各地のマングローブ汽水域は 80 年代日本のエビ「需要」による養殖池の大

規模開発という大きな変化を経験している。調査対象となった地元住民らは、この開発による環境の変化のもとで小型定置網漁、可動式漁網漁に従事しているが、ローカルな人間関係とモラルのもとで漁獲過剰と土壌堆積による漁場環境の悪化に陥っている。近年、“Save the river！”の掛け声のもと町行政、NGO が河川の環境改善に乗り出してきたが、それぞれの当事者による河川状況のリスク認識は異なっている。ここではそれぞれのリスク定義をめぐるポリティクスを考察の焦点としたいと考えている。

その他に、

海外出稼ぎ者の帰国問題とそれによってひきおこされる地域内コンフリクト 土地の立ちのき問題をめぐって

地元住民が居住地立ち退きのリスクに直面する背景の一つに、海外出稼ぎ者の帰国の問題が見出せる。今日取りざたされている短期雇用出稼ぎ者のグローバル化の影で、1970年代、欧米への移住者した専門職者の帰国問題がある。帰国後の土地取得をめぐるコンフリクトをローカルなコンテキストの中で検討したい。

開発ディスコースにおけるコミュニティ概念の検討 日常実践とコミュニティ

1998年のヨーロッパ・フィリピン研究学会での議論を皮切りに、フィリピン社会におけるコミュニティ概念の再検討が盛んに論じられている。こうした論点に対して私は本論文の中で検討した、住民の日常実践から立ち上がるエミクナなコミュニティ概念を手がかりに、コミュニティ・デベロプメントという開発ディスコースの歴史的検討をふまえ、両者の齟齬とその政治性を検討していきたいと考えている。

(註)

(1) 本研究は「生きる力」というべき彼らのディスカルテに瞠目しつつも、決してそれを賛美するものではない。4章の漁場環境の悪化や6章で指摘したように、居住環境の不安定さを招いているのも彼らのディスカルテ自体だからである。しかし、本論の3つの場面でみたように、彼らはその社会的配置によって、資源化し運用できるローカルな資源は限定されてくる。問われるべきはそのローカルな資源がいかなる条件によって規定されてくるかである。本研究ではディスカルテを駆使し、生活保全を図ろうとする彼らの試行錯誤を記述し、考察したかった。

(2) 本研究研究においては、「ディスカルテハン(ディスカルテを働かせる場)」を確保することが、彼らの生活価値のひとつであることを示した。



イビスン市場正面入口



市場前の船着場



鮮魚売り場



船着き場での仕入れ



バングロスを筒う男性商人



タヨックを小袋に詰めるニニン



売り買い



昼食をとる鮮魚商人たち

第1場面 市場で稼ぐ 関連写真集



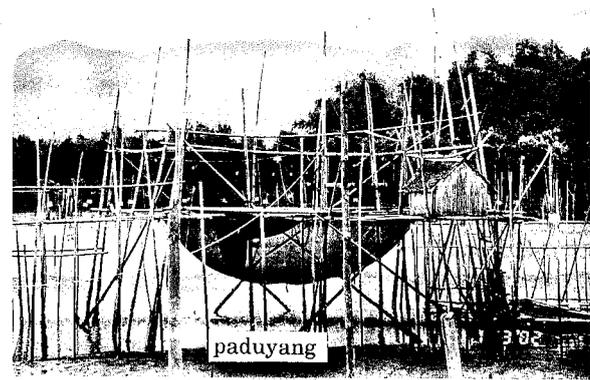
タラバハン全景



干潮時のタラバハン



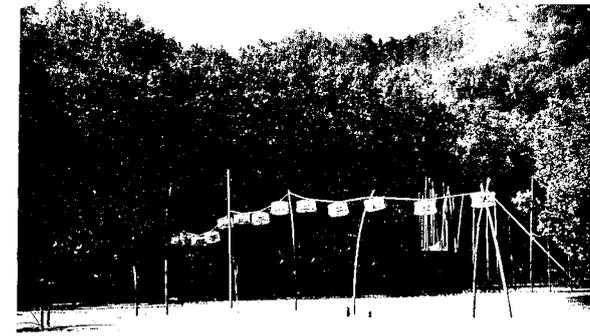
カキの収穫



paduyang



taboy 漁 (漁獲はハゼ類)



timing



これから漁場に向かうホッドホッド漁師



カキ殻で傷ついた足

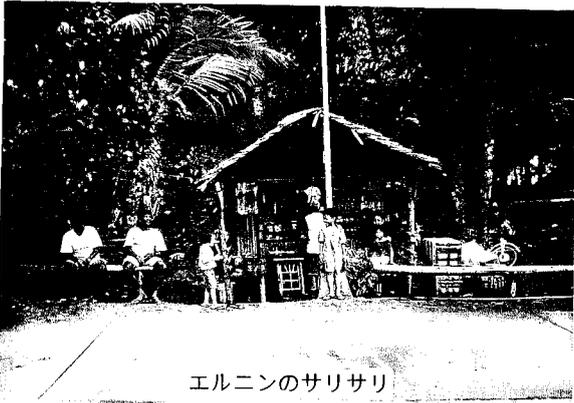
第2場面 漁場で稼ぐ関連 写真集



ニニのサリサリの前でくつろぐ人々



エルニンのサリサリ前



エルニンのサリサリ



店番をするニニ



木陰でヤシ酒 (tuba) を飲む



聖週間の山崎の地元の有志による



オタイの娘プリンセスの洗礼式  
取り囲む男女はクンパレ・クマレ



聖週間、地元の有志によるキリスト受難劇

第3場面 居住地を守る 関連写真集

## 用 語 集

|   |                 |   |
|---|-----------------|---|
| アシット  | assist          | 売り子   |
| アタド   | atado           | 山、束   |
| アモ  | amo             | 親方  |
| アルサダ  | alsada          | 商人が商品を借り、販売後に精算する方式                             |
| アヨ  | ayu             | 値切り   |
| イダ <sup>ダ</sup> アン                              | isdaan          | 鮮魚売場  |
| イビス   | ebis            | 小魚の総称、ただし海水魚のみ                                  |
| イラ <sup>ド</sup> ール                              | irador          | パッカー  |
| オタン   | utang           | 負債、信用貸し   |
| カソシオ  | kasosyo         | 共同仕入れであり出資の割合に関係なく儲けを折半する方式                     |
| カ <sup>レ</sup> ックス                              | caltex          | プラスチック容器、容量は1リットル、0.8キロ                         |
| カ <sup>ガ</sup> ドール                              | kargador        | 荷物運搬人   |
| ガ <sup>ン</sup> ガン                               | gantagan        | ブリキの円筒形の缶、容量は3リットル、2.4キロ                        |
| ギナンシャ   | ginansya        | 儲け  |
| キニロ   | kinilo          | キロ  |
| ク <sup>パ</sup> レ/ク <sup>マ</sup> レ               | kumpare/kumare  | 子どもを媒介とした実父母と教父母の儀礼的兄弟関係のことをいう。                 |
| コン <sup>ソ</sup> ドール                             | konsomedor      | 消費者   |
| コン <sup>プ</sup> ラ <sup>ド</sup> ール               | konmprador      | 卸売商   |
| サリサリ  | sarisari        | 小型雑貨屋 混ざり合っている状態をいう。                            |
| サカダ   | sakada          | 農園労働者   |
| ジブニー  | jeep            | 米軍払い下げのジープを改造した25人乗りの自動車                        |
| スタン <sup>バ</sup> ヤン                             | stand bayan     | スタンバイに場所を表す an が付いたもの、待機場の意                     |
| チェス   | ches            | 発泡スチロールの箱で四面を竹でほきょうしたもの。氷を詰め、魚の保存に利用される。容量は24キロ |
| タパンコ  | tapangko        | セメント製の販台  |
| タラバハン   | talabahan       | カキ養殖場   |
| ディ <sup>ス</sup> パ <sup>ッ</sup> チャー              | dispatyer       | セリ人   |
| ティ <sup>ン</sup> ダ <sup>ガ</sup> ア <sup>ド</sup> ラ | tinda nga adlaw | 市日、その反対は wala tinda 通常日                         |
| テクレース   | tekrace         | 竹で編んだ籠、容量は50~60キロ                               |

|         |               |   |
|---------|---------------|---|
| ダヨック    | dayok         | 小エビに塩と紫色の着色料を添加し発酵させた魚<br>醤の一種。調味料として利用される。 |
| トライカッド  | tricykad      | 荷物、人を運搬する三輪自転車                              |
| トライクル   | tricycle      | 荷物、人を運搬する三輪バイク                              |
| パアマン    | paaman        | おまけ   |
| パウナウナ   | paunauna      | 早い者勝ち                                       |
| バソ      | baso          | コップ   |
| パトロイ    | patoloy       | 刺し網   |
| パパッグ    | papag         | 竹製の販台                                       |
| バナラ     | banyela       | 金属製のたらい、容量は 40 キロ                           |
| バルカダ    | barkada       | 徒党集団  |
| バルデー    | barde         | バケツ、容量は 15 リットル、12 キロ                       |
| パンパン    | pangpang      | 船着き場  |
| バンワ     | ban-wa        | 中心市街地                                       |
| ビンタ     | binta         | 売り上げ  |
| フィエスタ   | pista         | カトリック教会の守護聖人の祭り。イビサンでは9<br>月の第一週の3日間        |
| プロパー    | proper        | 市街地   |
| ポロック    | purok         | ポブラシオンの中の行政の下位単位                            |
| マノン/マナン | manong/manang | 目上の人に対する敬称、おじさん、おばさん                        |
| マノガタド   | manogatado    | 小売商   |
| マノグビヤヘ  | manogbiyahe   | 巡回的商人                                       |
| マノグバカール | manogbakal    | 買う人の意                                       |

## 引用・参考文献

赤嶺淳

- 2001「東南アジアの海域世界の資源利用 - 「変化」という持続性」『社会学雑誌』18 : 42-56

秋道智彌

- 1994「海の資源はだれのものか」福井勝義編『講座地球に生きる 3 資源への文化適応』雄山閣出版 : 219-242
- 1997「なわばりと共有思想 - 1890 年代日本の内水面における水産資源の変動と環境問題」『環境社会学研究』3 : 86-99

東賢太郎

- 2002「生活の中のウィッチクラフト、あるいはウィッチとしての生活 - フィリピン・パナイ島カスピ州L村におけるアスワンの事例から」『生活論叢』7 : 45-55
- 2002「妖術と多元的現実 - フィリピン・パナイ島カスピ州L村のある妖術師の場合」『文化人類学 第3巻』早稲田大学
- 2003「呪医の「病治し」 - フィリピン・パナイ島カスピ州のある女性呪医の事例報告」『名古屋大学人文科学研究』32

阿部宗明

- 1963『原色魚類検索図鑑 1』北隆館

有賀喜佐衛門

- 1966『有賀喜佐衛門著作集 』未来社
- 1967『有賀喜佐衛門著作集 』未来社

綾部恒雄編

- 2003『文化人類学のフロンティア』ミネルヴァ書房

五十嵐忠孝

- 1978「菜園の生態学-ジャワ島の農業生態系におけるその役割」『からだの科学』83

池端雪浦

- 1971「東南アジア基層社会の一形態」『東洋文化研究所紀要』54、東京大学東洋文化研究所
- 1989「フィリピン = カトリック社会の歴史的形成をめぐって」『南太平洋海域調査研究報告』17 : 5-14

石毛直道、ケネス・ラドル

- 1990『魚醬とナレズシの研究 モンスーン・アジアの食事文化』岩波書店

石森秀三

- 1985 『危機のコスモロジー - ミクロネシアの人々と神々』 福武書店
- 井上真
- 2001 「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」 井上 真・宮内泰介 『コモンズの社会学』 新曜社：1-29
- 牛島巖
- 1990 「スキ（得意客）関係覚書」 『族』 14
- 1993 「ピサヤ海・バンタイアン島の漁業と収益分配方式」 『族』 22
- 1996 「バイラテラル社会における家系集団の生成：フィリピン・ピサヤ地方の諸職家族」 『族』 27
- 梅原弘光
- 1992 「パナイ島の不在村小地主制と村落」 『フィリピンの農村』 古今書院：276-318
- ウルリッヒ・ベック
- 1986 『危険社会 新しい近代への道』（東廉、伊藤美登里訳）法政大学出版局
- 2003 『世界リスク社会論』（島村賢一訳）平凡社
- エリザベス・ウイ・エヴィオータ
- 2000 『ジェンダーの政治経済学 - フィリピンにおける女性と性的分業』（佐竹眞明、稲垣紀代訳）明石書房
- 小田亮
- 1996 「ポストモダン人類学の代価：プリコルールの戦術と生活の場の人類学」 『国立民族学博物館研究報告』 21（4）：807-875
- 1996 「しなやかな野生の知：構造主義と非同一性の思考」 『思想化される周辺世界』 岩波講座 文化人類学第12巻、岩波書店：97-128
- 大石良春
- 1993 「モラルエコノミーと農民抵抗」 『第三世界のプロブレマティーク』 論創社
- 大野拓司、寺田勇文編
- 2001 「現代フィリピンを知るための60章」 明石書店
- 大村敬一
- 1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ：‘イヌイトのやり方’の‘戦術’」 『民族学研究』 63（2）：160-170
- 小川英文
- 1999 「東南アジア、その発掘の歴史と考古学の課題」 吉村作治編 『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』 平凡社：75-89
- 梶原景昭、宮坂敬造
- 1983 「セブ市のサント・ニーニョ信仰 - フィリピン地方都市研究の可能性」 『民族学研究』 48（3）：379-386
- 嘉田由紀子

1997 「生活実践からつむぎ出される重層的の所有観 - 余呉湖周辺の共有資源の利用と所有」『環境社会学研究』3:72-85

1997 「村落社会のもつ共有資源管理機能 - その東アジア的生態構造とのかかわりで」『シンポジウム 東アジア社会の構造と変動 - 伝統・変革・課題 - 報告集』:41-62

加藤真

1999 『日本の渚 失われゆく海辺の自然』岩波書店

門野泉

1992 「知恵」渡部昇一編 『ことばコンセプト事典』第一法規出版株式会社:1082-1089

金森修、入来篤史、可知直毅、鳥海光弘、和達三樹

2002 「討論 リスク論は社会のなかでどのように使われているのか」『科学』72(10):1022-1029

カルロス・ルビオ、上田博人編

1992 『新スペイン語辞典』研究社

川田牧人

1990 「ビサヤ地方漁業共同体調査研究の一視点」『族』14

1994 "Public Market in Bantayan: Social Ties in Local Economic Activities" "Fishers of The Visayas", CSSP University of The Philippines

2000 「書評 Fenella Cannell、Power and Intimacy in the Christian Philippines. Cambridge University Press」『アジア経済』41(5)アジア経済研究所

2002 「聖者の行進：聖週間儀礼から見たビサヤ社会」『東南アジアのキリスト教』めこん

2003 「祈りと祀りの日常知」九州大学出版局

河野博編

2001 『東南アジア市場図鑑 - 魚介編』弘文堂

ギデンス・アンソニー

1976 New Rules of Sociological Method, Hutchinson

1993 『近代はいかなる時代か？ - モダニティの帰結』（松雄精文、小幡正敏訳）而立書房

2000 『社会学の新しい方法基準 [第二版] - 理解社会学の共感的批判』（松尾精文、藤井達也、小幡正敏訳）而立書房

ギアーツ・クリフォード

2001 『インボリューション - 内に向かう発展』（池本幸生訳）NTT出版

ギアーツ H. 著 戸谷修・大鐘武訳

1980 『ジャワの家族』 みすず書房 ( Geertz, H. 1961 The Javanese Family: A Study Kinship and Socialization. The Free Press of Glencoe )

菊池靖

1980 『フィリピンの社会人類学』 弘文堂

北原淳

1996 『共同体の思想』 世界思想社

北原淳編

1989 『東南アジアの社会学：家族・農村・都市』 世界思想社

鬼頭秀一

2002 「リスクと社会的リンク」 『科学』 72 ( 10 ) : 1030-1035

蔵持不三也

1991 『祝祭の構図 - ブリュージュル・カルナヴァル・民衆文化』 ありな書房

小林清治

1998 「自然の社会化と環境リスク - 環境リスク論の社会的位相」 『論集』 19 : 159-172

小林孝広

1998 「商いのディスクール - フィリピンと日本の事例」 早稲田大学大学院人間科学研究科生命科学専攻 ( 文化生態学 ) 修士論文

1999 「市場商人の生計戦略をめぐる予備的考察 - パナイ島カピス州イビサン町の町場鮮魚商人の事例」 『族』 31、筑波大学 歴史学系民族学研究室 : 18-35

小林孝広、矢野敬生

2000 「海と陸のはざままで生きるサデ網漁民の生計戦略 - フィリピン・パナイ島イビサン川河口域の事例 - 」 『ヒューマンサイエンスリサーチ』 9 : 157-175

小松丈晃

2003 『リスク論のルーマン』 勁草書房

桜井厚

1988 「有賀理論の方法的基礎と生活史研究」 柿崎京一・黒崎八洲次良、間宏編 『有賀喜佐衛門研究 人間・思想・学問』 御茶の水書房

佐竹眞明

1988 「市場における人間関係と市場の経済的機能」 『アジア経済』 5

サーリンズ・マーシャル

1984 『石器時代の経済学』 法政大学出版局

清水展

1990 「子供をめぐる家族と社会 - フィリピン理解のための試論」 『社会科学論集』 30 : 69-109

1991 『文化のなかの政治：フィリピン「二月革命」の物語』 弘文堂

- 1996「存亡の危機から民族の新生へ - ピナトゥボ大噴火とアニタの生存戦略」『民族学研究』61(2): 277-294
- スコット・ジェームズ・C.  
1999『モーラル・エコノミー - 東南アジアの農民反乱と生存維持』(高橋 彰訳) 勁草書房
- 白石昌也  
1983「東南アジア農村社会論の最近の動向をめぐって」『東洋文化』64: 119-152
- 菅豊  
2000「在地リスク回避論」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』1: 29-35
- 杉島敬志編  
2001『人類学的実践の再構築 - ポストコロニアル転回以後』世界思想社
- 鈴木静夫編  
1992『フィリピンの事典』同朋舎出版
- 鈴木伸隆  
2001「フィリピン・ミンダナオ島における近代学校教育 - 新しい知識の専門家としての「プロフェッショナル」をめぐって」『歴史人類』29: 149-174
- 須藤健一編  
2000『フィールドワークを歩く - 文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院
- 関一敏  
1994「宗教人類学の視点と方法」佐々木宏幹・村武精一編『宗教人類学』新曜社  
1997「キリスト教世界の祈りと呪い」『民族学研究』62(3): 402-407
- 関恒樹  
2003「フィリピン・ビザヤ民俗社会における力・主体・アイデンティティに関する予備的考察 - dungan の観念について」『アジア社会文化研究』4: 105-121
- 関本照夫  
1980「二者関係と経済取引 - 中部ジャワ村落経済生活の研究」『国立民族学博物館研究報告』5(2): 376-408  
1991「二者関係ネットワーク論再考 - 東南アジアの事例」『中国 社会と文化』  
1992「ジャワ人のヒエラルキーと自由」『アジアの文化と社会1』汲古書院
- 高橋彰  
1969「バリオ=カトリナン: フィリピンの米作農村」大野盛雄編『アジアの農村』東京大学出版会  
1972「フィリピンの価値体系」『東南アジアの価値体系4』現代アジア出版会
- 滝川勉  
1995「フィリピンの農林漁業開発と環境問題 - 自然と人間の共生と農林漁業の視点から」『開発学研究』5-2: 6-13

田中耕司

1999「海と陸のはざまに生きる」秋道智彌編『講座人間と環境 第1巻 自然はだれのものか』昭和堂：112-135

田辺繁治

2003『生き方の人類学 - 実践とは何か』講談社

田辺繁治、松田素二編

2002『日常実践のエスノグラフィ - 語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社

玉置泰明

1982「「フィリピン低地社会」研究序説」『民族学研究』47-3

1989「社会関係としてのキリスト教：フィリピン低地農村における世俗化と変容」『南方文化』16

田和正孝

1981「パナイ島、カピス州サピアン」『日本・フィリピン内海地域の比較調査報告』広島修道大学

1981「パナイ島北部、サピアンにおける沿岸漁業の漁具・漁法」広島修道大学フィリピン調査プロジェクト編『日本・フィリピン内海地域の比較調査報告 - 特に広島県とパナイ島を中心に』広島修道大学総合研究所

1997「感潮河川の漁具・漁法 フィリピン・パナイ島サピアン」『漁場利用の生態 文化地理学的考察』九州大学出版会

1997『漁場利用の生態』九州大学出版会

2000「漁業というフィールドからの発信 - 技術の選択と女性労働」乾原 正編『関西学院創立111周年文学部記念論文集』関西学院大学文学部：45-63

2002「フィリピン、パナイ島サピアンにおける沿岸漁業の変容」『関西学院史学』

近森正

1987「生計戦略としてのセトゥルメント・パターン - レンネル島における集落の変化 - 」『史学』54(2)(3)：1-40

坪内良博

1993「マレー農村における屋敷地共住集団 - 20年間における変化とその意味 - 」『東南アジア研究』31(1)

鶴見良行

1980『アジアと日本人』晶文社

1981『アジアを知るために』筑摩書房

1981『マラッカ物語』時事通信社

1982『アジアはなぜ貧しいのか』

- 1982 『バナナと日本人 - フィリピン農園と食卓の間』岩波新書  
 1986 『大地と海と人間』筑摩書房、  
 1986 『アジアの歩き方』筑摩書房  
 1990 『辺境学ノート』めこん  
 1991 『アラフラ航海記 - 木造船でゆくインドネシア 3000 キロ』徳間書店  
 1991 『道のアジア史 - モノ・ヒト。文化の交流』同文館  
 1992 『エビの向こうにアジアが見える』学陽書房  
 1994 『マングローブの沼地で - 東南アジア島嶼文化論への誘い』朝日選書  
 1995 『コモンスの海』学陽書房  
 1995 『東南アジアを知る』岩波新書  
 1999 『鶴見良行著作集7 マングローブ』みすず書房

寺田勇文

- 1983 「フィリピン南タガログ地方農村部の宗教生活：カトリックの年中行事を中心に」『南海研紀要』4(1)  
 2002 『東南アジアのキリスト教』めこん

土佐弘之

- 2003 『安全保障という逆説』青土社

ド・セルトー

- 1987 『日常実践のポイエティック』(山田登世子訳)国文社

鳥飼行博

- 1991 「インカム・シェアリング：フィリピンの漁業慣行についての経済分析」『行動科学研究』36：83-94

鳥越皓之

- 1997 「生活環境主義の基本論理」「環境権と所有論」『環境社会学の理論と実践』有斐閣  
 2002 「実践編 - 身近で切実な疑問に答える」『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会：191-228

永井博子

- 1992 「フィリピン、アンティケ州の市場」『史苑』53(1)

長坂格

- 1998 「フィリピンにおけるバランガイの形成 - フィリピン地域社会研究の一視点」『社会学雑誌』15：88-106

中西徹

- 1998 「フィリピンにおける家族・親族とコミュニティ」『東アジアの人と社会 - 「家族」から探るその価値観』NIRA 政策研究 11(8)：25-29  
 1991 「スラムの都市のインフォーマル部門」『スラムの経済学 - フィリピンにお

ける都市インフォーマル部門』東京大学出版会

中村洋子

1989 「『問われる日本の海外援助』 - 東南アジア漁業開発センターの場合」『愛知県立芸術大学紀要』18 : 65-87

西村知

1994 「フィリピン・西ビザヤ地方稲作村落の農業発展 - イロイロ州ポトタン村の事例を中心に」『経済学研究』60(1)(2): 107-124

P.L. バーガー、H. ケルナー

1989 『社会学再考』(森下伸也訳)新曜社

長谷川善計・江守五夫・肥前栄一編

1996 『家・屋敷地と霊・呪術』早稲田大学出版部

原洋之介

1982 「東南アジア社会論」『東洋文化』63

1985 『クリフォード・ギアツの経済学』Libro

1974 「村落構造の経済理論」『アジア研究』21(2)

原島博

1998 「フィリピンの社会保障制度の現状と課題」『海外社会保障情報』123 : 55-70

林真理

2002 「科学論から見た「リスク」概念」『情況』3(1): 42-51

ピーター・L. バーガー、トーマス・ルックマン

1977 『日常世界の構成 - アイデンティティと社会の弁証法』新曜社

土方透

2002 「リスク処理社会」土方透、アルミン・ナセヒ編著『リスク』新泉社

広田すみれ・増田真也・坂上貴之編

2002 『心理学が描くリスクの世界 - 行動的意志決定入門』慶應義塾大学出版会

福島真人

2001 「状況・行為・内省」『実践のエスノグラフィ』茂呂雄二編 金子書房

フランソワ・ピヨン

1984 『経済人類学の現在』法政大学出版局

堀芳枝

2001 「フィリピン農地改革における政府、NGO、住民組織の対立と協調 ラグナ州カランバ町マバト村を事例として」『アジア研究』47(3)

前田昌調、福所邦彦

2001 「マングローブ汽水域における魚介類生産過程の解明」『研究ジャーナル』24(12): 26-32

松田素二

- 1989 「語りの意味から操りの力へ」田邊繁治編『人類学的認識の冒険』同文館  
 1996 「人類学の危機」と戦術的リアリズムの可能性」『社会人類学年報』22：23-48  
 1999 『抵抗する都市』岩波書店  
 2002 「個人性の社会理論序説 - 非西欧的セルフ像をめぐって」『フォーラム現代社会学』1：33-42

宮内泰介

- 2001 「コモンズの社会学 - 自然環境の所有・利用・管理をめぐって」新曜社

宮坂敬造

- 1984 「フィリピン地方都市における呪医の儀礼 - 幸運招来儀礼と建築儀礼の記述」『南方文化』：27-48

村井吉敬

- 1973 「インドネシアの民衆生業」『アジア研究』24（4）  
 1988 『エビと日本人』岩波新書

リップスキ・ジョン・M.

- 1995 「フィリピンのスペイン語」(板東省次訳)『Cosmica』25：137-154

レヴィ＝ストロース

- 1976 『野生の思考』(大橋保夫訳)みすず書房

ロス・ジョン・F.

- 2001 『リスクセンス』(佐光紀子訳)集英社

矢野敬生

- 1990 「海の民の生活とスポーツ」『体育の科学』40（7）  
 1994 The characteristics of fisherfolk culture in Panay: From the viewpoint of fishing ground exploitation, Fishers of the Visayas. Ushijima and Zayas eds., CSP publications  
 1992 「フィリピン・パナイ島における漁労文化類型」『族』18 筑波大学歴史人類学系民族学研究室

山口節郎

- 2002 『現代社会のゆらぎとリスク』新曜社

吉田よし子・菊池祐子編

- 2001 『東南アジア市場図鑑 - 植物編』弘文堂

脇田健一

- 1989 「技術革新と伝統的漁場管理」『社会学評論』159：325-339  
 1994 「湖岸漁師の判断力と戦略」『試みとしての環境民俗学』雄山閣出版

Barrett B. David 編

- 1986 『世界キリスト教百科事典』教文館

Bourdieu, Pierre

- 1988 『実践感覚』1 (今村仁司・港道隆訳) みすず書房  
 1990 『実践感覚』2 (福井憲彦・塚原史・港道隆訳) みすず書房

A. Huijsman

- 1986 Choice and uncertainty in a semi-subsistence economy

Alexander, J.

- 1987 Trade, Traders, and Trading in rural Java, Singapore, Oxford University Press

Bartlett, P. F.

- 1980 Adaptive strategies in peasant agricultural production, Ann. Rev. Anthropol, 9: 545-73

Berner, E

- 1997 Defending a Place in the City, Ateneo de Manila University Press

Boholm, A.

- 1996 Risk perception and social anthropology: critique of cultural theory, Ethnos. 61 (1)(2): 64-84.

Bourdieu, Pierre

- 1977 Outline of a Theory of Practice, Cambridge, Cambridge University Press

Brooks, R.L.

- 1990 Responses to risk and uncertainty among southern Plains villagers: the Washita river phase, Bulletin of the Oklahoma Anthropological Society. 39 : 189-202

Cannell, F.

- 1999 Power and Intimacy in the Christian Philippines, Ateneo de Manila University Press

Caplan, Pat eds.

- 2000 Risk Revisited, Pluto Press

Cashdan, E. A.

- 1985 Coping with risk: reciprocity among the Basarwa of northern Botswana Man. 20 : 454-74

Christensen, H. and Mertz, O.

- 1993 The risk avoidance strategy of traditional shifting cultivation in Borneo, Sarawak Museum journal. 44 (65): 1-18

Cuyos, N.A and Spoehr

- 1976 The Fish Supply of Cebu city: A Study of two wholesale Markets,

Philippine Quarterly of Culture and Society 4

Clarke, L.

- 1993 Social organization and risk: some current controversies, Annual Review of Sociology, vol. 19 : 375-99.

Cove, J.J.

- 1968 Risk-taking by Fortune deepsea trawler captains: differences in strategies of maximization [Newfoundland] [bibliogr.] Northwest Anthropological Research Notes. 2(2):9-108

Davis, W.G

- 1973 Social relations in Philippine Market: Self-Interest and Subjectivity , Berkeley, University of California Press

Dewey, A.

- 1962 Peasant Marketing in Java, N.Y. Free Press

Douglas, M.

- 1982 Introduction to grid/ group analysis, Essays in the sociology of perception

Dumon , Jean-Paul

- 1992 Visayan Vignettes , Ateneo de Manila University Press

Douglas, M. and Wildavsky, A.

- 1982 Risk and Culture: an Essay on the Selection of Technical and Environmental Dangers, Berkeley, University of California Press.

Eder , James F.

- 2000 A Generation Lter , Ateneo de Manila University Press

Enriquez, Virgilio G.

- 1986 Kapwa ; a core concept in Filipino social psychology, ed. Virgilio G. Enriquez (ed.), Philippine world view. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Evers, H.D. and Schrader, H

- 1993 The Moral Economy of Trad, Routledge

Geertz, C.

- 1963 Peddlers and Princes, University of Chicago Press

Gropper, R. C.

- 1991 Hedging the bets: risk reduction among the 'Rom' Gypsies, Journal of the Gypsy Lore Society, 5(1)1: 45-59.

IBON

- 1999 Fact and Figure: 22(21) 22( 9)
- Ileto, Reynaldo Clemena  
1979 Pasyon and Revolution. Quezon City, Ateneo de Manila University Press
- Illio, J.F. and Polo, J.B  
1990 Fishers, Traders, Farmers, Waves
- Jocano, F. Landa  
1983 The Hiligaynon: An Ethnography of Family and Community, Asian Center, Quezon, UP Press
- Kerkvliet, Benedict J. Tria  
1991 Everyday Politics in the Philippines, New Day Publishers, Quezon City
- Kobayashi, Takahiro  
2000 Selling fish in the market of Capiz Ushijima, I & Zayas, C.E eds. Bisayan Knowledge, Movement & Identity, Quezon, Third World Studies Center UP: 203-221
- Kottak, C.P. and Costa, A.C.G.  
1993 Ecological awareness, environmentalist action, and international conservation strategy [Brazil and Madagascar] Human organization. 52(4): 335-43
- Kuchikura, Y.  
1997 Inter-household food sharing in a foothill community in Papua new Guinea: an adaptive mechanism to risk in food supply, Man and culture in Oceania, 13:57-82
- Lupton, D.  
1993 Risk as moral danger: the social and political functions of risk discourse in public health, International Journal of Health Services, vol. 23, no. 3:425-35.0
- Lynch, Frank S.J  
1979 Big and Little People: Social Class in the Rural Philippines. In Mary Hollnsteiner (ed.) Society Culture and the Filipino; 44-48, Quezon City; IPC. Ateneo de Manila University Press.
- Macdonald, Charles J-H and Pesigan, Guillermo M. eds  
2000 Old Ties and New Solidarities, Ateneo de Manila University Press
- Mai, u and Buchholt, H.  
1987 Peasant Peddlers and Professional Traders
- Malaby, T. M.  
1999 Fateful misconceptions: rethinking paradigms of chance among gamblers

in Crete [in special issue ' The labours of learning: education in the postcolony ' ] Social analysis. 43(1): 141-65.

Municipality of the Ivisan

1994 Municipal Profile ,Municipality of the Ivisan

Oliver-Smith, A.

1996 Anthropological research on hazards and disasters, Annu. Rev. Anthropol, 25: 303-28.

Ortner, Sherry B.

1984 Theory in Anthropology since the Sixties, Comparative Studies in Society and History, 26(1): 126-165

Oxford University Press., Simpson, J. A. and Weiner, E.S.c.

1989 The Oxford English Dictionary, Oxford University Press.

Pertierra,Raul

1988 Religion,Politicss and Rationality, QezonCity, Ateneo de Manila University Press

Pinches, Michael

1991 The Working Class Experience of Shame, Inequality, and People Power. In Kerkvliet, Benedict and Resil Mojares (eds.) From Marcos to Aquino: Local Perspectives on Political Transition in the Philippines: 166-186. Quezon City, Ateneo de manila University Press.

Poggie\_jr., J.J. and Gersuny, C.

1972 Risk and ritual: an interpretation of fishermen ' s folklore in a New England community [illus.], Journal of American folklore. 85(335): 66-72.

Rafael,Vincente

1988 Contracting Colonialism, Ithaca, Cornell University Press

Smith,I.R.,Puzon,M.Y.&Vidal-Libunao,C.N.

1980 Philippine Municipal Fisheries:A Review of Resources, Technology and Socioeconomics, ICLARM Studies and Reviews 4 International Center for Living Aquatic Resources Management.

Smith,I.R.& Mines,A.N.,eds

1982 Small-scale fisheries of San Miguel Bay, Philippines:economic of production and marketing. ICLARM Technical Report 8. The United Nations University

Spoehr,A

1980 Protein from The Sea, Ethnology Monographs No.3 Depart of

Anthropology University of Pittsburgh

Szanton, L. David

1971 Estancia in Transition -Economic Growth in a Rural Philippine Community,  
IPC, Ateneo de Manila University

Szanton, M.C.

1979 The Use of Compadrazgo: Views from a Philippine Town

1972 A Right to Survive: Subsistence Marketing in a Lowland Philippine Town,  
The Pennsylvania State University

Umali, A.F.

1950 Guide to the Classification of Fishing Gear in the Philippines, Research  
Report 17, United States Government of the Interior Fish and Wildlife  
Service

Veloro, E. Carmelia

1994 Suwerte and Diskarte: Notion of fishing, success and social relations  
in two Palawan villages, Ushijima & Zayas eds. Fishers of the  
Visayas, Manila, UP press

Yano, T.

1994 The characteristics of Fisherfolk Culture in Panay :From the View of  
Fishing Ground Exploitation Usijima, I & Zayas, C.N. ed. Fishers of the  
Visayas, Quezon City, University press of U.P.

## 謝辞

ドドンをはじめイビサン町の多くの友人たち、また食事の世話から体調の管理に至るまで心配りをいただいたガボール医師夫妻、現地イロンゴ語の家庭教師を務めて頂いたオリン嬢に心からの感謝を贈りたい。フィリピン大学留学中から現在に至るまでご指導いただいている Eufrazio C. Abaya 先生ならびに C N. Zayaz 先生、小川英文先生(東京外国語大学)、大村敬一先生(大阪大学)には折に触れて研究の指針を教示して頂いた。また学部以来ご指導頂いている矢野敬生、蔵持不三也の両先生には遅々として進まぬ筆者の研究に対し辛抱強くご指導頂いた。本論考のもととなった論文査読の先生方、発表の度に有益なアドバイスと強烈なモチベーションを与えて頂いた東京フィリピン研究会の皆さんにも心から感謝したい。

## 付記

1998年3月、8月及び1999年3月、7月、9月の調査にあたっては文部省科学研究費補助金国際学術研究(09041004)「フィリピン・ビサヤ海域における民俗技術・知識の動態的運用に関する社会人類学的研究」(代表者：牛島巖)をあてた。ここに記して謝意を表したい。